

第3章 不本意な歲月——都、郷里、都、そして旅

[第3章その一]

治平^{じへい}2年 [1065年]、蘇軾^{そしよく}30歳。

治平3年 [1066年]、蘇軾31歳。

治平4年 [1067年]、蘇軾32歳。

熙寧^{きねい}元年 [1068年]、蘇軾33歳。

熙寧2年 [1069年]、蘇軾34歳。

■ 【03-1-001】謝蘇自之恵酒

【解題】蘇軾は鳳翔府から治平2年2月に都に帰還し、次の仕事は地方に出るのではなく、都において判登聞鼓院^{はんとうぶんこいん}という職務に携わるようになった。「登聞鼓」とは、皇帝に直接訴えたいことがある場合に鳴らす太鼓で、皇城の門外に置かれた。実際に「登聞鼓」を打って訴え出て救われた人の記録が多数残っている。蘇軾が新たな仕事に就いたのと同じ月に、弟の蘇轍^{そてつ だimei ふうすいかん}は大名府推官を授かった。大名府は都の北東150km余りのところにある政治的に重要な都市である。兄弟は久しぶりに再会したのもつかの間、弟はすぐに都から出て行ってしまったのである。蘇軾はこのあと都に1年余りいたのだが、不思議なことに、その間に詠んだとされる詩はわずかに4首しかなく、出来栄もあまりよくない。この項の表題に掲げたのは、蘇自之^{そじし}という人が酒を贈ってくれたことに対する謝礼の詩。蘇自之がどのような人なのか、どのような経緯で酒を贈ってくれたのかわかっていないが、ここでは、蘇軾が都で職を得たのを祝して蘇自之が贈ったとの推測に基づいて読んでおくことにしよう。

【訳文】

「高潔な人、高士は酒を憐れむ」

これは唐の韓愈の説である。

私には別の説がある。

「酒は必ずしも高士を憐れむものではない」

莊子にはこゝろ説がある。

「酔っ払いには車から落ちて怪我をしない、

それは酒の作用で精神が完全な状態になっているからだ、

とはいえ、天の道を得た方が精神はより完全になる」

これにも私には別の説がある。

「道に達した人、達人には欠けるところがないのだから、

どうして、より完全になるのを求めたりしようか」

ある酒飲みはこっそり飲んで酔いつぶれ、

ある酒飲みは飲むとやたらと威勢がよくなり、

ある酒飲みは酒を盗んでまでも飲もうとして役人に捕まり、

ある酒飲みは飲んで死んだらその場にすくりに埋めてくれと従者に鍬を荷わせていた。

世間とはかく奇異なことを好み、

そうした連中をあたかも賢者であるかのように持ち上げる。

唐の杜甫にしても、

詩を得意とする八人の香兵衛を詩に詠み、

酒樽を見るとすくりに涎を流したり、

頭に冠を載せない無作法なことを平気でしたり、

「酔うとは禪に逃れることなり」といってみせたりした人を、

あたかも仙人であるかのように称えた。

最も笑うべきことではなからうか。

私はいまこのように思う。

「飲んででも飲まなくても、

心の月は白く輝いて常に全き円であるのがよい。

時に客人があれば酒を酌み、

そうでなければ、酒を無理に去るまでもなく、忘れていけばよろしい」

我が一族の蘇^そ先生が深い心で、

百里の遠方から二甕^{ふたかめ}のお酒を送ってくださった。

そこで私はこう申し上げたい――

「私はお酒はいただきません。世間が同じでも私は異なります」

なんぞとってお高くまるよりは、

同じとか異なるとか論じるのに疎い方がまして、

ごたごたいえばうたけ肝^{かんじん}心要^{かため}のものを失ってしまうのだ。

結局のところ、

酒があるなら辞退しないのがよろしいわけで、

醒めているのと酔っているのとどちらがよいかなどと、

理屈をこねる必要はないのである。

【補足】〔(1) この詩は、結局のところ何がいいたいのかよくわからない。たくさん
の故事をもとに、酔っ払いの千鳥足のようにあれこれ思案する過程を楽しめばよいの
だろう。多数の故事に説明を加えるのは煩わしいので、大意が通じる程度に大まかに
訳した。(2) 官員は地方でのキャリアを10年余り積んで後に都での職に就けたなら、
かなり幸運な方だと感じるのであって、蘇^そ軾^{かん}の伯父の蘇^そ渙^{かん}のように地方を巡り続けて

一生を終える者も少なくなかった。蘇軾^{せいか}は制科に合格してただけに昇進スピードは著しく速かったのだが、英宗皇帝^{えいそう}は実はもっと早く自分の近くに召し寄せて重く用いたいと考えていたようで、李廌^{りたい}の随筆『師友談記』^{しゆうだんき} [→作品番号 01-2-005] はその間に事情を次のように伝えている]

李廌^{りたい しゆうだんき}:『師友談記』

東坡^{とうば} [蘇軾] はこのように話された。

英宗皇帝^{えいそう}はすくにも私に知制誥^{ちせいこう} [詔勅の草稿を書くのが職務で、将来の宰相候補が就くことが多い] を授けたいとお考えになった。すると韓琦^{かんき}がこのようにいわれた。

「蘇軾の才は、時間をかけて大きくなる器であります。いずれは天下の用に当たることになるはずですが、朝廷においてじっくりと育てるべきであります。天下の誰もが蘇軾の才に納得して畏れるようになり、皆が朝廷で重く用いるべきだと考えるようになったところで、おもむろに用いるならば、人々はもはや蘇軾に異論を唱えるようなことはしないでしょう。いまにわかに用いたならば、天下の人々はまたしかるべきこととは思わないで、禍をもたらすことにもなりかねません」

それで、英宗はいわれた。

「知制誥^{ちせいこう}がまたためなら、しばらく修起居注^{しゅうきょこちゅう} [皇帝の日々を記録する係] を与えるのはどうか」

「その職は知制誥と隣同士でありますから、また早すぎます。しばらく館閣^{くわく}に置いて仕事を与え、後日に抜擢しても遅くはありませんでしょう」

韓琦^{かんき}がそのようだったので、私は(試験を受けて)直史館^{ちよくしかん}を授かった。

【補足】^{そう} [宋の朝廷では、優れた人物を重要な職務に就ける前に、学術をもって皇帝に仕えるアカデミーの一員として館閣^{くわんかく}に置いて館職^{くわんしよく}を授けることが多かった。蘇軾は治平^{じへい}2年5月に試験を受け、最優秀の三等で合格し、「直史館^{ちよくしかん}」の一員となった。これより蘇軾の肩書には「直史館」の3文字が加えられ、並みの官僚とは異なることが一

目で知れるようになった。このときの試験で書いた論文が残っているが、いずれも作品番号 02-1-003 以下で見た制科せい かのときの論文と同様、儒学の古典的知識に基づいて議論を展開している。このように、蘇軾は、国家の中樞で用いられるようになる過程で何度も試験を受け、そのたびに古典的教養が問われてきたわけで、我々としては果たしてそれが有用な人材をふるい分けるのに有効な手段であったのだろうか疑問を持たずにはいられない。むしろ鳳翔府での勤務実績ほうしょうを評価したほうがよいのではないかと思ひもするのだが、実績の評価には主観が入りやすく、またよい評価を得るために賄賂が横行するような弊害が生じて、かえって不適格な人間が出世しやすいというおかしなことになってしまうのが、中国の官僚政治の長い経験から出てきた結論で、それで客観的な試験が重視されるようになったのである。ならば、古典的教養ではなく、より実務的な知識を問うような試験を課すべきであるという考えが当然のことながら出てくるのであって、それを提案したのが王安石おうあんせきであった。そのすこぶる合理的な改革案に対して蘇軾がどのような意見を提示するかは後に見ることになる]

■ 【03-1-002】 入館

【解題】直史館ちやく し かんの職場に入ってから7月初めごろに詠んだのだろう。

【訳文】

黄省こうしやう もん か しやう〔門下省〕の文書が道山どうざん〔直史館〕に配布され、

鐘鼓けんしやうの音だけが静かに建章〔宮城〕に響きわたる。

天辺ぎやくじやの玉樹〔宮城の樹木〕から西風が起って、

新たな秋が世の中へと到るのである。

【補足】〔宮城の厳かな雰囲気を重々しい言葉を用いて表現しようとしただけの詩で

ある]

■ 【03-1-003】 妻王氏墓誌銘

【解題】 ここまで見て、都での蘇軾の官界生活は順風満帆のようであるのだが、実は5月28日に妻の王弗おうふつが亡くなっている。父母が亡くなると礼の定めとして職を辞して足掛け3年の喪に服すのだが、妻の死にはそのような規定はなく、蘇軾は妻の仮の葬儀を行いつつ、館閣に入るための試験を受け、入館したのだった。これより1年余り後に書いた妻の墓誌銘をここで読んでおこう。この一部はすでに作品番号 02-2-029 として見ている。

【訳文】

治平二年[1065年]五月二十八日、趙郡ちやうの蘇軾おうの妻王氏は都で死去した。その七日後、都の西で仮に棺に納めた。翌年の六月、眉州びの東北の彭山ほうざん県安鎮郷の可竜あんちんごう里かりゅうりにある母の墓所の西北八歩のところに埋葬し、私蘇軾がこの墓誌銘を記した。

君の諱いみなは弗ふつ。眉州せいしんの青神の人で、郷試きやうし[科挙の一次試験]に合格した王方おうほうの娘として生まれ、十六歳で軾のもとに嫁いできた。子は邁まいかゝる。

君は嫁す前には、君の父母に仕え、嫁してからは我が父と母に仕えた。いずれのときも謹肅きんしやくとの評判を得た。

嫁したその初めは、書物を知るとは自分からはひと言もいひなかつた。軾が書物を読むとき、君はずっとそばにいて、音読するのを聞いていた。理解しているかどうかはわからなかつた。その後、軾に忘れたところがあると、君はすぐに思い出させてくれた。他の書物について尋ねてみると、どれもおよそのことを知っていた。それで君が賢く慎ましかであると思った。

軾が官職を得たのに伴って鳳翔ほうしやうに来てからは、軾が外で為すことを、君は問うこともないのに詳らかに

知っていた。

君はこういった。

「あなた様はいまお父様から遠く離れています。よくよく慎まなければなりません」

君は、我が父が私を戒めた言葉を日々に語ってくれた。

軾が客と外で話すのを、君は壁の向こうで聞いていて、客が帰ると客とのやりとりを再現してこういった。

「あの人はいつもどっちつかずのことしかいいません。あなた様がどう思っているかを見て、それに合わせようとしているだけです。そのような人のいうことは聞くに値しません」

あるいは、軾と一生懸命に親しくなろうとしている人がいると、君はこういった。

「あの人とはきっと長くは続かないでしょう。すぐに意気投合するような人は、離れるのもきっと速いのです」
いつも君のいった通りになった。

君が亡くなるまでの一年の間、思えば耳を傾けるべきことがたくさんあった。見識豊かな人と同じであったのだ。

君が死去したのはまだわずかに二十七歳であった。君が死去すると我が父はすぐに軾に次のように命じた。

「君の妻が君の艱難に従ったことを忘れてはならない。いつか必ず君の母の近くに埋葬するのだ」

それから一年で我が父は亡くなり、軾は謹んで我が父の遺令に従って君を葬った。

君はこの墓地で我が母にまみゆることとなった。私は我が母に会うことはできない。ああ、哀しいことである。私は永く母に仕えることができずにいる。君は死んだとはいえ、我が妻としての勤めを為すことができる。だから傷まずともよいのか。ああ、哀しいことではないか。

【補足】[冒頭で、いつものように「眉州の蘇軾」ではなく「趙郡の蘇軾」と書いている。蘇洵そじゆんが書いた『蘇氏族譜引』そしぞくふいん [→作品番号 01-2-001] を見ると、蘇軾の先祖は趙州出身の蘇味道そみどうにまで遡るとされている。蘇軾は特に改まったときに「趙郡の蘇軾」と称することがある]

■ 【03-1-004】 贈蔡茂先

【解題】 蔡茂先さいもせんという人に贈った詩。蔡茂先がいかなる人物かはわかっていない。

【訳文】

都は三日の雨続き、

足止めを食らってしまった人を訪ねる。

漢かんの時代に国政の乱れを避けて、

門番ぼいふくに身をやつた梅福という隠者がいた。

貴君はまさしくそのような人。

長い鬚よに裸足の姿で、好き事を語り、

優美な言葉を並べた新しい詩を見るならもう春の気分。

唐とうの時代の名宰相りひつであった李泌は、

不遇の時期にはひたすら書物の整理をしていた、

漢の時代に『史記』しきを書いた司馬遷しほせんにも、

各地の史跡を訪ね歩く日々があった。

貴君を勧める手紙を書くのを惜しむものではないけれど、

いまは不用意な交際は慎むべきではなからうかと心配している。

【補足】 [蔡茂先さいもせんは志を得られずにひとまず都を去ることになったのだろう]

■ 【03-1-005】 弁法帖

【解題】 直史館ちよくしかんには治平2年夏から治平3年夏までいたのだが、そのころの作品は前

述のようにごくわずかしかない。これは数年後に書かれたものであるが、直史館時代のことが記されているのでここで見ておくことにする。法帖〔書の手本として先人の筆跡を集めたもの〕の真偽の見分け方について論じている。

【訳文】

書の真偽を見分ける難しさは、人の脈を聴き分けるのに似ているだろう。その美し悪しであれば知ることができるとしても、必ず正しく書いた者の名を言い当てられるというのは皆過ちである。……〔過ちの二例を挙げる〕……私はかつて秘閣で墨跡を観たところ、どれも唐の時代の人が模写したもので、ただ『鵝群帖』だけが王献之の真筆のようであった。後に、李瑋の家で謝尚や王衍〔二人とも晋代の人〕など数人の書を見たところ、世俗から超然と抜きんでていた。その印記から考えるに、唐の王涯の家の本であったのだろう。その他にも唐人が模写したものがあり、どれも蓄えておくべき価値があった。

【補足】〔(1) 宮中には貴重な文化遺産が保存されていて、直史館時代にその一部を見る機会に恵まれ、蘇軾は書画の鑑賞眼を養ったようだ。王献之の名は作品番号 02-4-021 で見ている。後にまた『鵝群帖』についての考察を見ることになる。(2) 李瑋は名家の息子で皇帝の娘を娶って裕福であった〕

■ 【03-1-006】 蘇廷評行状

【解題】治平3年春、父の蘇洵は病に伏せ、欧陽脩が3度にわたって見舞いの手紙を送ってくれたり、薬を分けてくれたりしたのだが、4月25日に亡くなった。58歳であった。蘇軾も弟の蘇轍も官職を一時的に辞めて、父の棺を携えて郷里に帰り、足掛け3年の喪に服すことになった。欧陽脩が書いた蘇洵の墓誌銘をここで見ておこう。

【訳文】

おうようしゅう こ はしゅうぶんあんけんしゅぼ そくんぼ しめいへいじょ
 欧陽脩：『故霸州文安県主簿蘇君墓誌銘並序』

蜀に一人の君子がいて、蘇君という。蘇君の諱は洵、字は明允、眉州眉山の人である。

蘇君は義を行い、一家をきちんと修め、郷里の人々に信望があり、広く蜀において知られることとなった。

蘇君は至和から嘉祐のころに都に来て、さらに二人の息子の蘇軾と蘇轍を連れて上京した。その際に、私欧陽脩は、蘇君が書き著した文章二十二篇を得た。それを朝廷の人々に献呈すると、皆は争うようにしてそれを次々に別の人に読ませようとした。二人の息子は科挙の進士科に及第し、しかも成績は上位だった。二人の息子の文章もまた世に称賛されるところとなった。

眉山は都から西南に数千里の彼方にあり、蘇君父子の名はその地に隠れていたのだが、一日にして都の人々に知られ、父子三人の文章はついに天下を席卷するに至った。

蘇君の文章は広い知識に裏打ちされ、力強く、普遍性があり、読む者はぞくぞくと恐ろしいばかりに感じて、これは一体どのような人が書いたのだろうかと思像せずにはいられなくなる。ところが、実際に蘇君を見ると、あまりぱっとせず、とても鋭いことをいいそりにない。話をしてみると、一緒にしばらくいると、次第に敬愛すべき人だと思えてきて、ふともらす言葉にはと感ずるところがあり、ならはと問うと、尋ねれば尋ねるだけ無限に答えが返ってくるようになるのである。

ああ、この蘇君こそ純明篤実の君子というべきである。

蘇君の曾祖父を蘇祐といい、祖父を蘇杲といい、父を蘇序という。三代にわたって世に顕れることはなかった。蘇序に三人の息子がおり、蘇澹、蘇渙、蘇洵といい、蘇渙は進士科に及第した。

蘇君は勉学を好まず、壮年に至っても書物を手に取ることがなかった。父はそのような蘇君を自由にさせていたので、郷里の親族は訝しく思い、どうして放置しておくのかと、ある人が尋ねた。父は笑って答えなかった。蘇君もまた気にすることがなかった。

蘇君は二十七歳になると、突如として発奮し、それまで付き合っていた連中と交わりを断ち、家に籠って書物を読み、文章を書く練習を始めた。歳月を積んで科挙に挑み、二度落第した。制科にも挑ん

で失敗し、故郷に帰って、こういって嘆いた。

「受験のための勉強は学ぶに値しない」

それまでに書きためた数百篇の文章を全て燃やし、門を完全に閉ざして書物に没頭し、数年の間は筆を持たず、文章を作ることはなかった。儒学の経典、諸子百家の著作等々を大いに究め、古今の治乱成敗は何によるのか、聖賢の窮達出処の機微はどこにあるのかを考え抜き、その本質を把握し、溢れるほどに知識を蓄えても、なおそれを抑えて、内より外に出すことはなかった。

長い時間を経て、あるとき、

「もうよからう」

そのような思いがふとよぎると、筆を手に持ち、たちまちにして数千字の文章が生まれた。書けば書くほど、縦にも横にも、上にも下にも自由自在に動きまわって、出では入り、速く駆け、速く駆け、必ず深くまた細微なところに至って初めて止まるのだった。

思うに蘇君の才能は豊かで、その発露が遅かったのは慎ましやかであったからで、ひとたび時機を得るや、真髓を掴み取ったのである。

蘇君が都に来ると、人々は一斉にその賢を尊び、その文章を規範とした。父子三人が揃って名を知られたことから、特に「老蘇」と呼ばれるようになった。

始めに私は蘇君の文章を皇帝に差し出し、紫微閣しびかくの一員に招こうとしたのだが、蘇君は辞退した。そこで秘書省校書郎ひしよしょうこうしよろうの職を用意した。たまたま宋朝が始まって以来の礼に関する書物を編集する作業が始まっていたことから、蘇君は霸州文安県主簿はぶんあんしよぼという名目上の職に就いた上で、その編集作業に従事し、『太常因革礼』たいじょういんかくれい一百巻を完成させた。ところがその書を皇帝に差し出して労が報われる前に、蘇君は亡くなってしまった。没したのは治平三年四月戊甲、享年五十八であった。皇帝はそれを聞かれると哀れみ、光祿寺丞こうろくじじょうの名譽職を賜り、公費で船を用意させ、その棺を載せて蜀の地に葬るよう命じた。

蘇君は程文応ていぶんおうの娘を娶り、三人の男児が生まれた。長男の景先けいせんは早くに亡くなり、次男は軾、三男

は轍である。三人の女兒が生まれたが皆早くに死んだ。孫は邁まいと遅ちがいる。文集二十卷と『謚法』三卷がある。

蘇君は人とよく交わり、人の危難をよく救い、ある人が死んで孤児が残ったときには憐れんで養ったので、村の人々は蘇君には徳があると称えた。

蘇君は最後に『易経』を好み、

『易経』は深遠な書物で明らかになっていないところが多くあり、これまで学者は牽強付会の説を出して混乱させるばかりであったので、それを取り除くことで聖人の本来の主旨が明らかになる

といて、『易伝』という著作に取り組み、しかしまだ完成に至らなかった。

治平四年十月壬申〔二十七日〕、蘇君は彭山の安鎮郷可竜里に葬られた。

蘇君は遠い田舎に生まれ、学問が成るのが遅かったことを常に嘆いていた。

「私を知る者は、ただ吾が父と、欧陽公だけだ」

だから私以外に墓誌銘を書く者はいないのだ。

その銘に曰く、

蘇氏の先祖は唐の世に顕れた。それは欒城の人で、官の仕事で眉州に来てそこに留まり、子孫が繁栄して、曾祖父のころから郷里においてその仁徳が称賛されるようになった。偉大にして明らかな蘇氏の才は蘇君に至ってその文章において大いに発揮された。蘇君には文章があり、さらにその子があった。朽ちることのないものを遺し、その子孫はいよいよ盛んになるであろう。ああ、君の字は明允、その通りに明らかにして亡びることはないというべきである。

【補足】〔蘇洵が亡くなった直後に、弔問に訪れた司馬光に蘇轍が懇願して母の墓誌銘を書いてもらった。その訳文は作品番号 01-2-017 の中で見ている〕

【解題】蘇軾と蘇轍は6月上旬ごろに船で都を発ち、大運河を使って南に向かって長

こう
江に出て、流れを遡って故郷を目指した。船には父に棺とともに、ほぼ 1 年前に亡くなった妻の棺も載せられていた。大きな荷を携えて大河を遡るのは容易ではなく、半年かけてようやく三峽さんきやうに入った。明けて治平4年1月8日に英宗皇帝えいそうが亡くなり、その子の神宗皇帝しんそうが即位した。そのときもまだ旅の途中であった。ようやく眉山県びざんに到着したのは4月に入ってからで、その後は、葬儀の準備に忙しく過ごしたようだ。その中で、少しばかり文章を書き記している。祖父そじよの蘇序の伝記をまとめたのを見ておこう。

【訳文】

こう いみな じよ あざな ちゆうせん び びざん ちゆう らんじやう
公の諱は序、字は仲先、眉州眉山の人であった。その先祖は趙郡の欒城からきたという。公の曾祖父そきんを蘇鉞そきといい、祖父を蘇祐そこうといい、父を蘇杲そこうといった。その三代はともに官に仕えることはなく、皆世に隠れた徳があった。曾祖父の代から、義を為し施しを好んだことで郷里に知られ、公に至ってますます評判が高かった。しかし公は、自分は先祖に及ばないと思っていた。

こう どう とう しょう けんとく しよく おう もう
公の父は唐王朝の末に生まれ、周王朝の顕徳年間に亡くなった。その頃、蜀の地では、王氏と孟氏が順に皇帝を称していたが、公の父はその朝廷に仕えることはなかった。

こうの父はかつて蜀の都せいとの成都どうしに遊び、ある道士に出会った。道士は人を遠ざけて公の父だけにそっとさやいた。

「若い人よ、君には優れた徳がある。わしと君にはある縁がある。わしは百物を変化させる薬方を会得した。世が乱れてもこの薬方があれば自分の命を全うできるだろう」

そういって、その術を授けようとした。

公の父は笑い、

「僕はそれを学ぼうとは思いません」

道士は驚き、

「わしは天下を往来し、誰にもいまのようなことを語ったことがない。わしは何でも分かっていると思っていたが、君が学ぼうとは思わないといったのはまことに思いもよらなかった」

道士はそう言って去り、それっきり会うことはなかった。

公は若いときから、大らかで小さなことにこだわらず、本を読んで大略がわかればそれでも閉じてしまった。人より一步下がり、施しを好み、人が危難に遭遇すると、自分自身に対してする以上の面倒を見た。衣食に少しでも余裕があると、人のためにすぐに使い、たちまちこたえてしまうのだった。それでいつも困窮し、しばしば飢えと寒さに困らされた。それでも一度も悔いることはなかった。施して残りがあると、

「これは困っている人のための使い余した」

と、いよいよ惜しむことはなかった。

ある凶作の年に、公は農地を売って飢民を救った。豊作の年が巡りると、助けられた人は公のために農地を買い戻そうとした。公はいった。

「私はもともと売りたいから売ったまでだ。そなたのために売ったのではない」

公は、知り合いであろうかなかろうが、人とすぐに打ち解け、笑って腹藏のない話をした。つまらない人間が公を侮り欺いても、怒ることがなかったのだから、人々は不思議に思った。

そう宋の統治が蜀に及んだ初めに、りじん李順が反乱を起し、眉州は反乱軍に攻囲された。公はこのとき二十二歳で、武器を手に城壁の上で戦った。反乱軍の攻撃がいよいよ厳しくなったときに、たまたま公の祖父が病気で亡くなり、家族は泣いばかりでどうしたらよいかわからなかった。公だけは落ち着いて死者を送る礼を尽し、そのありさまは平和なときと変わらなかった。祖母がひどく気落ちしていたので、公はごく穏やかにこゝろに入った。

「朝廷が民を見捨てることはありません。賊は必ず破れます」

実際に反乱はすぐに収まった。

その後の慶曆年間に、皇帝は州や郡に対して学校を建てるよう詔を下した。蜀の人々は、朝廷が蜀

の人を採用してくれるようになると喜び、学校ができたなら自分の子弟を真っ先に入れようと待ち構えた。

公は笑って、

「お偉いさんが格好を付けたいだけのことだ」

といい、子供等が入学しようとしても止めた。

このころ郡吏は横暴で、民を苦しめたので、公はそれを批判する詩を作った。

子の蘇^そ 洵^{かん}が朝廷に仕え、公は大理評事^{だいりひょうじ}という名誉職を授かった。慶暦七年五月十一日に家で亡くなった。七十五歳だった。八年二月に、眉山^{しゅうぶんきょうあんどうり} 県修文郷安道里の先祖の墓の近くに^{しよくほう} 葬られた。職方員^{いんがいろう} 外郎を贈られた。

史^し 氏を娶り、史夫人は公に先立つこと十五年で亡くなった。公が亡くなったときに、蓬萊^{ほうらい} 県太君^{けんたいくん}を贈られた。

三人の男子がいて、長男^{せん}が澹^{たん}で、官に仕えることなく、公に先立って死んだ。

次男^{かん}が洵^{かん}で、科挙に合格して官員となった。洵は赴任したところで必ずよい評判を挙げ、任地から去ると、人々は洵を偲^{かん}んだ。ある人は、洵を漢の時代の優秀な官吏^りになぞらえた。利州の任地で官職に就いたまま亡くなった。

三男が軾^{しけん}の父、諱^いは洵^{けん}である。洵^{けん}は霸州^は 文安^{ぶんあん} 県主簿^{しゅぼ}で終わった。

洵^{かん}が蜀の閬州^{かんしゅう}の知事になったときに、眉州からさほど遠くないことから、公は息子の仕事ぶりを見に行った。洵がきちんと正しくしているのを見て喜び、数日間そこに滞在した。閬州の人々は、公が賢人であるのを見て喜んだ。

公は晩年に詩を作るのを好み、巧みであることは求めず、いつも即興で、自分の思いをそのままに詠んだ。亡くなったときには数千首の詩が遺された。

娘が二人いて、長女^{とすいゆう}は杜垂裕^{とすいゆう}に嫁ぎ、次女^{せきようげん}は石揚言^{せきようげん}に嫁いだ。男子の孫が七人いて、位^い、份^{ぶん}、不^ふ 欺^き、不^ふ 疑^ぎ、不^ふ 危^き、軾^{しけん}、轍^{しやく}という。

唐が滅んで五代の乱れた世になったとき、蜀では学問をする者が少なくなり、学問をしても郷里に留ま

って敢えて出仕しようとはしなかった。

公がその子の渙に学問をするよう命じると、学んで至らないことはなく、渙はついに進士に及第した。渙が官員となって郷里に帰って来ると、土地の人々は皆で出迎え、その栄えある姿を見て、蘇の家の子に見習って学問をするよう子供等に教えた。これより眉山県では学問をする者が千余人にまで増えたのである。

しかし、軾の父だけは学問に目を向けず、壮年に至っても書物を手にすることかなかった。公はそのような息子に何もいわなかった。ある人が、

「どうして放っておくのですか」

と、問うと、何も答えなかった。しばらく後になって、

「息子は学ばずにはいられなくなるだろう」

と、いった。すぐにその通りになり、軾の父は学問に努め、ついに世に名を顕した。

公に見識があり、人に施すことは郷里の間で知られていたが、世の中で大きな仕事をしたわけではなかった。特に幸運を得ることはなく、世間にその名が聞こえるようなこともないままに老いて亡くなった。しかし、その功名は小さなものであったのだろうか。

いにしよ古の賢人、君子にも、やはり名が顕れることなく、世に伝えられることなく終わった人達がたくさんいた。我々が知るのとはぐわすかな者だけだ。公に伝えられることがないのは、ただ公が僻遠の地で一生を過ごしたからだけではなく、その子孫が公のことを人に語ろうとしなかったからだ。だから、その始めから終わりについて、為したことの大概をここに記録し、もって当世の君子にお見せするものである。

■ 【03-1-007】 書摹本蘭亭後

【**解題**】中国で最も名高い書しよといえ、王羲之おうぎしが書いた『蘭亭集序』らんでいしゅうじよであるとされている。それを模写したものを蘇轍だいいめいふが大名府で手に入れ、郷里に持ち帰った。蘇軾はそれらにこの短文を書き添えた。なお『蘭亭集序』の真筆は、それを酷愛した唐の太宗皇とうたいそう

帝が自分とともに墓に埋めてしまったので、後世には模写したものしか伝わっていない。

【訳文】

……[模写にある幾つかの文字の異同を記す]……かつて私は別の写しを見たが、これよりもわずかにばかりきちんと整っているのだから、これは下書きであったのかかもしれない。しかし、放曠自得なところは、遠くにこれに及ばない。

弟がこれは河朔[大名府]より持ち帰ったところ、宝月大師惟簡がきて、これをもとにして、綿州の僧の意祖に頼んで石に刻みたいといってきた。

治平四年九月十五日。

【補足】〔(1) 惟簡の名は作品番号 01-1-002 ですすでに見ているように成都の僧で、郷里に帰ってきた蘇軾に会いにきたのだらう。(2) 父の蘇洵は、墓誌銘に記されていたように治平4年10月27日に郷里の墓所に、妻の程氏の隣に埋葬された。また、蘇軾の妻の王弗もその近くに埋葬された。蘇軾兄弟は墓所のまわりに松の苗を自分で植えるなどして墓所を美しく整えた。埋葬の前に、墓所を作るのに必要な磚が揃わなくて困っていたときにある人に助けられたというエピソードが残っている。真偽のほどはわからないが、ざっと訳しておこう。〕

【訳文】

銭功：『澹山雜識』

私が十三歳のときに、東坡[蘇軾]が我が父のもとを訪れ、世間には知られていない隠れた豪傑がいるという話をした。私はその豪傑の名を忘れてしまったが、代々眉山に住んでいたという。

東坡は、その父を葬る期日が迫りつつあるなかで、墓を作るのに必要な磚がまだ用意できていなか

った。東坡が人々に相談すると、皆がいには、

「あの人に会ってみたらよろしいでしょう。きっと何とかしてくれます。ただ、いつも獵に出ていますし、人里離れた山林に住んでいて、会うのは容易ではありません。でも、試してみはどうでしょうか」

そこで、東坡は二日ばかり探して、ようやくその住まいにたどり着いた。日の暮れ方まで道の傍らで待っていると、数人の者を従えて馬に乗って帰ってきた。まだ若い人で、馬からおりたところで声を掛けると、その者はいったん中に入って衣服を改めてから出てきて、門の前で礼儀正しく挨拶した。中に案内されて坐が定まると、訪問のわけを尋ねたので、東坡はありのままに話した。

「それならたやすいことです。お食事を御用意しましたので、今日はこちらにお泊りください。期日に合わせて必ず整えましょう」

しばらくすると、食事が運ばれてきた。どれもが今日仕留めたばかりの新鮮な肉であった。大きな盃で、ふんだんに飲みかつ食べた。食事が終わると、寝所に案内された。

翌日は召使が馬で山の下まで送ってくれた。

三日ばかりの間は何事もなく、もう明日には墓地を掘り下げる日になった。東坡は後悔し、最初に教えてくれた者に苦情をいおうかと思った。とうとう夜になっても磚はまだひとつも届けられなかった。

翌日の明け方に、その墓地を見に行くと、五万枚もの磚が整然と積み上げられていた。人々は驚嘆した。

葬儀が終わってから、礼を言いに行こうとしたのだが、その住まいをついに見つけることができなかった。

真に隠れた豪傑だったのである。

【補足】[蘇軾がこの話を語ったという相手の^{せんこう}錢功の父がいかなる人であったのかは審らかにしないが、蘇軾が話すのを錢功が聞いていたのが事実であるのなら、例によって蘇軾は若干脚色しておもしろく語ったのだろう。いずれにしても、墓所が地元の人々の助力を得て作られたのは間違いない。磚^{しきがわら}は棺を納める石室に作るのに使われ

たのだろうか]

■ 【03-1-008】 油水頌

【解題】 父を埋葬した翌年の熙寧元年 [1068年] 4月8日、先に長安で会った劉徹
[→作品番号 02-1-015] が亡くなり、蘇軾は祭文を書いた [訳は省略]。7月に喪が明
けると、成都せいとに行った。成都では惟簡いかんや侯溥こうほに会ったりした。侯溥は成都の学校の学
官であった。侯溥と会ったことが記されている作品を見ておこう。

【訳文】

熙寧元年七月二十八日、侯溥こうほから嘉祐院かゆういんでの食事ぶつがに招かれ、そこで長老にお目にかかり、仏牙
[仏陀の齒]を見せてもらった。趙郡ちやうの蘇軾は長老のために仏牙の頌歌を作った。

水在油中、[水が油の中にあると]

見火則起。[火を見て水は跳ねる]

油水相搏、[油と水は打ち合い]

水去油往。[水は油から去って行く]

湛然光明、[水は静かな光を湛え]

不知有火。[火があったとはわからない]

在火能実、[火はその実態を明らかにし]

内外浄故。[内も外も浄化される]

若不經火、[もし火を経なかったならば]

油水同定。[水と油は一緒のまま]

非真定故、[真と非が定まっていけないので]

見火復起。[火を見ると跳ねあがるのである]

【補足】 [水との油の関係を歌ったものがどうして仏牙の頌歌になるのか、訳者にはまったくわからないのだが、何か深い意味があるのだろうか]

■ 【03-1-009】 四菩薩閣記

【解題】^{せい と} 成都で^{い かん} 惟簡に会ったのは、ある貴重な絵を託すためであった。そのことがこの文章に記されている。

【訳文】

我が父は元来、物の好みがなく、何も無い部屋であたかも齋戒しているかのように静かに過ごし、ときたま言笑するだけだった。それでも画だけは好み、父の門弟は父を喜ばすのが難しいので、父の好みそうな画を持って来て、どうにかして父の喜ぶ顔を見ようとした。それで、父は庶民でありながら、公卿のようにたくさんの画を所蔵するようになった。

かつて^{ちやうあん} 長安に、^{とう} 唐の^{げんそう} 玄宗皇帝が建てた仏教の経典を納める堂があった。四方に扉があり、八枚の扉の板に^{ご どう し} 呉道子が画を描き、表側には^{ぼ さつ} 菩薩が、裏側には^{てんのう} 天王が描かれ、全部で十六体の像があった。唐末に^{こうそう} 黄巢の乱に遭い、賊の放った火がその堂に迫った。その名は忘れてしまったが、ある僧が、兵火の中から四枚の板だけを抜いて逃げた。ところが、重いし、うまく背負うこともできなかったので、賊に迫られて全部を失ってしまうのを恐れ、二枚を荷台にして二枚を運び、西の^{ほうしやう} 鳳翔にまで逃げた。とある僧舎に身を寄せ、板をそこに留め、それから百八十年が経過した。この板をある商人が十万銭で得て、私のところに見せに来た。私はそれを手に入れ、父に贈った。父の手元にはすでに百余りの画があったが、この四枚の板を手にしてからは、これが一番であると思うようになった。

治平四年、父は都で亡くなり、私は都から船で^{べん が} 汴河を下って^{わい が} 淮河に入り、さらに^{ちやうこう} 長江を遡って郷里に帰った。そのときに四枚の板も船に載せて持ち帰った。

服喪の期間を終えると、いつも親しんでいる僧の惟簡い かんがこのようなことをいった。

「愚僧は、師よりこのようなことを教わりました。故人が最も大切にしていたものを惜しまずに喜捨するのが最も功德のある行為なのです」

私はその説を用い、父が最も愛していて、私が捨て去るに最も忍び難い物として、四枚の板以上の物はないので、それを寺に喜捨することにした。

そこで惟簡に向かってこのようにいった。

「これは唐の皇帝が守り切れず、賊によって焼かれてしまいそびになりました。まして私などが守れるはずがありません。天下にたくさんの物を蓄えている人を見ますに、三代にわたって守れた者がどれだけいるでしょうか。そもそも始めは、それが欲しくもなかなか得られないのを苦しみ、得てからはたただ失うのを恐れます。それなのに、その子孫に至ると、衣食に替えずにおくことは稀です。私は自分で考えるにこれを長く守ることはできませんので、貴僧に差し上げようと思います。そこで伺うのですが、貴僧はこれをどのようにして守るお考えでありますか」

惟簡はこういった。

「我が身に代えて守りましょう。我が眼を潰されても、我が足を切られても、この画は決して奪われないように守ります。このようにすればよろしかろうかな」

私はいった。

「それでは十分はありますまい。貴僧が生きておられる間だけしか守れないではありませんか」

惟簡はいった。

「御仏にお願いし、鬼神に守ってもらいましょう。これを取って人に与えようとする者は仏法によって罰せられます。このようにして守るのならよろしかろうかな」

私はいった。

「それでも十分ではありませんまい。世には仏を信じない者、鬼神を蔑む者がおりました」

「ならば、どのようにしたら守れるのでしょうかな」

「私が貴僧にこれを与えるのは、父のために喜捨するのです。天下には父のない子はいません。父のためであると知って、取るとする者がいるでしょうか。もしそうだと知っていながら、画を見るだけでなく、自分の欲を叶えようと取ってしまうのは、その愚さにおいて、^{こうさい}黄巢の乱で都を焼いた賊と同一でありましょう。それほど愚かであれば、子孫が生きながらえるのは難しく、まして画を所蔵し続けることなどできるわけがありません。取るか取らないかは人によるとしても、貴僧に託すこの画はそもそも取ることでできない物なのです。貴僧はこの画を守るために何を勉めたらよいのかといったら、取ってはならない物であると、そのことを示すだけでよいのではありませんかな」

こうして惟簡に画を与えたところ、惟簡は百万銭で大きな建物を作って画を内に納め、その上に我が父の画像を置いた。私はその費用の二十の一を負担し、翌年の冬までに完成することを期待した。

かくて熙寧元年十月二十六日にこのように記した。

【補足】〔(1) 惟簡^{い かん}と蘇軾^{そ せき}が実際にこの通りの問答を交わしたのかどうかはわからないが、親しい友人として楽しく語り合ったのは間違いない。(2) このころに蘇軾は青^{せい}神^{しん}の王^{おう}介^{かい}の娘、王^{おう}閏^{じゆん}之と再婚した。最初の妻の王^{おう}弗^{ふつ}と同族、同世代で、ことのき21歳であった。妻が亡くなった後に、その妹や従妹と再婚するのはかなりよくあることだった。(3) 郷里にいる間に、王^{おう}箴^{しん} [字は元直]、王^{おう}淮^{わい}奇^き [字は慶源]、楊^{よう}宗^{そう}文^{ぶん} [字は君素]、蔡^{さい}褒^{ほう} [字は子華] といった人々と交遊があった。王^{おう}箴^{しん}は蘇^そ軾^{せき}の妻になった王^{おう}閏^{じゆん}之の弟で、王^{おう}淮^{わい}奇^きはその叔父である。楊^{よう}宗^{そう}文^{ぶん}と蔡^{さい}褒^{ほう}は郷里の先輩である〕

■ 【03-1-010】書王石草書

【解題】蘇^そ軾^{せき}は11月初めころに眉^び山^{ざん}を発ち、都に向かった。墓所や生家の管理を、従兄の蘇^そ不^ふ危^きや楊^{よう}濟^{せい}甫^ほ [→作品番号 01-2-044] 等に託した。蔡^{さい}褒^{ほう}等が荔^{れい}樹^{じゆ}を植え、「この木が実をつけるころにまた帰ってこられましたら、一緒に食べましょう」といって、蘇^そ軾^{せき}を見送った。今回の都への旅は、第1章で見た長^{ちやう}江^{かう}を下るルートではなく、鳳^{ほう}翔^{しやう}

から長安^{ちやうあん}を経由する北回りの陸路をとった。10年余り前に父に連れられて科挙を受け
に都に上ったときと同じである。官員としての最初に赴任地であった鳳翔に着くと大
勢の人々に歓待された。その時の様子を、張舜民^{ちやうしゆんみん}が『画墁録』^{がまんろく}に記録している。張
舜民はこれより3年前に科挙に合格したばかりで、若い人々にとって蘇軾兄弟は憧れ
の大スターであったことがわかる。

【訳文】

ちやうしゆんみん がまんろく
張舜民：『画墁録』

私が鳳翔^{ほうしやう}に赴任したのは熙寧^{きねい}の初めてであったが、公[蘇轍]とその兄は喪が明けて東に旅に出て、
道すがら鳳翔にやってきた。そこで、数日間留まり、画を見たり、名所を訪ねたりした。人々はその姿を
見ようと、官舎^{みやび}に入った。雅であること仙人のようであった。

【解題】蘇軾は12月の終わりに長安^{ちやうあん}に着き、范仲淹^{はんちゆうえん}の息子^{ぼんじゆんじん}の范純仁^{せきそうじよ}や、石蒼舒^{おう}、王
頤^いなど数多くの人々と会った。王頤の持つ『醉道士図』^{すいどうしず}を再度見て跋文を付け加えた
ことは作品番号 02-4-022 で見ている。そして、石蒼舒、王頤とともに韓琦^{かんき}に会った。
韓琦は朝廷の重鎮であったが、国政の改革に強い意欲を持つ新皇帝^{しんそう}の神宗とは何かと
齟齬があり、前年の9月に宰相を辞し、都を離れて長安にきていたのだった。その韓
琦の前で記した小文。

【訳文】

おうい せきそうじよ かんき
王頤と石蒼舒が韓琦公の前で草書をしたためると、公はいわれた。

「お二人は馬列の先頭で笛を吹く人に似ておられますな」

座客は誰もその意味がわからなかったので、公は自ら解いてくれた。

「大変な妙手でなければ、誰も敢えて先頭で笛を吹いたりしませんからな」

熙寧元年十二月晦つごもりに書く。

【補足】[韓琦かんきもときにはユーモラスなことをいうのだった]

■【03-1-011】上韓魏公乞葬董伝書

【解題】熙寧2年[1069年]1月、長安ちやうあんで新年を迎えた蘇軾が都へ旅立とうとしていると、みずぼらしい姿とうでんで董伝が訪ねてきた。董伝は、作品番号 02-4-019 で見たように、詩文の才能がありながら、科挙に合格できずに貧窮に苦しんでいた人物である。蘇軾は今回の旅ほうしやうで鳳翔に立ち寄った際に、董伝は父が亡くなり極貧の中で喪に服していると聞き、整屋ちゆうしつ県にある家ぼせいけいに人[恐らく馬正卿であろう]を遣って弔意を伝えていた。その謝礼にわざわざ長安にまでやってきたのである。すると、董伝は、自分は間もなく韓琦かんきの推薦によって朝廷に出仕できるとか、そのことを聞き知ったある官員が媚にしてくれるとか、およそ不可解なことを言い出した。蘇軾は年末に韓琦と会ったばかりで、いまの韓琦の立場からして、無名の人物を朝廷に推薦するなど考えられないことであった。蘇軾は董伝の話を無下には否定しないで、励ましの言葉を与えて別れた。それから3カ月ほど後のこと、すでに都で官職に復帰していた蘇軾のもとに董伝の計報が届き、蘇軾はこの手紙を韓琦に送った。

【訳文】

再びお手紙差し上げます。私軾は近ごろ秦中[長安、鳳翔のあたり]の友人からの手紙で、董伝君が三月に病死したと知りました。私は先年岐下[鳳翔]で官職に就いたときに初めて董伝君と会い、それから今にいたるまで七八年になり、董伝君のことはよく知っております。

その人となりは、世事には通曉してはおりませんで、ひたすら書物を読むことだけを嗜み、記したものは蕭

ぜん しつじん

然と出塵の姿があります。詩に至っては、董伝君と肩を並べられる者を求めましても、いまの世には数人くらいしかいないでしょう。これらのことは私が申し上げるまでもなく、公[韓琦]が自ずと御存知であります。

かつて董伝君は、官職を得ることに公が力を貸してくれないと嘆いておりましたが、私は公が助力を惜しむことはないはずだと存じておりました。董伝君が至って薄幸でありましたのは、ただ官職についてだけではなかったのです。

今年の正月ことであります。私はそれより前に岐下を過りましたときに、董伝君が二曲[懿屋渠]で喪に服していると聞いて、その家に人を使わして弔意を伝えましたところ、董伝君はわざわざ長安にまでやってきて、駅舎で私に会ったのでした。董伝君は饑寒の窮状を述べ、何度も死にそうになったけれども、たまたま公を頼りに生きてきているのだと申しました。そして、このようだったのです。

「公が私を朝廷に推薦してくださっているのです。私には妻がいないのですが、近頃、彭駕部様[駕部は職掌名]が、公が私を推薦しておられると聞かれて、その妹殿との結婚を許してくださいました。喪が明けて官職を得られましたなら、妻も得て、これでいっぱしの人間になれるのです。全ては公からの賜わりものなのです」

私は董伝君が嬉し気に語るのを聞いて憂いに沈みました。官職に就くことと妻を得ることの二事は人が常に望むものでありますが、董伝君にとってはそれは常ならぬ福であって、恐らくは遂げられないだろうと考えたのです。いま果たして董伝君は亡くなり、まことに悲しい限りであります。書生の窮薄すること、これ以上のものがあるでしょうか。

董伝君の才器はもとより世事に役立つものではなく、譬えて言えば象や犀から得る珠玉のようなもので、饑寒を補うことはできずとも、泥土の中に置いておくべきものではないのです。それで公が推薦して下さることとなったのでありましょう。

いま董伝君はその父とともに亡骸が寺に置かれていまして、母や弟はどうか食べて行くことだけで精一杯で、到底葬儀を行うことなどはできないのであります。私や都におります数人の知人が銭を出し

合って、その家に贈ろうとしていますが、あまりにも微力であるために、用を為すに十分ではないのを残念に思っております。公がもしも憐れんでくださるのなら、敢えて他のことは望みません、葬るのに十分なようにだけはしていただきたいのです。ちょうど陳繹君が涇州に行くことになっていて、宋迪君が岐下におりますので、公からもしも頂戴できて、私が集めたものに合わせて陳繹君に預けてくださるのなら、宋迪君が葬儀を行ってくれて、その余りをその家に与えることができるであります。

董伝君がこれまでに作った詩文は、その家に人を行かせて集め、諸公に献呈したいと考えています。

以上のこと、なにとぞよろしく願ひいたします。

【補足】〔董伝が、韓琦の推薦で官職を得られると語ったのは、恐らく貧窮の余り抱いてしまった妄想であったのだろう。蘇軾はそうとわかっているけれども、韓琦の助力を引き出すために、董伝の言葉を信じているかのように手紙に記している。韓琦が蘇軾からの手紙を受け取ってどのようにしたのかは伝わっていないが、きっとそれなりのことはしたはずである〕

第3章 不本意な歲月——都、郷里、都、そして旅

[第3章その二]

熙寧^{きねい}2年 [1069年]、蘇軾^{そしよく}34歳。

■ 【03-2-001】 与子明兄

【解題】蘇軾^{そてつ}と蘇轍^{きねい}は熙寧2月の初めに都に着き、兄は2月のうちに、弟は3月にそれぞれ都での職務を授かった。その肩書を記すと、兄は殿中丞直史館^{でんちゆうじようちよく し かんこういんけんはんしやうしよ}誥院兼判尚書^{ごいんけんはんしやうしよ}祠部^{し ぶ}、弟は制置三司^{せい ち さん し じよう}條例^{れい し けん}検詳^{けん じやう}文字^{もん じ}である。都でこのような官職に就いたことを従兄^{じゆ けい}の蘇不疑^{そ ふ ぎ} [字は子明、伯父の蘇渙^{そ かん}の次男] に手紙で報告しているので、それを読んでおこう。

【訳文】

郷里を離れて、また都に至りました。いつもの怠け癖で、これまでお手紙を差し上げることもなく過ごしてまいりました。眉州^びより頂戴するお便りによって、兄上^{そ ふ ぎ} [蘇不疑] を初めとして皆様が御佳勝でありますことを遠く想い見ることができます。

私は二月中に官誥院^{かんこういん}を授かり、はなはた閑で、懶惰な私にはちょうどよいのですが、弟は制置司^{せい ち し}に置かれて、こちらは非常に重く難しい仕事であります。主上^{しん しよう} [神宗皇帝] は政治を改めることを強く求めておられ、財政が破綻状態にあることを憂慮して、この制置司を新たに設けられました。上には王安石^{おうあんせき}と陳升之^{ちん しょう じ}がおられますが、検詳官^{けん じやう かん}は力を合わせて知恵を絞り出さなければなりません。常に朝早くに出て、夜になって帰ってきます。それで私の職務が簡便であるのをひどく羨んでおります。

今年は科挙の二次試験の受験生が極めて多く、すでに四百人以上もきています。蘇林^{そりん}は学業がすこぶる進展していますので、望みがあります。……

【補足】〔(1) 2年前に20歳で即位した神宗皇帝^{しんそう}は、先々代の仁宗皇帝^{じんそう}の頃から先送りになっていた国政上の諸問題を一気に解決しようとの強い意欲をもって国政に臨み、徐々に重鎮を退けて新進の若手を呼び寄せていたので、朝廷の顔ぶれは大きく変わりつつあった。先代の英宗皇帝のもとで副宰相を務めていた欧陽脩^{おうようしゅう}は、英宗皇帝の即位以来続いた不毛の論争に倦み疲れ、新皇帝が即位した直後に地方の知事として都に外に出て行き、同じ年の9月に韓琦^{かんき}は宰相職を辞した。そして、神宗皇帝は改革の担い手として、地方官を歴任していた王安石^{おうあんせき}を大抜擢した。士大夫の間での王安石の評価はもともと高く、朝廷の多くの人々が推薦したものであったのだが、王安石が改革のプランを提示すると、朝廷の主だった者は挙って反対した。神宗皇帝はあくまでも王安石とともに改革を実行するとの強い意志を示し、蘇軾^{そく}が都に到着する直前の2月3日に王安石を副宰相に据え、旧勢力と王安石とを融和させることを期待して富弼^{ふひつ}を宰相職に復帰させた。さらに、改革の実行部隊である制置三司条例司^{せいちさんしじょうれいし}を設け、王安石と陳升之^{ちんしょうし}がその担当大臣となった。その下に改革の基礎となる法案を練り上げる仕事をする検詳文字^{けんしょうもんじ}という部署を設け、そのトップに新進気鋭の呂惠卿^{りょけいけい}を採用し、蘇轍^{そく}はその一員となった。つまり、神宗皇帝も王安石も、改革を進める上で蘇轍の才能に大いに期待していたのである。王安石の改革案は非常に多岐にわたり、複数の法を組み合わせて、国政を一気に大きく変えて行こうとするものであったから、その法案の検討は複雑で難しい仕事で、しかも神宗皇帝は早くに改革を始めたいと強く考えていたから、蘇轍等は休む間もなく働かなければならなかった。そうした事情が蘇軾の手紙に記されているのである。(2) 終わりに名が挙がっている蘇林^{そりん}は蘇軾の甥の世代の一人である。祖父の蘇序^{そじょ}には、蘇澹^{そたん}、蘇渙^{そかん}、蘇洵^{そじゆん}の3人の息子がいて、長男の蘇澹は官職に就くことはなく、蘇位^{そい}と蘇侑^{そいつ}の2人の息子がいた。蘇林は蘇位の子で、このころ30歳ほどであった。父の蘇位は10年ほど前に亡くなっているので、蘇林は自分の家系を

大きくしていきたいとの願いをもって科挙に挑んでいたのである]

■ 【03-2-002】 送任佖通判黄州兼寄其兄孜

【解題】 この詩は2月ないし3月の作。郷里の先輩の任佖にんきゆうが黄州こうの副知事となって都を出て行くのを見送ったもの。任佖は兄にんしの任孜とともに科挙に合格し、郷里の偉人として「大任だいにん」、「小任しょうにん」と呼ばれていた [→作品番号 01-1-009]。この詩には兄の「大任」へのメッセージも込められている。

【訳文】

にんこう
任公兄弟は我が州の豪傑である。

若かり頃は、一日に千里を走る馬のように意気盛んで、
人脈など不要と、我が道を歩んだ。

残念なことに、要路の誰かにも知られることなく、
その才能が十分に活かされないまま老境に達してしまった。

しょうにんこう
小任公とはこの前お会いしてから十年、

いまでも学び続けて万卷の書を読破し、

その詩はますます美である。

これから行かれる黄州こうしゅうは峡谷に挟まれた小さな郡で、
葦原や竹林の中に、茅葺屋根の家が数軒ばかりあるという。

どのようなところに置かれても、

己の天命を知る者は憂いたりしないものだ。

恥じなければならぬのは賢人を推薦しない者どもだ。

へいせん だいにんこう
平泉県におられる大任公はさらにうら悲しいといえようか。

六十歳にしてなお書生のような貧乏暮らした。

かつて民衆から慕われた地に葬られるのならそれで十分とひそやかに願うのか、

それとも、もはや誰に遠慮することなく振る舞うべきなのか、

一生の終わりどころを考えておられることだろう。

小任公に託して大任公に我が思いを伝えたい。

獰猛な鷹に向かって、俺にだって爪があると、

威勢を張るようなことだけはなさいませんように。

【補足】 [(1) この詩はかなり強調されているのだろうが、^{こう}黄州は小さな町で、^{にんきゆう}任佖がそこに赴任するのはどうやら不本意なことであったようだ。後に、蘇軾は罪人として黄州に行くことになる。(2) 任佖とこの前に会ってから 10 年になると歌われている。10 年前の作品番号 01-1-009 では、兄の^{にん し}任孜と会ったことが詠まれているので、任佖とはまた別の機会にどこかで会っていたのだろう。(3) 兄の任孜のいる^{へいせん}平泉県は^{しよく}蜀の^{かん}簡州に属している。黄州は^{ちようこう}長江の中流に位置し、簡州はその遙か上流である]

■ 【03-2-003】秀州僧本瑩静照堂

【解題】上の詩と同じころの作品。^{しゆう}秀州から上京してきた^{えくくう}慧空が、自分の寺にある^{せいしょうどう}静照堂について語ったのを聞いて詠んだ詩。

【訳文】

鳥は囚われても飛ぶことを忘れない。

馬は繋がれても走ることをいつも思っている。

貴僧は堂に^{せいしょう}「静照」の名を付け、

静かに身の内を照らし見ることの意義を説く。

鳥や馬は、静せいの中に置かれてじっとしてられるだろうか。

飛びたい走りたいとの思いに任せるのがよいのではなからうか。

世間の人は俗事はわずらわしいという。

しかし、俗事がなければなくて悲しく思ふものだ。

世間の人は貧乏は身を疲れさせるので勘弁だという。

しかし、富貴になればなつたで精神を消耗させるようなことがあるものだ。

貴僧は「静照」を誰と一緒に実践したいのか。

「市井に隠遁して、このまま老いて死んでも悔いはない、

何より楽しいのは、小さな舟を浮かべ、それに身を任せることだ」

などという人達か。

そうしている者だって、

時が巡るなら世に何かしかの働きをしたいと思っていたりするものだ。

それは貴僧がいう「静照」の仲間ではないだろう。

まして私に向かって説いても何にもならない……。

【補足】 [原詩はこれほどあからさまに嫌味な感じではない。むしろ慧空えいくうに敬意を表しているを読むこともできなくはない。ユーモアなのか皮肉なのか、人によって受け止め方が異なるような微妙で危ういあたりのところが、詩としては面白いのだろう。慧空がこの詩を読んで、喜んだのか、笑ったのか、不快になったのかはわからないが、口が災いして蘇軾は何人もの敵を作っている]

■ 【03-2-004】 石蒼舒醉墨堂

【解題】 都にくる途中の長安ちやうあんで、石蒼舒せきそうじよと会っていたが [→作品番号 03-1-010]、書しょの収集家である石蒼舒は集めた書を納めるための建物をかねてから作っていて、それ

が完成して「^{すいぼくどう}酔墨堂」と名付けた。それに寄せた詩。

【訳文】

人の一生で、憂い患うことが始まるのはいつなのか。

それは、字を知ったときである。

だから、自分の姓と名が**ほぼ**書けるようになったら、

字を学ぶのはもうやめるべきなのだ。

まして、草書の速さを誇るなど何の意味もない。

見る人の口を**あんぐり**と開けさせ、

どう読んだらよ**い**のかと困らせるだけだ。

わかっているから、私も草書を**とかく**速く書きた**がり**、

おかしいことをしていると自分で笑ってしまう。

貴君も同じ病で、いつ治るとも知れない。

何しろ貴君は**このよう**に**い**っている。

「草書ほど**楽しい**ものはない。

心が一切何物にも**捉**われない**最高**の境地と同じだ」

貴君は**近頃**、堂を建てて「^{すいぼく}酔墨」と名付けた**という**。

美酒を飲んで百の憂い**を**消す**くらい**に、

墨を用いるのは**素敵**だ**という**意味なのだろう。

蓼食う虫も**好き好き**で、

泥や炭が御馳走に**感じ**られてしまう**病気**があると聞く。

貴君が書を好むのは、**なるほど**そ**い**うもので、

もしかすると**それどころ**ではないのかも**知**れない。

何しろ貴君が使い古した筆は一つの丘を作るくらいになっているし、
貴君が興を催して筆を揮ったならば、
駿馬が走り出してたちまち中国全土を踏破してしまうような勢いで、
瞬時に何百枚もの紙が費え去ってしまうのだ。
私はというと、その書には型に基づき法則性はなく、
点や画はただ手の勢いによるので、
読む人にああでもないこうでもないと言われ、面倒をかけさせてしまう。
そんなものであるのに、貴君は評価してくれて、
紙の切れ端に書いた一字だけでも欲しいと言ってくれる。
貴君は、昔の草書の達人に並ぶほどだが、
私は、自分一人であまいと誇って、世の人の首をかしげさせる下手くそ名人だ。
要するに、池いっぱい墨を使い切るような努力をしていないのだから、
絹などは字を書くために用いるのではなくて、
布団に詠えた方がよっぽどよいのである。

【補足】 [これは蘇軾の詩の中でもよく知られている作品で、特に冒頭の「人生識字憂患始、姓名粗記可以休」〔人生^{じんせい}字^じを識^しるは憂患^{ゆうかん}の始^{はじ}まり、姓名^{せいめい}粗^ぼ記^{しる}せば以^もって休^やむ可^べし〕の二句が印象的である。これは、秦の終わりに劉邦と天下を争った項羽の故事を踏まえている。項羽は勉強が嫌い、字などは自分の姓名が書ければ十分なのだといって学問を棄てた。蘇軾は、士大夫の学問観とは正反対の項羽の言いぐさを、敢えて真理であるかのように最初に掲げて人を驚かせているのである]

■ 【03-2-005】 王頤赴建州錢監求詩及草書

【解題】 長安^{ちやうあん}で石蒼舒^{せきそうじよ}とともに会っていた王頤^{おうい} [→作品番号 03-1-010] が都にきて、

すぐに建州^{けん}で錢を鑄る仕事をするよう命じられて赴任地に向かった。王頤が別れ際に蘇軾に詩と草書を求めたので、この詩を書いて与えた。

【訳文】

貴君と初めて知り合ったのは長安^{ちやうあん}に近い武功^{ぶこう}県だった。

冬の役所に泊まって樽酒を傾け、

酒闌^{たけなわ}にして灯が尽きてしまったのだけれど、

それでも話は尽きなかった。

従者は立ったまま眠りこけ、ぱったりと屏風を倒した。

貴君は、不死の奥義を学ぶべきだと、熱心に私に説いた。

瞳が四角い山人から授かったその奥義を聞かせてくれたのだが、

私は心に悟らずにいたので、

酔っての夢から醒めたら、何もかもわからなくなっていた。

それからというもの、憂患に身を削られ、

心持ちはいつも霜に枯れた草のようなありさまだ。

羨ましいのは、貴君の顔色がますます若々しく、

外欲に引かれることが少なく、心の内側が充実していることだ。

貴君が、いふ奥義はこういうものだったのだろうか。

「河車^{かしゃ}で水^みを挽いて脳^その黒^{くろ}きに灌^{そそ}げ、

丹砂^{たんさ}を火に伏して頬^ほの紅^{こう}に入れよ」

都で再会した貴君は、東に行くに際してこのようにまやく。

「いつになったら籠の鳥の身から解放されるのやら

せめて仙薬の原料となる丹砂^{たんさ}の産地に赴任できればよいのに、

銅の産地で銭を鑄る仕事を仰せつかってしまったよ

というようなわけで、離別の情を籠めてこの詩を送るのだけれど、

草書は書く暇がないので許してもらいたい。

【補足】〔(1) 王頤^{おうい}と武功^{ぶこう}県で語り合ったのは、鳳翔^{ほうしょう}府で奉職中のことであつたのだらう。王頤の説く奥義はこのままでは意味不明で、いろいろな注釈があるのだが、それを詳しく研究したところで、理解できるものではないのだらう。(2) 地方官は任期を終えると一度都に戻って在任中の業務を報告し、その後で次の職を与えられるのを待った。運が悪いと、懸命に就職運動をしても仕事にあぶれた。王頤の場合はすみやかに次の職が得られたのだから幸運な方だったのだらうが、この詩を見ると不本意なところもあつたようだ。(3) 宋朝は科挙^{そうちよう}の制度を整備して、優秀な人材を官僚組織に取り込むことに成功し、それは国家の安定化にすこぶる役立った。野に不満分子を残さぬように、科挙では本来必要とする数よりもやや多めに合格させ、官僚のポストの数も増やした。それでも官職に就きたいとする希望を満たすには不足していた。官僚の定員増は業務の非効率化と国家財政の圧迫^{じょうり}につながり、「冗吏^{じょうひ}、冗費」〔官員のだぶつきと、国家支出のいたずらな増大〕は国政上の大きな問題となつていた。蘇轍は、もうひとつ「冗兵^{じょうへい}」〔軍事費の果てしない増大〕を加えて、「三冗」が喫緊の課題であることを論じ、その文章を神宗皇帝^{しんそう}が読んだことで、先の職務を授けられたのだった〕

■ 【03-2-006】 議学校貢挙状

【解題】4月、神宗皇帝^{しんそう}は学校^{がくこ}と科挙^{こうきょ}〔当時の用語では貢挙が一般的〕に関する意見を広く朝廷の人々に求めた。王安石が意図する改革は多岐にわたり、その一つに官僚を採用する仕組みの大幅な変革もあつた。その提案があまりにも大胆だったので、皇帝は関係方面に意見を求めたのである。それに応じて蘇軾が書いたのがこの意見書で、

王安石の改革案に対して批判的であることを初めて明らかにしている。王安石は、将来的な目標として、教育機関を充実させて学校の卒業資格をもって科挙に替えることを掲げ、それに向けて順次制度を改めて行こうとした。科挙には幾つかの科があり、それぞれで試験の内容が異なりはしても、いずれも古典の知識を必要とし、必ずしも官僚としての能力を測り、実務に欠かせない知識の有無を問うものにはなっていなかった。そのような試験で採否を決めるより、学校で実務能力をきちんと養った者を官僚として採用した方が国のためになるというのが王安石の考えで、極めて合理的である。しかも、そもそも学校は古の偉大な為政者〔先王、あるいは三代の王〕に由来するもので、学校制度の充実は儒学に根深い尚古主義にも合致していた。王安石の基本方針は、一見すると反論が難しいように思えるのだが、蘇軾がどのように議論を展開したのか、この意見書の見どころであろう。

【訳文】

学校と貢挙〔科挙〕の利害を検討して、おのおの意見書を出すようにこの勅書に^{わたれ}応じて、臣は伏して以下のように申し上げます。

人を採用する手段の基本は人を知ることにあります。人を知る手段の基本は実際にできるかどうかを見ることにあります。国の君主と大臣に人を知るだけの才があり、朝廷が実際の職務を課して試す政治をきちんと行っているのなら、末端の役人に至るまで適切な人間がそこにいないということはなく、まして学校や貢挙において不都合が起こるはずありません。その場合には、臣が思いますに、学校や貢挙は今のままであっても十分過ぎるでありましょう。もしも国の君主と大臣に人を知るだけの才がなく、朝廷が実際の職務を課して試す政治をきちんと行っていないのなら、高い地位に就いてしかるべき人間すらないという困った事態となり、まして学校や貢挙においては不都合だらけとなってしまいます。その場合は、臣が思いますに、古の理想の制度をそのままもってきたところで、どうすることもできない

でしょう。

国のあり方には時代によって好いときとそうでないときとがあり、制度がしっかりと機能しているときもあれば廃れてしまっているときもあります。安らかに治まっているときには、暴君といえども制度を廃れさせることはできません、制度が厭われているときには、聖人といえども元に戻すことはできません。風俗が変化するのに応じて法制度は変わっていきます。譬えていえば、黄河こうがの流路が移り変わるようなものです。河が行こうとするのに順じてこれを治めるのなら、治水の功は得やすく、逆に河が行こうするのを無理やり元に戻そうとしたのでは、治水の功は得られません。三代の聖人が今の世にまた生き返ったとしても、人を選び才能を養うやり方は、いまの時代に適合したものでなければならず、必ずしも古のままではありませんでしょう。

学校を興すことについては三十年ほど前の慶暦年間けいれきにも行われ、いずれそれが充実して行くのを待つということでありました。しかし、今日に至りますと、その目論みは空しく名だけが残っております。今も陛下は、徳を具え実務にも長けた人間を必ず得ようと、制度を変え風俗も変えようとなさっています。学校を大いに興すとなれば、そこに民の力を集めて、勉学の徒を養わなければなりません。そして、学校を卒業した者を役人に取り立て、裁判も軍事もこれらの者と謀ることになりましょう。学校の教えに従わない者は遠方に遠ざけ、採用することなく年を取らせることになりましょう。このようなことになれば、天下はいたずらに混乱し、民衆の苦しむところとなるのではないのでしょうか。あるいは、それほど大きくは変えずに、時間とともにそこそこ有益なことがあればよかるうと望むのなら、慶暦年間に行ったのと何が異なるのでしょうか。

わたし臣が思いますに、いまの学校は現在の制度のままでよろしく、先王が定めた学校が細々ながらも続いているということでも十分なのであります。

次に貢挙そうきょうの制度はどうでしょうか。宋朝そうちょうにおいて貢挙を行ってきて百年余りになります。王朝の治乱盛衰はもとより貢挙の仕組みによって左右されてきたものではありません。陛下が御覧になって、貢挙の仕組みは宋朝の初期のころといまでどちらがより精緻でありましょうか。文章はどちらがより優れていましよ

か。文武の才がある者はどちらが多いでしょうか。天下の人々はどちらがより知恵がついているのでありましょうか。この四点で比べて、制度の長短を議論して結論を得るべきでありましょう。

いま学校と貢挙を変えようとする議論はまんのわずかなところしか見ていません。ある者はいいです、地方から徳行のある者を選出することにして、文章を課して選抜するのは止めよう。ある者はいいです、専ら政策を論じさせて詩賦を作らせるのは止めよう。ある者はいいです、唐の時代の故事に従い、評判のよい者を採用できるようにするために、受験生の名を隠して採点するやり方は止めよう。ある者はいいです、経典の一部だけを示して前後を唱えさせるような試験を止めて全体の意味を論じさせるようにしよう。これらはどれも一部分だけしか見ていません。

わたし

臣は先に挙げた四点について以下のように申し上げます。

第一に貢挙の仕組みについてであります。もしいまの貢挙と異なって、徳行の優れた者を採用しようとしたならば、君主も自ら身を修めて行動を正しく、民衆に対してどのような行為を好ましく思つかを明らかに示すことになるでしょう。孟子はこのようにいっています。「君主が仁を行えば民も仁を行い、君主が義を行えば民も義を行う」。すなわち君主の向かうところに天下も向かうのです。徳行をもって採用するとなれば、君主が好ましく思うのと同じような行為を自分もしているとあからさまに見せよう。民は競うようになり、それは天下の人々に挙げて偽りの仁、偽りの義を行わせることとなるでしょう。君主が親孝行の者を採ろうとしていると知れば、勇む者は自身の股の肉を裂いても親を養うような行為をし、そこまでの意気地のない者は親の墓の脇に檻樓小屋を建てて、墓守をする姿を見せようとするでしょう。君主が節約を重んじる者を採ろうとしていると知れば、おんぼろの車に乗り、痩せた馬に引かせ、粗末な衣を着て、粗食で我慢することでしょう。とにかくお上の好みに合わせるためなら何でもするのです。徳行を採るよう制度を変える弊害はここに極まりましょう。

第二に文章についてであります。政策を論じる文章は有用であるが、詩賦は無益であるという主張があります。実際の政治との関係でいうなら、試験で政策を論じようが詩賦を作ろうが、等しく無用であることに変わりはありません。無用であるとわかっていながら、宋朝の初めから試験で文章や詩賦が課

せられてきたのは、有用か無用かの判断ではなく、要するに人を採用するための手段として用いられてきたからです。人の発する言葉によって人を採るのは宋朝で始まったのではなく、古の聖天子の堯も舜もそしていました。『書経』にこのようにあります。「言葉を見て採り、実際の功績で試す」。古の堯や舜のときから、人を採ってその地位を高めていくに当たって言葉によらなかったことはなく、人を試すにその功績によらなかったことはありませんでした。あくまでも政策を論じさせて賢愚と能力の有無を判断するのがよいと主張する者がいるのなら、臣はこのように申し上げます。近世の士大夫で最も華美な文章を書いたのは楊億でありました。しかし、楊億は忠清かつ剛直かつ誠実な人物でありました。華美な文章を書くからといって人間として劣るということはないのです。古の制度に通じて政策に詳しい者として孫復や石介がいました。しかし、二人は現実離れの奇矯な説を唱え、それは実際の政事に施せるものではありませんでした。唐からいまに至るまで、詩賦に長けて名臣であった者は数え切れないくらいたくさんいます。それなのに、どうあっても詩賦を試験で課すのを止めなくてはならないのでしょうか。經典の全体の意味を論じさせればよいとの議論がありますが、近年、經典の参考書が整備され、試験問題となるような項目には漏れなく模範解答が示されています。試験でそれを適宜繋ぎ合わせて答案を作れば、試験官を簡単に騙すことができるでしょう。しかも、その文章は詩賦と異なって細かい規則に従う必要がありませんから、学びやすく作りやすく、よって精緻にものを考える鍛錬をすることがありません。安直に暗記するだけで精緻にもの考えることをしてこなかった者が官僚になって、もともと自分で考えることを得意としない役人の上役となったときに、国の政事はどういうことになるのでしょうか。それは詩賦を課して人を採用した場合よりもずっと弊害が大きいのではないのでしょうか。

第三に、文武のオのある者の多さです。唐の時代には、貢挙の試験委員長に強い権限があって、その人がよしとした人物が採用されました。評判の高い人物を採ることができて、世論を満足させたという美点はありませんでしたが、賄賂をもって権威者に請願するという害が横行しました。文武のオのある者が一見してたくさん採用されたようではあっても、それらの人々は権威者の恩に靡き、私的な派閥を生み、唐の半ばからは党派による争いを生むことになりました。少しもよい採用の仕方ではなかったのです。

第四に、天下の人々はどちらがより知恵がついているかです。いま貢挙の幾つかの科を合格した者がたくさん部署で仕事をしています。文章を得意とする者は進士科^{しんし}を受け、書物の意味をよく理解する者は明経科^{めいけい}を受け、そのほか朴訥で器用でない者はまた別の科を受けます。人にはそれぞれに備わった才能があり、実際に政事に携わらせれば能力のあるなしは自ずと明らかになります。進士科を受けるものは日夜に経典、史書を広く深く学び、しかし実際に政事においてはそれで得たもののほんのわずかしか使っていません。だから、そのような勉強をしたところで無駄で、経典のおよその大義を理解すれば十分であるとの意見が出てくるのでありますが、それは実に粗雑な考えです。特に臣が陛下に願いますのは、遠く考える者、大きく考える者に意を留めていただきたいのです。衆才の中から、悪知恵の働く者を退け、必ず優れた者だけを選び出して、政治の根本をともに行うのならば、官僚を採用する細かい仕組みはさほど問題にはならないのです。……[以下に幾つかの故事を引いて議論を補強する]……

最後に臣が陛下にお願いいたしますのは、以下のような御指示があるますように。人を試すにはその言葉が正しいかどうか、人を採用するには実学[儒学の本流]を修めているかどうか、そして、広く諸分野の知識がある者は朴訥であっても退けないように、軽薄に流行の議論を追う者は器用であっても用いないように。そのようにすれば世の風俗は厚みを増し、学問は正しい方向に進むであります。忠実の士を得て、風俗の衰えによって国が傾いた過去の轍を踏むようなことがなければ、天下にとってこれ以上の幸いはないのであります。

【補足】[(1) 蘇軾がここで述べていることを、ごく乱暴に短く要約すると、制度に何らかの欠点があるとしても、現実に優秀な人材が国に集まってきているのだから、何も急いで変更する必要性はないだろうということである。事実として、蘇軾にしても王安石にしても、科挙がなければ政界で活躍できる可能性はほぼなかったのであるから、宋朝の科挙制度は十分な成功を収めてきたのである。考えてみれば、自分がそれによって選ばれた仕組みを変えるべきだと主張するのはなかなか勇気のいることで、

王安石は自身の立場に捕らわれない大局的な見方のできる人であったといえるだろうし、反発が大きかったことも容易に理解できるであろう。(2)「現実離れの奇矯な説」を唱えるところに例示された石介は、8歳の蘇軾を発奮させた詩を詠んだ人である[→作品番号 01-2-003]。(3) この意見書を読んだ皇帝がどのような反応をしたのかということが、弟の記した墓誌銘に書いてあるので、その部分を見ておこう]

【訳文】

そ てつ ほうけい し せんたんめい ほ し めい
蘇轍:『亡兄子瞻端明墓誌銘』

……王安石が科挙を変えようとする、皇帝をそれに疑問とし、兩制三館[朝廷の主たる者たち]に意見を求めた。公[蘇軾]の議論が皇帝に提出されると、皇帝ははたと気づいて、

「私はもとよりこれを疑っていた。蘇軾の議論を得て釈然とした」

と、いわれ、その日のうちに召し寄せて会い、

「朕をどのように助けてくれるのか」

と、尋ねられた。公は辞退しようとしたが、しどろもどろ留められて後に、

わたし ひそか
「臣が竊に思いますに、陛下は治政をはなはだ急ぎ過ぎておられます。意見をはなはだ広く聴かれ、人をはなはだ鋭く抜擢されておられます。陛下におかれましては、静かに物事の推移するのを待たれて、その後に応じられるのが願わしく存じます」

と、いった。

皇帝ははっとされて、その言葉を聴き入れ、

「卿の三つの指摘を朕は詳しく考えよう」と

と、いわれた。

王安石の一党は誰もがこのことを喜ばず、公に攝開封推官[首都の総務長官のような役]を命じた。多忙な業務で忙殺させて苦しめてやろうとしたのである。公の決断はすばやく正確で、その評判はま

すます高まったのだった。……

【補足】[このとき皇帝は22歳、蘇軾は34歳、王安石は49歳、富弼や韓琦などの重鎮はさらに上であったから、皇帝は若くて率直にものをいう蘇軾に心を魅かれたのは十分にあり得えただろう。皇帝は蘇軾を自分のより近くに置こうとしたが、王安石が喜ばなかったために実現しなかった。墓誌銘では即座に開封府に出向させられたように記してあるが、実際には半年ほど後の11月になってからであった。その間に、弟の蘇轍の方が先に朝廷から出されそうになっている。弟は改革を進めるための新法の条文を詳しく検討する部署に配属になり、深く知れば知るほど疑問が膨らみ、直属の上司である呂惠卿にそれをぶつけたのだが、呂惠卿はひたすら実施することばかりを急ぎ、一切取り合わなかった。ここで呂惠卿が真摯に向き合って、新法をよりよいものに磨き上げようとする方向性をもしも示したならば、その後の政治抗争はもっと違ったかたちになっていたのかもしれない。もともと蘇轍にしても蘇軾にしても国政の改革に意欲をもって上京したのであるから、2人が改革の担い手になる可能性は大きかったのである。しかし、呂惠卿という人は、後の振る舞いから判断するに、必ずしも改革の理念を理解して深く共感していたわけではなく、王安石が政治の実権を握りそのような勢いであるのを見て、王安石に付き従うことで己の政治的欲望を達成しようとしただけだったようである。呂惠卿にとって蘇轍の意見はただ邪魔なだけで、蘇轍をただちに排除しようとした。呂惠卿は、政敵と見なした者を巧妙に失脚させることにかけて稀代の才能を発揮し、改革推進の妨げになる者を都から一掃したのだった]

■ 【03-2-007】 李仲蒙哀詞

【解題】7月27日、李育〔字は仲蒙〕が亡くなり、後にこの哀詞を作った。李育は本文中にあるように、父の蘇洵の友人であった。

【訳文】

河南[洛陽]の李仲蒙君は、司封郎直史館をもって記室岐王府となつて、熙寧二年七月丙戌[七月二十七日]に都で亡くなつた。家は貧しく、突然の葬儀に、その同僚たちが支援合つて、棺に収めて郷里に帰ることができた。十月丙申、緱氏県において葬られた。

その子の李籲の使いが来て私に以上のことを告げた。

嗚呼、我が先君[蘇洵]は李君の友人であつた。その死を哭して詞がなくてよいはずがない。我が先君が初めて太常礼院に仕えたときに、李君は太常博士であつたので、朝夕に往き来して親しくした。

先君は人を誉めることはあまりなかつたのだが、独り李君のことは長者であると称えていた。李君の人物なりは敦樸愷悌で、博く学んで深く通じ、特に『詩経』と『史記』に詳しかつた。人と善く交わり、たとえ裏切られることがあつてもそれに報復するようなことはなかつた。かつて、李君と婚姻関係を結ぼうとした者がいて、理由もいわずに破棄してしまつた。それを聞いた者は憤慨したけれど、李君は意に介することなく平然としていた。先君はそのようするのは難しいことだと称えた。……[以下、官における経歴を略述する]……李君の諱は育、その先祖は河内の人で、高祖の代に緱氏県に移つた。亡くなつたとき五十歳であつた。

……[以下、哀詞の本文が続くが割愛する]……

■ 【03-2-008】 諫賈浙燈状

【解題】改革の進行とともに、旧勢力と王安石等改革派を融和させて朝廷を一つにまとめることはもはや不可能となり、10月、富弼は宰相職を辞して都から出て行つた。11月、蘇軾は首都開封府の総務長官に異動となり、王安石等はこれで蘇軾は激務に忙殺された何もいえなくなるはずだと考えた。しかし、12月、この意見書を皇帝に差し出した。これは次に見る文章に記してあるように、改革を本格的に批判する前段階と

して、皇帝がどれだけ自分の意見に耳を傾けてくれるかを確認めようとして書いたものだった。蘇軾がここで論じているのは、浙^{せつ}の地方で生産される灯籠^{せつとう} [浙灯] を、宮中の役人が安く叩いて大量に買い占めようとしていることの可否である。1月15日の上元節^{じょうげんせつ}に、町のあちこちに灯籠を飾り、夜それを見物^{まぶ}して歩くことが、宋の時代に入って盛んになり、特に都ではまことに華やかに行われるようになっていた。この年は、宮中でもたくさんの灯籠を飾ろうと、12月のうちから準備が進められていた。浙灯の買い上げは首都の治安にも関係があるということから、蘇軾はこの意見書を皇帝に差し出したのである。冒頭は蘇軾の肩書で、「殿中丞^{でんちゆうじやう}」は職務ではなく位を示し、「直史館^{しつかん}」は皇帝のブレン [館職^{かんしよく}] の一員であることを示し、「判官誥院^{はんがんこういん}」が本職で、「権開封府推官^{ごんかいほうすいかん}」は首都開封府の推官という職務に出向していることを示している。

【訳文】

殿中丞直史館判官誥院権開封府推官の臣蘇軾は文書をもって奏上いたします。

臣は先にお召しを受けて宮中に参り、陛下から直接次のようなお言葉を頂戴しました。

「館職^{かんしよく}にある者は全て、朕のために深く治乱を検討して、その得失を示し述べることに於いて、隠すところがあってはならない」

このときから、臣は同僚に会うたびに陛下のこのお言葉を申さぬことはありませんでした。そうするのは、お上の盛徳を称賛するためだけではありません。朝廷にいる者は臣のような者であっても、地位の上下によらずに、陛下は意見を聞いてくださるのたということを知らせて、ともに思うところを献じて、もって太平の功業を補佐するのに役立つようになってほしいと思わります。

思考いたしますに、実のない言葉だけで人を動かそうとするよりも、実のあるところを見せて、自分から動くように仕向けるほうがよいのであります。つまり、陛下のお言葉を広く言い知らせるよりも、陛下のお言葉を受けて、まずは臣が実行してみせるべきであります。そこで臣はまず天下に先んじて

ごくごく小さなことを試みて、もって陛下の聖明の一万分の一でも補うことができるものかどうか、そして、世の賢者のためには陛下が臣下の意見を採用して下さるものかの判断のもととなるものを提供しようと思念のであります。この試みによって罪を得て、万死するとも悔いはありません。

わたし 臣が聞きますところでは、宮中の内向きの仕事をするお使いの者[宦官]が陛下の御沙汰として開封府の役所にいますには、せつ 浙の地より産するとうろう 灯笼[浙灯]を四千余りお買い上げになるとのこと。役所は実際の価格をお答えしたところ、陛下の御意向としては、価格を下げてお買いになりたいとのこと、さらに四千余りという数は必ずなければならぬので、民には勝手に売り買いすることを禁じて、次の命令を待つようとのことでありました。

わたし 臣は初めてこのことを聞きましたとき、驚愕し信じることができませんでした。嘆息すること数日、心中密かに陛下のためにこの御沙汰を残念に思ったのであります。

わたし 臣は至って愚かであります。それでも、天下の人々が欲しがるものを全て尽くしたとしても、陛下が御心を経術の間に常に遊ばせて、堯や舜が示した規範に則って行動する楽しみには替えられないとされていることは存知上げております。そして、天下の玩ぶものを全て尽くしたとしても、陛下が天下を憂う御心を解くには足りないということも存知上げております。陛下はそもそも灯笼などをお喜びなされはしないのであります。つまり、これは太皇太后様と皇太后様のために孝行を尽くされようとのことでありましょう。とはいえ、優れた孝行は物にあるのではなく心にあるのでありましょう。

このことを民衆の一人一人に言い聞かせるのは難しく、民衆はあるいはこのようなことを言い出すかも知れません。陛下は御自分の耳目のお楽しみにために、民衆が必要としているものを奪い取るようしている。灯笼を売るような者は零細の民で、借金をし利息も払って灯笼を蓄え、この十日間ほどの間に売り切って生活費を稼ごうとの算段をしております。陛下は民の父母として、価格を増して高く買い上げることはあっても、価格を下げて安く買い叩くようなことがあってよろしいのでありましょうか。

これははなはだ小さい事ではあります、その本体ははなはだ大きな問題であります。陛下が価格を減じられるのは民衆とわずかな損益を争うというのではありますまい。無用な物を買上げるのになん

の費用を使うわけにはいかないからであります。無用な物であると、もしも御存知でありながら、どうしてそれをお求めになるのでありましょうか。たくさん費用を使うわけにはいかないを御存知でありましたら、どうしてお買いにならないということになさらないのでしょうか。

宮中の奥向きの故事を見ますに、上元じょうげんの節の灯笼については、宮中のしかるべき部署が時に応じて買い求め、その数は少なく、厳しく無理に民間から取り上げるようなこともありませんでした。費用は多くなく、民衆を騒がせることもありませんでした。臣わたしが願いますのは、先の御命令を取り下げて、ことごとく昔通りになさることあります。

都の民衆は陛下の深い恩徳にすっかり慣れ切っておりますので、少しでもそれが脅かされるようなことになりますと、すぐにも怨みが生じかねません。慎重にしなければならぬのではないのでしょうか。近頃、都にはあらぬ噂が流れております。科挙はこれからは間遠にしか実施されなくなるとか、都での酒の売買はお上の管轄下に置かれるとか、役人の俸給は減額されるとか、兵士の手当てが削られるとか……。これらの事は朝廷において決めてなどいませんのに、やかましく取り沙汰されるのは、陛下が民を大切される徳がまた下々の者の心に行き渡らずにいて、かえって厳しく税を取り立てよとの御意向があると民衆は思ってしまうためであります。いまこそは、朝廷は己を抑制して、民衆が勝手なことを言わなくなるよう努めるべきときであります。そうでありながら、朝廷のある者が、厳罰をもって民衆に対処するように勧めているのは、聖徳を損なうことこれ以上のものはないのであります。さらには、灯笼をお買い上げになる一件で、民衆がますます言い募るようにさせてしまっているのを、臣わたしは実に残念に思うのであります。

一方、今に至るまでに、国の様々な余分な出費はまた削られておらず、民衆の力は疲弊しております。灯笼のお買い上げの費用は、陛下のお手元の蓄えから出して、国庫から出すのではないとしても、いずれでありましても、もとは民衆の力に拠らないものはありません。平穏なときに不急の用に使うよりは、貯えて何かのときの備えとしておく方が勝るのではないのでしょうか。ですから、臣わたしは願いますに、来るべき灯笼の祭りも、お庭での遊宴も、宴席においての賜り物も、皆係の者を戒めて儉約していただ

ぎたく思います。

このごろ陛下の御意向で、皇族に対する臨時の賜り物を削減されましたか。これは実に陛下の至明至断の表れであるとともに、深く計り遠く慮って民のために近親への愛を割かれたことによるものでありましょう。そうではありましても、陛下にいま少しばかり密かに望むことがないわけではありません。自ら厳しく節減されて、身をもって天下の人々に先んじて実践していただくと思うのであります。君主でさえもこのようにしているのだから、まして我々とは思わせるようにしていただきたいのです。費えを省くだけでなく、民衆が怨むようなこともなくなるでしょう。

昔、唐の太宗皇帝は涼州に使者を派遣して、李大亮にその地の名立たる鷹を献じるようまのめかしました。李大亮がそれはできないといったところ、太宗は褒め、「臣下がこのようであれば、朕は何も憂うことがない」といいました。唐の玄宗皇帝は江南の地に使者を派遣して変わった鳥を取ってこさせようしました。倪若水はこのことを論じて、その使者を呼び返しました。また益州から贅沢な調度品を取り寄せようしましたが、蘇頲はその詔に應じませんでした。また、唐の敬宗皇帝が浙西から種々の贅沢品を取り寄せようしましたが、李德裕はお上に強く反対し、よってその沙汰は取り止めとなりました。

いま陛下のもとに唐の時代のこのような人が少しでもいれば、浙燈をお買い上げになることを必ず強く諫めたてでありましょう。また当該の部署に唐の時代のこのような人が少しでもいれば、浙燈を買う詔には必ず従わずにいたでありましょう。陛下の聡明睿聖は堯や舜の後を追っておられますのに、群臣は唐の太宗、唐の玄宗のときのよにこは仕えておりません。臣はこのことをもって密かに群臣を咎めるものであります。

臣は開封府の役人として浙燈のお買い上げの件を直接目にしました。それでいながら何もいわずにいたのでは臣の罪は重大です。陛下がもしもその罪を見逃して罰しないのなら、臣は職務を全うしていない罪としてこれ以上に大きなものはありません。陛下のために職務を尽くさずにはられません。もしもこの意見書が赦されないとしても、臣としては本望であります。

以上謹んで申し上げ、伏してお言葉をお待ちいたします。

【補足】[幸いにも神宗皇帝はこの意見書を取り上げ、浙灯の買い上げを中止した。これで神宗皇帝はきちんと臣下の提言を聴いてくれと知ったので、いよいよ改革に関する意見書を提出することになった]

■ 【03-2-009】 上神宗皇帝

【解題】神宗皇帝は強い決意のもと、王安石を抜擢して改革に着手していたので、改革に反対することは、すなわち皇帝の意思に反することになる。それでも、蘇軾は国のため、民のためには命をかけても改革の問題点を指摘しなければならないと決意し、この意見書を提出した。これはかなりの長文であるので、全体の趣旨を損なわない程度に適宜省略して訳す。また、歴史上の事柄など説明を要するところも多々あるが、いちいち注釈を付すと非常に煩瑣になるので、一部に若干の言葉を加えるだけにとどめる。流れを読み取っていただきたい。

【訳文】

殿中丞直史館監官誥院權開封府推官である臣蘇軾は、謹んで万死の覚悟をもって再び陛下に文書を提出いたします。

近頃臣は我が身の愚かさ賤しさを顧みることなく、封書を提出し、宮中で灯笼をお買い上げになる件について申し上げました。お上の權威を犯し、罪は赦されないものと、蓆を敷いて畏まって座り、「刑罰を加えよ」との御命令が聞こえてくるのを耳を澄ませて待っておりました。十日を超えてもそれはなく、その筋の人に尋ねましたところ、灯笼のお買い上げはすでに中止になったとのことでありました。

臣は、ふしつけない意見の提出を陛下が赦してくださったばかりでなく、それをお聞き入れてくださったと知って、驚喜し、望みを過ぎた結果に感じ入って泣いたのであります。堯や舜や禹や湯の古代の聖君主はいずれも、過ちを改めることに躊躇せず、善に従うこと川の流れるに乗るようであらうと懸命に勉めま

した。ところが、それは秦朝、漢朝以降は絶えてしまい、よくやく今ここにまた聞くことができたのであります。灯籠の御購入はごく些細な過ちで、陛下御自身をお煩わせするまでもないようなことでありましたが、陛下は瞬時に改められました。このことは、そのお知恵が天下に抜きん出ていながら、最も愚かな者からも意見を聞かれ、その御権威は四海に及んでいながら、最もつまらない人間にも腰低く応じられるということの意味しましょう。よって臣は、陛下が民を富ませ、刑罰の必要がないように国を治め、兵を強化して諸外国を圧すること、堯、舜、湯、武に等しいと知ったのであります。

陛下がこのようでありますからは、誰が陛下に背きましょうか。お仕えする者は心の内の全てを陛下にお見せして、身の一切を擲って力を尽くすことだけを考え、その他一切を顧みません。

いま天下には灯籠のお買い上げよりも大きな事柄があります。それを差し置いて灯籠について先に申し上げましたのは、信頼を寄せるよりも前に諫められるのは聖人でも受け入れられなかったことであり、交わりが浅いうちから核心に迫ったことをいうのは君子の戒めるところであるからです。試みに小さなことを論じ、その結果を待って大きなことを申し上げようと考えたのであります。陛下は臣を赦され処罰なさいませんでした。それはすなわち、臣がより大きなことを申し上げるのをお許しになったのだと申せましょう。許されなからいわないのでは臣下として罪になります。よってここに申し上げる次第です。

臣が申し上げたいのは三つです。人心を結ぶ、風俗を厚くする、紀綱を存するであります。

第一に「人心を結ぶ」であります。

人の行動には必ず依拠するところのものがああります。臣下は陛下の御命令に依拠し、それによって人民を動かすことができます。陛下の御命令は法に依拠し、それによって横暴な者も服従させることができます。人の最も上に立つ人主は何に依拠するのでしょうか。

『書経』にこのような言葉があります。

「私は億兆の民の上に君臨している。それは、腐った縄で六頭の馬を操って走るほどに危ういものである」

これは、天下に人主よりも危ういものはないことを言い表しています。ひとたび集まれば君主と民の関係

になりますが、ひとたび離れればたちまち仇敵となります。集散は紙一重であります。天下が一人のもとに帰するときにはその人を「王」といい、人々の心がばらならなくなったときにはその人を「ひとりぼっち独夫」といいます。

このことから、人主の依拠するのは人心だけであるとわかります。人主にとっての人心は、木にとっての根のようなもの、ともしび燈にとっての油のようなもの、魚にとっての水のようなもの、農夫にとっての田のようなもの、商人にとっての資本のようなものです。木に根がなければ枯れ、燈に油がなければ消え、魚に水がなければ死に、農夫に田がなければ餓え、商人に資本がなければ貧窮となります。人主は人心を失えば亡ぶのです。これは必然の理ことわりであって、逃れることのできない災いです。

この必然の理は大昔からあり、ずっと畏れられてきました。わざわい禍を楽しみ、亡ぶのを好み、性根を簡単に失ってしまうような者でなければ、誰が敢えて我欲をまいまゝにこして、軽々しく人心を冒そうとするでしょうか。

古代の大臣しさんの子産は「衆人は怒らせると手が付けられず、人主一人の欲を押し通すことなどできない」といって、慎重に政治を行いました。孔子もこうし「民衆を動かすには、先に民衆の信頼を得なければなりません。信頼がないのに動かそうとすれば、民衆の恨みを買うことになる」といいました。

ところが、しんこく秦国の大臣であったしょうおう商鞅は、人々の批判を耳に入れず、法を変え、俄かに国を富まし国を強化しました。しかし、商鞅は天下の恨みを招き、民衆は利益だけを知って正義を知らないようになり、刑罰を恐れて道徳を忘れました。そのため秦国は天下統一を成し遂げられたものの、一瞬にして滅んでしまいました。商鞅自身も罪を問われて逃亡し、誰にも受け入れてもらえず、ついには車裂きにされ、一人も憐れむ者はいなかったのです。

君臣の関係が秦のようであることを願う者がどこにいるでしょうか。

そうこく じょうこう宋国の襄公は仁義に基づき行動を貫こうしましたが、衆人の心でんじょうを失って亡びました。逆に田常は不義を行いなからず、衆人の心を得ていたのでその国は強力でした。

このことから、君子は行うことの道徳的な是非を論じるより前に、まず衆人の心がまとまっているか、ばら

ばらであるのかを見るのです。

謝安^{しゃあん}が軍閥の長を用いたのは義として正しいとはいえませんでした。衆人がそれを望んだからそうしたまでで、国はそれによって安泰でありました。庾亮^{こりやう}が蘇峻^{そしゅん}を懲らしめるために都に召し寄せたのは正義の行使として悪いことではありませんでしたが、当時の情勢としてはまずいことであつたために国の危機を招いてしまいました。

このように見てくると、古来、衆人と和やかに一致して安泰でなかつた者はなく、強引に己の思つたところを通して危うなかつた者はないのであります。

いま陛下も人心^{よみこ}が悦ばずにいることは御存知であります。宮廷の中の人でも外の人でも、賢人も不肖の者も、皆が困惑しています。宋の開国以来、財政政策は三司使副判官^{さんししふくはんかん}の職責とされ、百年を経過して問題はありませんでした。ところがいま制置三司条例司^{せいちさんしじょうれいし}という部署を新たに作り、六、七人の若い官僚を集めて日夜政策を研究させ、四十余人の官僚を国内各地に派遣して、その政策を実行させようとしています。その政策は広大な範囲に及ぶために、民衆はどうなることかとびびびしています。新奇な法が作られ、役人は皆動揺しています。賢者は政策の狙いを掴もうとして理解できないために憂慮^{しゅうりょ}し、小人は朝廷の向かおうとしているところを推し測って、賢者を諂って陥れようとしています。

都から遠く地方に至るまで、様々なことがいわれています。例えば、陛下は万民^{あまじ}の主でありながら、利についてばかり目を向けていると。例えば、執政は天子の第一の臣でありながら財産管理にばかり目を向けていると。例えば、商人の仕事は破壊されて物価が騰貴すると。例えば、都の店舗には政府の管理人が置かれ、深山の村にも酒の製造を禁止する命令が下され、宗教寺院の収入は取り上げられ、兵士や官吏の給料は削減されると。数え切れないほどたくさんのごことがいわれています。特に甚だしいのは、残酷な肉体刑を復活させようとしているという者までいます。このようなことがいわれ出して、民衆は不安に駆られ、狼狽しています。

陛下も二三の大臣からこのようなことをお聞きであります。しかし、陛下にそれを顧みられる御様子がないのは、

「朝廷にはいわれるような事実はないし、そのようなことをする意志もない。根拠のない民衆の言論、
『人言』^{じんげん}をいちいち憂うことはしないであろう」

という御判断からなのでしょうか。

人言^{じんげん}[世論]はどれもが正しいわけではありません。しかし、疑わしいことがあるから批判も生じるのです。富をやたらと貪る人がいると、盗みをするのではないかと疑い、女性をやたらと好む人がいると、淫乱なことをするのではないかと疑うものです。

朝廷の何が疑わしいのかといえば、制置三司条例司を設置したことです。去年までの朝廷の人々は忠厚であったのに、今年の朝廷の人々は軽佻浮薄であるために、にわかに人言が騒がしくなったということではないのです。

孔子^{こうし}はこういいました。

「職人が仕事をしようとするときにはまずそのための道具を整える」「あるいは、役目に、それにふさわしい名称を与える」

いま陛下は道具を整え、名称を付けておられながら、問題になるような事実はないし、それを行う意志もないと、弁の立つ者に言い訳をさせても、あるいは千金をばらまいて人々を納得させようとなさっても、人々はきっと信じませんし、批判もやまないでしょう。なぜなら、制置三司条例司を設置したのは、利を求めることに名を付けたに他なりませんし、六、七人の若者、四十余人の使者は利を求めるための道具に他ならないからです。

鷹や犬をけしかけて林に入れていながら、「私は獵をするのではない」といったところで、林の獣たちは信じるでしょうか。鷹や犬を余所にやりさえすれば、林の獣はなついてくるでしょう。網を川や湖に投げ入れていながら、「私は漁をするのではない」といって誰が信じるでしょうか。網をうっちゃってしまえばよいのです。

ですから、^{わたたくし}臣は、批判の声を消して和合させ、人心を元に戻して国の根本を安んずるには、制置三司条例司をなくすのが最もよろしいと考えるのであります。

陛下が制置三司條例司を設置されたのは、国家の利を増やし、国家の害を除くためでありました。これをなくしたら利が増えず、害が除かれないのなら、なくさなくてもよろしいでしょう。しかし、なくせば天下の人々が喜び、人心が安まり、利を増やし、害を除くことも行いやすくなるのです。それでいながらどうしてなくさずにいてよいのでありましょうか。

陛下は積り積もった弊害を除き去るために新たな法を立てようとなさっています。法を立てるには、必ず宰相が熟議してから発案し、それから中書省ちゆうしやうしやうにおいて法案を審議することになっています。その過程を踏まない法は、安定した治世下では存在するものではなく、乱世の法と言わざるを得ません。聖君、賢相は決してそのようなことはいないのです。宰相が熟議し、中書省で立法するという正しい手順を踏むのなら、制置三司條例司は余分な存在であり、実質的に存在する名目がありません。

真に智恵のある者は、際立った特異なことはいないといえます。漢の文帝、景帝の時代の記録には特筆されるような事績は何もなく、唐朝の宰相であった房玄齡ぼうげんれい、杜如晦とじょかいの伝記には特筆されるような功績は何も記載されていません。しかし、天下が最もよく治まったのは漢の文帝、景帝の時代だとされ、最高の賢相は房玄齡、杜如晦だとされています。優れた事績は自然に完遂されて目に付くことがなく、優れた功績は自然と成就して人に知れないものであるからなのでしょう。

上手に軍事力を行使する者には、際立った戦功がないともいいます。その言葉は用兵に限らず、あらゆることに通じます。

現在、意図されていることはまだ万分の一も実行されていません。それでも天下に際立った痕跡がすでにできあがってしまっています。それはあたかも泥の中で猛獣が戦ったかのように顕著であります。拙劣な謀はかりごとというべきではないでしょうか。

陛下が本当に国を富ませようとなさるのなら、正規の職務にある者を選んで、数人の大臣とともに熱心に議論させ、十分な歳月を使って実行して行くべきではないでしょうか。そうすれば、積り積もった弊害も、天下の人々が気付かないうちに自然と消え去って行くでありましょう。その際に恐れるべきは、志を立てることが堅固でなく、道の半ばで終わってしまうことです。

^{もうし}孟子はこういいました。「その進み方が速過ぎる者は、後退するの速過ぎる」。

始めから終わりまで完遂するときにはじわじわ進むのであって、ゆっくりであっても十年の歳月をかければ成就しないことはないのです。

孔子もこのようにいっています。「いきなり速く行こうとすると到達できない。小さな利に目移りすると大きなことは成就しない」。

孔子は聖人の仲間には入らないとするのなら、この言葉は用いるに値しないでしょう。

『書経』にはこう書かれています。

「広く官僚と謀り、庶民も一緒になって、皆が喜んで行動を共にするのなら大吉といえる。もしも逆らう者が多く、一緒に従う者が少ないときは、静かにしているのが吉で、それでも為そうとするのは凶である」

いま宰相、大臣も続々と辞任し、事を為そうとところから離れています。朝廷の外での議論の向かうところは明らかであります。宰相は事を為すなかに加わることで己の身が汚れるのを望んでいません。そうであるのに、陛下はどうして安んじておられるのでしょうか。愚かな^{わたくし}臣には理解が及びません。

……[この後に過去の望ましくない事例を並べる]……

^{わたくし}臣が恐れますのは、いまここに昔の悪しき例を引いて^{わたくし}臣が論じましたように、後世の論者が今を悪しき例に加えて論じるようになることです。

さらにいえば、今が昔の事例よりも具合のよろしくないことさえあります。中央から地方に派遣して改革を遂行させようとしている官僚集団には、十分な実績のある者は一人もいません。事は非常に煩雑であるのに人員が少なく、能力がないにもかかわらず権限だけは重くなっています。能力がないのに権限だけが重い者がいると、人々は心の内で馬鹿にし、表面上だけ服従します。それは争いのもととなるでしょう。事が煩雑で人手が不足すれば、実効性が危ぶまれ、出来なくても出来たかのような虚偽の報告が為されるであります。陛下が厳格に命じられて、虚偽の功績は断じて許さないとおっしゃっても、臣下の者は陛下の^{こころ}情を忖度して、命令を守るよりもむしろ陛下の意向に^{こころ}副おうとするでしょう。朝廷の意向はいまどこにあるのでしょうか。改革の実行を好み、何もないのを憎みます。一致して動くことを好

み、異論を唱えてじっとしているのを憎みます。そうであるとはっきりとわかっていて敢えて従わないのは難しいのです。

わたくし 臣が恐れますのは、陛下の赤子^{せきし}[人民]が今後、穏やかな歳月を送れなくなることです。これから行おうとしていることは、実行が非常に困難であるのは誰もがすでに論じている通りです。……[提議されている改革案のどれもが難点だらけであることを述べる]……

孟子はいいました。「死者とともに埋める土偶を初めて作った者の子孫は、必ず絶えるであろう」

土偶を作って死者と一緒に埋葬することを始めれば、いずれ土偶に留まらなくなり、君主は土偶よりも臣下自身が死後の伴^{とも}をするのを望むようになり、臣下もまた忠誠を示すために殉死を望むようになりま

す。いま陛下は新たな法を不正がないよう運用せよと厳しく命じておられます。しかし、数世の後の暴君、あるいは汚れを厭わない役人が、いま作られた法をもとにあくどいことを企てるのを陛下はどのようにしてお止めになるのでしょうか。土偶から殉死が発展して数多の悲劇が生まれたように、後世の人々は非常に苦しみに遭うでありませんか。そのときに、元凶は宋の時代の改革にあったと論じられたなら、実に残念ではありませんか。……[提議されている財政政策の難点を述べる]……

わたくし 臣が推量しますに、このような弊害が本当にあるのか検討しようと陛下が思われたならば、果たして実態はどうかと法の立案者にお尋ねになるでありませんか。尋ねられた者は、陛下が改革を断行なさろうとしているのを知っていますから、必ずこのようにいってでしょう。「この法には利はありますが害はありません」。そして実際に新法を施行して後に、その成果があったと報告するでありませんか。

わたくし 臣の愚見を申し上げれば、このようなことは信頼に値しないのです。わたくし 臣は先頃西方の地におりました。そこでは、国境方面での事態に対処するために兵士の徴集が実施されていて、民衆が嘆き恨み泣く声を臣はたくさん聞きました。ところが、朝廷から派遣された役人は、民衆は皆喜んで朝廷の命令に従っているとの報告だけをしていました。朝廷の意向に合うようなことのみを見たいと願う役人にはそのことしか見えず、朝廷がどのような報告を歓迎するかを知っている役人はそのような報告をすることし

かしません。昔も今もそのようなことはたくさんあります。そうした虚偽によって国を滅ぼすには至っていない。いまのうちに、陛下が正しく詳細に吟味されることを^{わたくし}臣は望むばかりです。……[歴史の事例を引いて改革案を批判する]……

陛下は天機も明瞭にお分かりになり、聖なる智略は神に及ぶほどでありますから、^{わたくし}臣が申し上げるようなことはたちどころに御理解いただけるてありますが、それでもこのようにおっしゃるかも知れません。

「すでに改革を始めたのだ。途中で変えるのはよろしくない。天下の人々は朝廷の方針が一貫しない、人を用いても最後まで成し遂げさせないと批判するであろう」

始めたからにはそのまま歳月をやり過ごし、万一の成功を願うということもあり得ましょう。しかし、^{わたくし}臣は心密かに思ふのであります、それは間違いでであると。

^{いにし}古の英主として漢の高祖に勝る者はいません。^{れき}酈食其なる者がある謀を高祖に進言し、高祖は即座に「よし」といって、^{ちゅうりょう}酈食其にそれを実行するよう命じました。しかし、その直後に張良の意見を聞くと、口中の食べ物を吐き出し、「やめさせろ」と、酈食其を激しく罵りました。高祖が「よし」といってから「やめさせろ」というまでわずかの間しかなく、まるで子供の気まぐれのようでありました。このことから高祖がなっていないと考える人はおらず、真に英邁な君主は我を押し通すことをしないと知るので。

陛下が一度は「よし」とお考えになってそれを行い、しかし「よくない」とお分かりになった時点でお止めになれば、人々は陛下こそは至聖至明の英主であると考えてるてありましよう。

いま改革を議論している人々は必ずこういでしょう。

「陛下は将来、民とともに改革の成就を楽しむことがてきます。民は陛下のように初めから先を予測することはできないので、あれやこれやと言ひ募ります。陛下はそれに惑わされてはなりません。心に期して必ず実行あるのみです」

これは乱世において危険な一発勝負にかけて万に一つの成功を願う者の言説であります。陛下がもしこれを信じて用いられるならば、声高な議論に従って人間の最良の知恵に逆らい、空虚な計画に頼って実際の禍を迎えるようになり、成就を楽しむどころでなくなってしまうでしょう、実はすでに民衆の

怨みは湧き立ってきているのであります。臣わたたくしが人心を結ぶことを願うと申し上げているのは以上のようなことであります。

第二に「風俗を厚くする」[社会のモラルを高める]であります。

そもそも国家の存亡の根本原因は道德の浅深にあって、国家の強弱にあるものではありません。国家が存続した年月の長短は、風俗の厚薄によるのであって、国家の貧富によるものではありません。道德が誠に深く、風俗が誠に厚ければ、貧にして弱くとも長く存続し、道德が誠に浅く、風俗が誠に薄ければ、強かつ富むとも短くして亡んでしまいます。国家の君主はこのことから何を重んじるのかを知らなければなりません。

古いにしへの賢君は、弱いいからといって道德を忘れることなく、貧いしいからといって風俗を傷つけるようなことはしませんでした。智者が他国を観察するときには、何より此の点から評価をしたものです。……[歴史の事例を引いて自説を強化する]……

以上のことから、陛下が道德を尊んで風俗を厚わたたくしくなさることを臣は願ひ、陛下が富みかつ強くなることの功いさおを急がれることを願わないのであります。陛下がかつての秦朝や隋朝のように領土を拡大されたならば功があつたといふべきなのでしょうが、しかし、国家の長短はそこにはないのです。

そもそも国家の長短は人の寿命のようなものです。人の寿命のもとげんきは「元氣」[物質とエネルギーのおもと]にあります。それと同じように国家の長短のもとげんきは「風俗」にあります。世間には病気がちでも長生きの人もいれば、血氣盛んでも若くして突然死んでしまう人もいます。「元氣」が存在すれば病気があっても生きるに害はなく、「元氣」が消耗してしまえば若くても生きるのは危うくなります。

よく養生する者は、日常動作を慎み、飲食をほどほどにし、関節や筋肉をよく揉みほぐし、使い古した「氣」を吐いて新しい「氣」を身の内に納め、やむを得ず薬を用いるときは品質のよい物、性能のよい物、長く服用しても害のない物を選びます。それによって五臓が和平であるから寿命が長いのです。養生がよるしからぬ者は、慎んだりほどほどにしたり氣を吐いたり納めたりに無頓着で、上質の薬でなく質の悪い薬を用いて、無理やり「氣」を強めようとして、かえって根本を危うくして、たちまち倒れてしまうの

です。天下の勢いもこれと異なることはありません。^{わたくし}臣は陛下が風俗を愛惜されてそれを護ること、養生に熱心な人が「元気」を護るようであってほしいと願うのであります。

古の聖人は、厳格な法が社会をひとまとめにし、勇敢な者が事を成し遂げる可能性があること知らなかったわけではありません。一見すると、真心などというものは役立ちそうになく、^{ベテラン}老成の者はただののろまのように見えます。しかし、聖人は法をもって真心に、勇敢をもって老成に代えようとはしませんでした。そうしても得るところが小さく、失うところが大きいからです。……[歴史の事例を引いて自説を強化する]……^{ちき}…盧杞が唐朝の大臣になると、法制を整えて天下を引き締めることを皇帝に採用させました。それから世の人の心が次第に軽薄に流れ、ついには都から皇帝が逃げ出さなければならない事態に至ったのでした。

我が宋朝の仁宗皇帝が天下を治めたときには、法の運用はいたって寛大で、人を用いることでは順序がありました。過失がないよう努め、旧来の仕組みを軽々しく変えることはありませんでした。その時代の功を^{いしお}検討すれば、さしたるものはなかったといえましょう。兵を用いることでは、十回外に出て九回敗れました。国庫をみれば、かろうじて収支が足りて、余剰はありませんでした。それでも、皇帝の徳は人々に及び、風俗は義を知り、皇帝が逝去された日には、天下の人々は自分の父母を失ったように悲しんだのでした。国家が長く保たれるとは何によるのか、仁宗皇帝はよく御存じてあったのです。

現在の改革を議論している者は、こうしたことの根本を理解しないで、仁宗皇帝の治世の終わりには、官僚がいたずらに慣例に従うだけで、業績が上からなかったと批判し、そのことをもって、官僚を厳しく管理して引き締めなければならない、能力主義で評価すべきだとして、新進の勇ましく鋭い者を中央に招集して、速やかに実効性の挙がるようなことをさせようとしています。そのため、改革の実利が出るよりも先に盧杞の時代のような軽薄な風潮が早くも生まれ出てきています。

歴史は同じことを繰り返すわけではなく、過ちをしない人はいません。国家の君主は包容力に富むのがよく、明察過ぎてはいけません。もしも陛下が多くの人々を包み込まれるのなら、優れた人材は順次利用されるようになるでしょう。監察を厳しくして、過ちを一切認めないようにするのなら、人々は不安にな

って、ただ見逃されることばかりを求めるようになります。それは恐らく朝廷にとってよいことではありません。陛下が願われることでもありませんでしょう。いまし、弁が立ちすばしこいだけの者を用いて、応対が遅いだけの者を退け、大きなことをいって言葉を飾ることに巧みで、いかりにも徳があるように見せかけているだけの者を用いるのなら、古の聖人が大切にしたものは一切消え去ってしまてまいります。

古より、人を用いるときには必ず何度も試しました。際立って抜きん出た器量があっても、成し遂げた功績がなければ、高い地位に用いることはありませんでした。そうであるのは、一つには、いろいろな経験をさせて政治の難しさを知らせるためで、それによって軽々しい行動をしなくなります。また一つには、その功績が立派なものであれば、周囲から重んじられ、とやかく言われることがありません。

昔、蜀の劉備は黄忠を抜擢して將軍の地位を授けようとした。しかし、諸葛孔明は、黄忠の名望はまだたとえも関羽や張飛に及ばないので、もし同じ地位に就けたならば必ずや悦ばれないだろうと、賛成しませんでした。果たして、黄忠を將軍にすると関羽が不平を口にしたのでした。黄忠はまことに豪勇の士であり、劉備のもとに君臣は一つにまとまっていたのですが、それでもなお人の用い方にはよく考慮しなければならなかったのです。……[さらに幾つかの事例を引く]……

高い地位、多くの報酬は人が強く望むものです。必ずたくさん苦勞を重ねてからでないでそれは得られず、得られたなら長くそれを保てることが明らかに示されているのならば、人々はそれぞれ自分の今の状況に安んじて、俄かに獲得しようと思ったりはしません。いまし簡単にすくに進める門が開かれ、思いの他たったひとまたぎで高い地位に就けるようになり、それを得た者が望外の幸であると思わずに、当然のことだと胸をそらせて自慢したならば、その門に入れなかった者は見捨てられたとの恨みを抱くであります。天下には官職に就くのを待ち望む者が大勢います。その者たちを、不用意にも、諸君等は役立たずだと恥しめたならば、何が起るのか予想がつかえません。風俗を厚くすることなど全くできなくなってしまうのです。

科挙に合格して官員になってから朝廷で用いられるまでには、常に十年以上がかかるとされてきました。難しい仕事を与えられ、その成績を厳しく吟味され、一つでもよろしくない失敗があれば、生涯にわ

たって高い地位に上れなくなることさえあります。ところが、たった一人の者が推薦しただけで、たちまち朝廷で用いられ、それでも足りないといばかりにさらに高い地位に就けるようなことがいま行われています。それに対して、長年苦勞してようやく朝廷で用いられるに至った者はどのように感じるでしょうか。そもそも官職に就くのを待ち望む人の多さに比べて欠員が少ないことは、長年にわたって人々の憂うところとなっています。それなのに、別の門を開いて、巧みに進む者を入れてよいのでしょうか。巧みな者が甚だしく優遇されるのなら、拙い者はやるせなさに追いやられ、両者の利害対立が形として現れ出ると察しないわけにはいきません。従って、不器用でも純僕な者が減って、巧みですばっこい者がますます多くなるに違いないのです。

陛下はただ簡素であることを規範とされ、清浄な御心で衆人を御覧になり、奸臣かんしんに付け入る隙を与えず、民衆の道徳心を高めるようになさればよろしいのです。臣わたくしの願う風俗を厚くするとはこのようなことです。

第三に「紀綱を存する」であります。

古から、国を建てるときには、中央と地方の力の均衡に注意を払いました。周王朝は中央が軽く地方が重い例で、秦王朝は中央が重く地方が軽い例でした。中央が重いと悪い大臣が皇帝を意のままに操ろうとする弊害が生じ、地方が重いと有力な諸侯が中央に取って代わろうとする弊害が生じます。聖人は国勢が盛んな間にも衰えることを予測し、規範を立てて弊害が生じないようにしました。我が宋朝は、国家の租税が中央に集められ、兵力の多くが都に置かれています。中央が重い例であるといえるでしょう。

恭しく拝察しますに、我が宋朝の祖宗そそう〔初期の皇帝〕が予め深く計るところのものは何であったのでしょうか。臣わたくしごとき者がよく理解するところではありませんが、台諫たいかん〔皇帝および官僚の不法な行為を監視する機関〕という部署に与えた役目を見れば、祖宗が国家の衰亡を防ごうとした絶妙の計画の一端を窺い知ることができます。

秦朝、漢朝から五代十国の時代に至るまで、皇帝を諫めて死罪に遭った者は数百人に及びましよう。

しかし、宋の建国から、皇帝を諫めて罪を問われた者は一人もいません。少しばかりのお咎めを与えられることがあっても、その人も後には昇進を果たしました。官の上下によらず弁明も許されています。

台諫の構成員は尊卑を問われることなく採用され、その言うところが皇帝に関わる場合は、皇帝は姿勢を改めて耳に納め、朝廷に関わる場合には、宰相も罪を覚悟しました。仁宗皇帝の世には、「宰相は台諫の言いなり」と皮肉にもいわれもしました。聖人の深い意図は、そのようなことを言う俗な者の知るところではありません。台諫の任に就いた者は全てが賢人であったわけではなく、その言辞の全てが正しかったわけでもありません。それでもその鋭気を養わせ、重い権限を与え続けたのは、無意味なことではありませんでした。悪だくみをする大臣が出てくるのを未然に防ぎ、中央が重すぎることによる弊害から救ってきたのです。奸臣が出そいになったら、台諫が言論で挫けばよいだけです。奸臣が力を持ってしまっただけでは、武力をもってしても除くのが難しくなってしまいます。いま法令は厳密で、朝廷は清明で、いわゆる奸臣は万に一つも出てくることはありません。しかし、猫を養うのは鼠を除くため、いまは鼠がいらないからといって、鼠を捕える能力のない猫を養うべきではありません。犬を飼うのは泥棒を防ぐためです。いまは泥棒がいらないからといって吠えない犬を飼うべきではありません。陛下におかれましては、上は祖宗がこの官を設けた意味を考えられ、下は子孫の万世の防ぎのために何が必要であるかを考えられて、朝廷の紀綱で台諫よりも大きなものはないと御理解いただきたいのです。

わたし
臣が幼小の頃に長老の談じるころ聞き、皆がこのようにいっていました。

「台諫の言は、常に天下の公議に従^{くみ}つのだ。公議の与するところに台諫もまた与する。公議が撃つところは台諫もまた撃つ」

えいそう
英宗の治世の初めに、英宗の真の親をどのように祀るべきかという議論が湧き起こりました。皇帝が過ちをしたわけでもないのに議論が過熱し、儀礼の決まりがそもそも明確ではなかったことから、人々は不安を感じ、公議は一つにまとまりませんでした。当時の台諫は死を覚悟してその議論に関与しました。今はそのときどころではないほどに議論が沸騰し、怨みや誹りさえ次々に起こっています。しかし、公議の所在は自ずと知れるところにあります。ところが、台諫は顔を見合わせて何もいおうとしないので、朝

廷の内外の人々は失望しました。台諫が公議に反するところを弾劾してその權威を示したならば、凡人もまた奮い立つてありましよう。しかし、台諫が黙りこくってその權威をないものにしたならば、いかに豪傑といえどももう立つことができません。臣が恐れるのは、これ以降、こうしたことが習慣となって、官僚はただただ執政の手下となって、皇帝がお一人だけで孤立してしまうことです。紀綱がひとたび廢れてしまつては、もはや何が起こるのかわかりません。

孔子はこういいました。

「愚かな人間と一緒に君主に仕えることはできない。愚かな者は、地位をまだ得ていないうちは、これを得ていないことを患い、これを得てからは、これを失うことを患う。失うことだけを患うのなら、どのようなことでおししまう」

臣はこの言葉を初めて読んだとき、極端なことをいうものだと疑問に感じました。愚かな者でも、せいぜい位に就いてそれ相応の待遇をされないのを患うに過ぎないと思つたのです。しかし、秦の時代に、宰相の李斯が將軍の蒙恬にその権限を奪われるのではないかと患い思つたことから、ついには秦を滅ぼすようなことをしてしまい、唐の時代に、宰相の盧杞が懷光よつて罪を告發されるのではないかと患い思つたことから皇帝を誤らせて国家の大乱を招き寄せたといった事例を知るに至つて、ただ自分の地位が失われるのを心配しただけのことから、ついには国を滅ぼすようなことにもなるということがわかり、孔子の言葉が少しも言い過ぎではないと納得したのでした。

ふだんから己の身を忘れて地位の上の者の顔を犯しても意見をいふような者こそが、国家が難儀に及んだときに、義に殉じて命を捧げる者であると、国を治める者は知るべきです。ふだんから一言も意見をいわない者が、国家の難儀に及んで何かをしようと期待できましようか。人臣が全て何もいへないようになつたら、天下はほとんど危ういといふべきです。

『論語』に「君子は和して同せず、小人は同じて和せず」とあります。「和」とは羹の中で五味合はさるようなことをいひ、「同」とは水の勢いに巻き込まれて何もかもいっしょに流されてしまうようなことをいひます。

漢の時代の孫そんぼう宝はこういいました。

「周しゅうこう公は古代の偉大な聖人で、同じ時に召しょうこう公は偉大な賢人であった。互いに悦ばないところがあり、それぞれに規範となるべきことを示し、しかし、互いに攻撃し合うようなことはなかった」

晋しんの時代の王おうどう導は当時の大元老でありました。王導が客人と話す時、一同の者は必ず「まことに結構でございます」と称賛しました。王述おうじゆつだけはそれたことを悦ばず、「古代の聖人の堯や舜でなければ、何をしても常に結構ということはあり得ない」といったので、王導は襟を正して王述に謝りました。

もしも言うことにおいて同じでないことがなく、思うところにおいて合致しないことがなく、一方が唱えれば他方が賛同するのであれば、見かけ上、賢人同士ということにもなりましょう。そこに下らない人間が入り込み、褒め合いの中に加わったならば、上に立つ君主は、賢人と下らない者との見分けがつかないででありましょう。

臣わたしが願ねがうば紀綱を存するようこと申し上げるのはこのようなことからであります。

臣わたしは、新しい政治に単に難癖を付けて異論を唱えようとしているのではありません。近頃実施された幾つかの施策は、陛下の神算しんさんの至明より出て、乾剛の必断によるもので、議論も尽つくされていまして、臣わたしも敢えて物を申すようなことはいたしませんでした。そして、ここに献けんじました三つの論議は、臣わたしだけの私見ではなく、朝廷の内外の人々も憂慮しているところのものであります。

古の聖人であった舜も、偉大な君主であった成王せいおうも、漢の高祖しんも、晋の武帝ぶていも、手厳しい批判の言辞を受けたことがありました。必ずしも当たらないところがあっても、採るべきところを採って、批判した人を罪に問うことはありませんでした。それは美談として史書に記録されています。

臣わたしが献けんじました三つの議論が、いまの朝廷においては全く当たるところがないということであれば、天下にとってはまことに幸さいいであり、その幸さいいを天下に示すことに臣わたしが寄よ与よしたということになりましょう。もしも万に一つでも当たるに似たところがありましたら、陛下はきっとお氣付きになるででありましょう。

臣わたしがこのようにいたしますのは愚かというよりありません。虫けらのごとき身をもって、雷神の威光に対峙するようなこと、狂ったような愚かさを積み重ね、それは断じて赦されるものではありません。罪が大きいと

されれば、胴と首が場所を異にし、一家は破滅となりましょう。罪が小さいとされましても、官員から放逐され遠くに流されて路頭に迷う身となりましょう。しかし、陛下はきっとそのようにはなさらないであります。なぜなら、^{わたし}臣が生まれながらに愚かの至りで、自分の考えたけに凝り固まっている者であることを、陛下はよくよく御存知であるからです。先に臣は貢挙と学校の制度を改めようとする大臣の考えに反することを申し上げました。その時すでに遠く流罪となることを覚悟し、自分の身が保たれるとは思っていませんでした。ところが、陛下は^{わたし}臣の議論にも然るべきところがあるとされ、曲げて御前へのお召しを賜わり、穏やかにお話された後で、^{わたし}臣にこのようにおっしゃいました。

「近頃の政令の可否は、いかがであろうか。朕の過失であっても指摘してよろしい」

^{わたし}臣は即座にお答えいたしました。

「陛下は天からお知恵を授かり、文武にわたってその縦横の才能をお具えてございます。明察においてお困りになることはなく、^{れいきん}励勤においてお困りになることはなく、英断においてお困りになることはありません。お困りになることがもしあるとしたら、政治の達成の速さをお求めになり過ぎるところ、有為の人を用いようとするのが鋭過ぎること、言論を広く聞こうとされ過ぎるところでありますか」

このように申しあげましたところ、陛下はそれぞれに当てはまることにはどのようなことがあるのかとお尋ねになりました。^{わたし}臣がお答えすると陛下は逐一頷かれ、このようにおっしゃいました。

「そなたが指摘してくれた三つの困る点を朕はこれより熟思するとしよう」

^{わたし}臣の狂ったような愚かさは今回のこの意見書だけではないのです。陛下はかつて^{わたし}臣の狂愚を許容していただきました。始めに許容していただき、終わりに許容していただきたくないことはない、それを恃みに、懼れずにこの意見書をお出する次第にございます。

^{わたし}臣の懼れるところは別にあります。^{わたし}臣への批判はすでに多く、^{わたし}臣を仇と怨む者もすでにたくさんいます。必ず^{わたし}臣を誇り、^{わたし}臣を厳しい法を適用せよ、^{わたし}臣を厳罰を与えよといひ、陛下が^{わたし}臣を赦そうとしてもできないようにしてしまうのを^{わたし}臣は懼れます。

いかに危うとも、^{わたし}臣は死を辞するものではありません。最も恐れるのは、^{わたし}臣が重罪になったのを天下の

人々が見て戒めとして、ものを言う者もいなくなってしまうことです。

このようなことを考え、この月日は、日夜この文章に取り組み、書き上げては棄てるということ何度も繰り返し返しました。陛下が先に灯籠の件で臣の一言を聴いてくださったことに感じ入り、考えて考えて断念すべきではないと、ついこの議論を申し上げるに至りました。

陛下にお願いいたします。臣のこの愚忠を憐れみ、これを提出いたしましたことをどうかお赦ください。平伏して罪を待ち、憂恐の至りに勝えません。

【補足】〔(1) 蘇軾のこの意見書では、改革の進め方全般に重点を置いて論じている。蘇軾がまさしく命がけで書いたこの意見書は皇帝の受け入れるところとはならなかった。弾劾、罷免されなかったのがせめてもの幸いであったのだろう。ここで蘇軾が指摘したことは、その後の改革の強引な進め方によって、ほぼこの通りの問題として顕在化した。その一つの大きな要因は、王安石は大改革を構想する緻密な頭脳の持ち主であったけれども、人間社会が原則通りには動かないというごく普通の感覚を持ち合わせていなかったという点に求めることができるであろう。(2) 兄がこのように奮闘している間に、弟はじっと鳴りを潜めていた。蘇轍に対して都から去れとの指令が8月に出てはいたのだが、何らかの事情はまだ都に留まっていた〕

■ 【03-2-010】跋王鞏所收藏真書

【解題】蘇軾は改革批判に心血を注ぐ一方で、都での私的な交友範囲を広げ、なかでも王鞏と王洵というすこぶる家柄のよい2人と知り合いとなり、2人との交流はその後長く続くこととなった。王鞏〔字は定国〕は王素の子で、つまり三代皇帝の真宗に仕えて名宰相と讃えられた王旦の孫である〔→作品番号01-2-021〕。王素はこの年に成都知事の任を終えて都に帰還し、王鞏は蘇軾に学問を教わるようになった。ここで読むのは、王鞏が所蔵する蔵真の書に記した跋文。蔵真は懷素という僧の号で、懷素

は唐代の著名な僧である玄奘 [いわゆる三蔵法師] の弟子で、草書の名手であった。

【訳文】

僧蔵真が書をしたためた七枚の紙は、開封の王翬君の蔵するところのものである。王君は父君が平涼に赴任されるのに従い、その地でこのうちの二紙を初めて得た。それから張士遜公の家に所蔵されていた二紙を得て、その後、馮京公から三紙を得た。それぞれ異なるところにあった理由はわからないが、その筆の勢いは目を見張るものがあり、七紙の意は一つに属している。王君は張士遜公の外孫で、また馮京公とも親しくしているので、これらを得たのであった。

私がかねてから、梁の武帝が書を評するのに、自然の移ろいのようにあるのを好しているのを愛しているのだが、蔵真は自分の力量を誇るようなところがありながらも、その書を観る者は行き過ぎたところがあると感ずることがなく、武帝の評に合致して、それがこの僧の書のまことに工なところなのである。その人となりは奔放自在で、工を求めることはもとよりなく、だからこそその書は工なのである。いわゆる、生まれながらに潜水が得意な人は何も考えなくても舟が自在に操れるというのと同じであるのだろう。意図することなく己のままに筆は千変万化するのであって、蔵真は道に達した者に近いといべきである。

【補足】〔(1) 張士遜は仁宗皇帝のもとで宰相まで務めた人であり、馮京は当時の要職にあつて、王安石の改革には批判的な立場にあつた。王翬は恵まれた境遇にあつて、詩や書などの芸術をこよなく愛し、貴重な書画を収集していた。(2) 「潜水が得意な人」の寓話は『莊子』にある。無心であることが最上の巧みに通じるという話である。それは蘇軾の芸術観にぴったり合致し、同じ寓話を時折引いている〕

■ 【03-2-011】跋王晋卿所藏蓮華經

【解題】家柄のよさでは王詵 [字は晋卿] は王翬を上回るであろう。宋初の功臣の子孫で、英宗皇帝の娘と結婚した。つまり、神宗皇帝とは義理の兄弟というかたち

なる。王詵は非常に裕福で、書画の類を収集し、蘇軾と趣味が一致することから親密な仲になった。ここで読むのは王詵が所蔵する『蓮華經』^{れんげきょう}に書き添えた跋文。なお、家柄がよいと書いたものの、南北朝時代から唐^{とう}にかけて何百年も続いた貴族は前代までにはほぼ没落し、宋代の名家の大半は建国のころまで戦場を駆けまわっていた武将の子孫とか、庶民から科挙によって高官に昇った者の子孫とかであった。

【訳文】

およそ世に貴ばれているものは、難しいとされているところを達成している。真書^{ひょうよう}は飄揚であるのは難しく、草書は嚴重であるのは難しく、大字は結密で空間がないのが難しく、小字^{かんたく}は寛綽で余白があるのが難しい[いずれも書法の特性と逆のことをいっている]。

ここに王君^{おう}が所蔵する『蓮華經』^{れんげきょう}はまことに珍重すべきもので、この巻を手^{かたつむり}に取るだけで仏の世界をあまねく巡ったかのようになり、全てを読む前に目の力は尽きてしまうであろう。蝸牛の角の先の争い、一本の棘に猿を刻むの譬えのように、小さなところに全てが籠っているのである。

感嘆のあまり、巻末にいさか記すものである。

【補足】[ここに書いてあることの意味は訳者にはわかっていない。とりあえず日本語に置き換えただけである]

第3章 不本意な歲月——都、郷里、都、そして旅

[第3章その三]

熙寧^{きねい}3年 [1070年]、蘇軾^{そしよく}35歳。

■ 【03-3-001】跋内教博士水墨天竜八部図巻

【**解説**】熙寧^{きねい}3年は急ピッチで改革が進められる年となった。蘇轍^{そてつ}は、都に留まって門を閉ざし世間との交流を絶っていたが、科挙の二次試験の採点委員に選ばれた。蘇軾は、当時世界最大の都市であった都の治安に関わる雑多な仕事に携わっていたが、そのころの仕事ぶりを示すエピソードは特に伝わっていない。これは呉道玄^{ごどうげん} [呉道子^{ごどう}] [→作品番号 02-1-018の第三首など] の画に書き添えた短文。題にある「内教博士^{ないきょうはく}」の意味はわからないというが、異世界の人々と竜を画いた作品であったのだろう。

【訳文】

これは呉道玄^{ごどうげん}が深く愛した図巻である。だから後世の人間もこれを愛するのである。

私が呉道玄の画を喜ぶのは、鬼神、人物の顔形がいつも新意^{ニューニード}を出しているからである。手足の動きが変化を窮め、曲げたり伸ばしたりの長短の勢いの妙は極めて優れている。呉道玄が深く考え、わずかな筆の先も違えずに画いたことについては、言葉でもってほぼ説明できるだろう。しかし、神妙自然 [事物の背後にあるもの] を画いて人を喜ばせ驚かせることについては、言葉で説明できない。

いまこの図巻^{ちやうあん}は長安の雷氏^{らい}が所蔵していて、呉道玄の真蹟である。世の人々は呉道玄を画聖と称えているが、ここに述べたようになかったならば、その名には耐えないのだ。呉道玄はさほどではないという人もいるが、この図巻を観れば、呉道玄が画聖の名に値するかどうか、その是非がわかるだろう。

旧くから、鬼神を画くのは犬や馬を画くよりも難しいという説がある。これは正しくない。鬼神は人が普通に見るものではないが、その歩いたり走ったりする動作は、人の理をもつて考えるならば、欺かれることはないはずである。難易は画く者の工拙こうせつにあつて、画く対象にあるわけではない。そして、工拙の中にも格の違たぐひいがある。画は工であつても格が卑ければ、駄作であるのを免れないのである。
熙寧三年正月二十二日、趙郡の蘇軾書く。

■ 【03-3-002】 次韻楊褒早春

【解題】楊褒ようほうが詠んだ早春の詩に和した。楊褒おうようしゅうは歐陽脩等とも詩を詠み合つたりしていた官界の先輩である。

【訳文】

街中から奥に引込んだ我が家にて、
なお続く寒さを、私は悩ましげに過ごしていた。
瘦せた馬にまたがり、雪の残る道に出てみたところ、
どこかからか春の楽曲を歌う女性の声が聞こえてきた。
いつの間にやら足を延ばし、貴君の家にまできた。
貴君の庭には春の訪れを知らせてくれるものがいいろいろにあり、
ここで心のうさを晴らしたらどうかと、
貴君は酒を用意してくれた。
天の運行を司る神が、
おせっかいにも我々の年齢をまた増してくれたと、
恨みがましくおうとは思わないが、
良い時節と楽しい事とが同時に二つ並ぶのは、

なかなかないと、大昔から決まっているようだ。
 しかない役人暮らしの歳月をこれからも重ねるうちに、
 過ぎた年数の証はただ髪が白くなっただけということになって、
 いつか、訪い来る人のいない門を閉ざし、
 そぼ降る雨に打たれながら、
 野菜を育てて暮らすようなことになったりするのだろうか。
 さしずめ今日のところは、
 お上より三日の休暇を頂戴したので、
 自分がいまどこにいるのかわからないくらいに、
 ぐっすりと眠りたいと願うのである。

■ 【03-3-003】 次韻柳子玉見寄

【解題】 同じ頃に、柳瑾^{りゅうきん} [字は子玉^{あざな しぎよく}] が都にきて、すぐに出て行った。これは柳瑾が寄せた詩に次韻したもの。柳瑾の息子の柳子文^{りゅうしぶん}は、蘇軾^{そしつ}の伯父の蘇洵^{そくあん}の娘と結婚していたので、柳瑾と蘇軾は姻戚関係にあった。柳瑾、柳子文、そしてその息子たちは、この後、蘇軾の詩文に何度も登場するようになる。

【訳文】

雷が軽やかに鳴ってぱらぱらと雨が降り、
 暁に及んできれいさっぱり晴れ上がった。
 春の泥は着物の裾を汚すほどではなく、
 行楽によろしい時節になったのだ。
 しかし、酒はあるけれど、

門から出たところで良い友がないので、

仕方なく書物を漫然と眺めていると、

貴君の詩が届き、

「間もなく寒食かんしよくともなれば、

遙か遠くの故郷に思いを馳せ、

酒を携えて帰りたいと、

居ても立ってもいなくなることでありますう」

まさにその通りだ。

貴君からの迎えがあったなら、

仮病を使ってもたいぶるような野暮な真似はしないで、

何が何でも行くつもりだ。

【補足】 [(1) この詩では仮病にまつわる有名な故事を用いているが、大意を理解する上では、細かく詮索するまでもないだろう。(2) 柳瑾りゅうきんは王安石おうあんせきと同じ年に科挙に合格した間柄であったから、もしかすると新しい政治に期待するところがあって上京したのかもしれないが、どうやら不如意なことがあってごく短期間で都から立ち去った]

■ 【03-3-004】 再上皇帝書

【解題】 3月 [あるいは2月]、蘇軾は、改革を思いとどまるよう、もう一度、皇帝に意見書を差し出した。前回の意見書と比べると、言葉が厳しくてほとんど皇帝を罵らんばかりの勢いで、それだけのつひきならない事態であると蘇軾は強く受け止めていたのであろう。なお、本文中に新法の名がいくつも挙げられているが、その中身には立ち入らない。

【訳文】

熙寧四年三月、殿中丞直史館判官誥院權開封府推官の臣蘇軾は、謹んで万死を冒して
皇帝陛下に再拝上書いたします。

臣はこのように聞いています。

益は禹[古代の賢臣と聖王]を戒めて、

「賢者に任せたら、疑いの心を持ってはいけません。邪な者を去らせるときには、ためらってはいけません」

と、いいました。

仲虺は湯[古代の賢臣と聖王]の徳を讃えて、

「人を用いるときには自分自身であるかのように信頼し、過ちを改めるときには躊躇しなかった」

と、いいました。

秦の穆王は崤での戦いに敗れたときに、深く悔やんで、

「これは自分の罪であって、大臣の失敗ではない」

と、いい、そのことを孔子は『春秋』に記録しました。

古来、最も聡明な豪傑とされているのは漢の高祖皇帝と唐の太宗皇帝ですが、二人とも諫めを受け入れるのは水の流れに乗るようにすばやく、過ちを改めるのを憚りませんでした。それによって、

秦漢以来の百王の中での冠と称されているのです。

孔子はこのようにいいました。[実は『論語』にある弟子の子貢の言葉]

「君子の過ちは日食、月食のようなものである。全ての人がそれを見て、食から回復すると、全ての人が安堵して見上げる」

聖賢の挙動は、以上のように明白で正直でなければならないものなのです。

聖賢が用いる人には邪もあれば正もあります。行う事には是もあれば非もあります。是非と正邪は、必ず二つに分かれ、人は正であれば用い、邪であれば去らせればよく、事は是であれば行い、非であれ

ば改めればよいのです。この理ことわりははなはだ明らかで、飢えたら必ず食べ、渴いたら必ず飲むのと同様で、特別な理屈を設けたり、曲げて粉飾を加えたりして、天下を欺けるようなものではないのです。

『尚書』にこのようにあります。

「政治が道みちと一致しているなら、国は隆盛に向かわないことはない。政治が道から離れて乱れるなら、国は滅びずにはいられない」

陛下が去年から行われている新法は、どれも政治が道と一致するものとはいえません。条例司を立て、各地せいがうしに青苗使を派遣し、助役錢じょえきせんを納めさせ、均輸法きんゆほうを行いましたと[改革が順次スタートしたことをい]、全国で騒動が起り、路傍では恨み嘆く声が聞かれるようになりました。ところが、宰相以下、誰もがその非を知っていながら、敢えて争おうとはしなかったので、臣わたくしは憚るところを知らぬ愚かの極みでありますところから、先にこのことについて詳しく論じて上疏いたしました。しかし、臣わたくしの学術が浅く低いものでありますために、陛下の御心を動かすには至りませんでした。最近では、もとの大臣や地方の長官などが、争うあざむくことして新法が便宜に適っていないと申すようになりました。本来は陛下と心を一つにするべき台諫たいかん[官員の不正を指摘する部署]の二三の者までも同じようになり、こうなりました。これして皆が「非」であると一致していようになつたのは、留まるべきところがないままに物議が沸騰し、事勢が切迫してきたからではないでしょうか。目の前の利を見て正しい道理を忘れ、疑うことなく利のみをみつめる限りは、「非」がこびりついてしまっている手足をいつまでも洗わずにすることはできないのです。呉師孟は提挙ていきよ[新法を遂行する部署の長官]から辞去したいと願ひ、胡宗愈は検詳けんしょう[新法の条文を作る部署]に任命をされるのを免れようとした。これは垢まみれになるのから逃れられなくなるのを恐れたからであります。人心が新法を畏れ憎むことはまさにここにまできてしまっているのです。

近ごろ、朝廷の内外の者が、陛下には悔悟こごの意がおありになると噂し、立派な賜り物でも頂戴するかの様に互いに慶賀し合い、陛下が旬日のうちにも詔を下されて、誤った施策を洗い流され、新法を実施するよう各地に派遣した使者を呼び戻し、条例司を廃止するのではないかと期待しております。ただいま側聞するところでは、新法を法規の通りに正しく行うように制限をかけようとしているだけのことであ

るらしく、ただそれでも何も気づかないままであるよりは遙かによいのでありましょうが、これは孟子がいどころの「兄の肘をねじっている者に向かって、少し緩めなさい」というようなもの[つまり本来の道德にはやはり反している]「隣の家の鶏を毎日盗むのはよくないといわれて、盗むのは月に一回だけにするようなもの[つまりたちに盗みをやめるべきだということ]と同じであって、帝王が過ちを改めるのがこのようにであってよいのでありましょうか。

臣はまたこのように聞いています。陛下は新法はしばらくの間は三つの地域において試みるのでよいと考えておられると。臣は、この新法は、医者^{わたくし}が毒のある薬を用いるのに譬えることができるのではないかと考えております。人の生死を左右する効果がどれほどあるのかまだわかっていないのに、それを人に処方してよいのでしょうか。三つの地域の民もまた陛下の子であります。毒のある薬をとりあえず試してみてもよいわけではないのです。今日の政治は小さく用れば小さく敗れ、大きく用いれば大きく敗れてしまい、もしもかつて行い続けるならば、国家は乱れ、さらには亡んでしまうかもしれないのです。これは敢えて極論を申し上げて陛下を驚かせようとしているのではありません。

古から国家の存亡に関わるのは四者であるとされています。一つ目は民、二つ目は軍、三つめは官吏、四つ目は士大夫^{しだいふ}であります。この四者の一つでも本来の心を失ったならば、国家に異変が生じってしまうのです。いま陛下は一挙に四者の全ての心を失わせてしまうようなことをなさっているのです。

青苗法^{せいびょうほう}と助役法^{じょえきほう}が行われれば農業は安らかでなくなり、均輸法^{きんゆほう}が行われれば商業は行き詰まり、そこから民の憂いが始まります。また、諸軍を整理して、老病の兵士は放逐し、国境警備の兵士の妻を軍の間に雑居させ、あたかも罰を与えるかのように軍への配給を減らし、罪人を遠くに流すかのように屯田兵^{とんでんへい}を配置するなどの施策は、きっと軍に怨みを抱かせるようなことになるでしょう。朝廷においては、経験のある大臣や侍従と相談するのではなく、専ら新進の若者を用い、また朝廷の外においては、本来の地方官に任せずに、新たに派遣した青苗使者をもっぱら用いています。もともとある部署を閉にさせ老成^{べてらん}の者を追いやるような施策は、官吏の規律をなくしてしまうものです。陛下は軒に出られて自ら官員として用いる士^しを選ぼうとされていて、天下はこれを「竜飛榜^{りゅうひぼう}」と呼んでいます。いま科挙の進

士科の合格者[蘇軾も進士科の合格者]の一人が除名されて、今後は進士を重く用いることはないということを示されました。除名されたのは一人だけではあっても、これは陛下が進士を嫌って軽んじておられることを示されたもので、長く士大夫の恨みを買うことになりかねません。陛下は、進士を用いるのを次第に減らして、明経科の及第者を取ろうとなさっています[科挙制度の改革のこと]。そのことはまだ制度として定まってはいませんが、小人たちが寄り集まって互いに自分たちの功績を誇って必ず新制度を行おうとしています。これは士大夫[官員志望の人々]を失望させるものであります。いま官員の半ばは進士であって、二十歳以上の士大夫は、古典を暗記するだけのような明経科の学習はしておりません。もも士を取る法令が改まったならば、士大夫の多くは棄てられたとの憂いを抱くに違いありません。人の才能の長短は正確に暗記できることにあるものではありません。昔、秦は儒学の書物を持つことさえも禁じたために、人々は己の才能が埋もれてしまうことを憂いて、ついには反乱の徒に加わって、秦を亡ぼしたのでした。臣は、陛下がそれと同じことをなさらないよう切に願うのであります。民が憂い、軍が怨み、官吏の規律がなくなり、士大夫が失望するならば、禍乱の源としてこれより大きなものがまかりにあるでしょうか。いまはまだ表面には見えていませんが、ひとたび急変するなら、命を懸けて事を行う[つまり国家に反逆する]士大夫はきっと少なくはないのです。そのときになって、時流に便乗して用いられることを望んだ新進の者たちが、果たして陛下のために天下が崩壊をするのを留めようとして働くてありましょうか。

去年、諸軍の統廃合を始めたときに、陛下の近臣は、兵士は皆喜んで陛下に告げました。しかし、近頃、除隊された軍人の李興が、虎翼軍の役人が銭を出し合って賄賂として併合を免れようとしていると告発しました。これは、必ずしも兵士が新たな方針を喜ぶものではないことを示しています。

諂諛之人はとかく陛下の意に合うようにすることだけに務め、嘘偽りも憚らずに行うことの、これはその一例であるにすぎません。民は青苗銭を借りることを楽しみ、助役銭を出すことを楽しんでいると報告する者は、どれも信じるに値しないのです。……[以下、青苗法の問題点を挙げる]……

人々は皆このよう申しております。陛下は聖明神武、必ずや正しい義に立ち戻って悪を修正されて、

太平をもたらすこと近日のうちであると。しかし、いまの状況は過ちを粉飾し、非をそのまま貫き通そうとしているかのように、これは臣が憤懣わたくし ふんまんやるかたなく嘆息なげきしないてはいられない理由であります。

昔、晋しんの時代に賈充かじゅうが国の政治を左右するようになると、天下の人は憂い恐れました。庾純こゝろ じゅんと任愷にんがいが力を尽くして賈充を批判し、賈充が都から出て行くことになったので忠臣義士は誰もが慶賀し合い、維新の日がくるのを指折り数えて待ったのでした。しかし、馮忱ふうしんのような連中が、「賈公が遠く放たれたなら、吾等は勢いを失ってしまう」と相談し合い、謀はかりごとを巡らせたために、賈充はとうとう朝廷に留まったのでした。そのことから、晋朝はついに乱れてしまったのです。古から小人を去らせるのは難しいとされてきましたのは、一人が去るとその一党が崩壊してしまうので、大勢の者が一斉に凶って言い募るようになるからなのです。

いま天下の賢者は、陛下が何を為されるのかを観て、進退を決めようとしています。もしもう一度失望するならば、時勢に機敏な士は次々に去ってしまうであります。臣のように地位に安住し、禄を得るのを願って、ぐずぐず去らずにいる者はばかりではないのです。

臣は猖狂不遜で、陛下の意を損ねることが多々あり、敢えて陛下の寛恩を望むものではありません。伏して首を伸ばして、誅戮を待つ次第です。

【補足】〔青苗法せいびょうほうについてだけ若干の説明を加えておこう。これは、国家が農民に低利で銭を貸し付けて、収穫期に税とともに利息を付けて返済させる制度で、豪民から高金利で銭を借りた農民が返済に行き詰まって農地を手放し、豪民のもとに農地が集まって行く現状を正そうとするものである。制度としては非常に優れたものであるのだが、役人というものは民衆の幸福よりも自身の成績を優先するものであるらしく、銭を借りる必要のない者にまで無理に貸し付けて、新制度は民衆に歓迎されていると朝廷に報告する者が多数現れた。また借るためには書類を整える必要があるのだが、そのために農民は多大の時間を空費させられたりもした。他の新法も同様に初期においてかなりの混乱をもたらしたのは事実であった〔後に新制度が浸透するにつれて本

来の利点が活きてくるようになる]。蘇軾の意見書はそのような状況のなかで書かれたものである]

■【03-3-005】答劉巨濟書

【解題】これは劉涇〔字は巨濟〕への手紙。劉涇は10年ほど後輩で、このとき故郷の簡州〔成都に近い町〕で喪に服して、若くして亡くなった兄の遺稿や自身の詩文を蘇軾に送ってきた。これはそれへの返事。

【訳文】

……賢兄の文格は奇抜で、貴君のいわれる通りまことに立派であります。不幸にして早世しましたが、貴君の労によって不朽の名を残すであります。賢兄が書かれた文章を拝見して、思わず涙がこぼれました。貴君の新しい詩や文は何度も読み返しています。都で私が知るのはいまや司馬光君と劉攽君くらいで、二人に貴君の詩文をお見せしようと思っています。残念なことに、私の声は貴君のことを広く知らせるには勢いが足りないのですが、貴君は人を頼りにするまでもないであります。貴君の『呉秀才に与える書』で仏教を論じたのは特に優れています。

近年の士人の多くは空理空論を談じ、世間の好みを追うばかりで、何ら深みがありません。そのような者でも科挙で採用されるのは、やむをえず他に採る者がいないからでありますか。私は拙く何もしようがないので、かつて試験場で課題に応じてどうにかこうにか書いたものが、不幸にして人々の間で写し回され、虚名を得てしまったのを深く恥じている次第です。近ごろの科挙に合格して名をなした者は、普段は孔子や孟子と同じようなことを言いながら、ひとたび官職を得ると、笑わずにいられる者はわずかしかいません。このようなことから、私はもはや文章を作ることに恥じ、ここ一二年は絶えて作っておりません。貴君はいまはおわかりにならないかもしれませんが、過大な誉れは恥じることばかりであります。いま弟は貢院〔科挙の二次試験を実施する役所〕に閉じこもっていて、月が改まったならば出てくること

でしょう。家孟侯君は科挙の一次試験には合格しなかったのですが、太学での成績がよかったので二次試験を受けられることになりました。その兄の家安国君も同様です。弟の家勤国君は一次試験に合格したのでやはり二次試験を受けにきています。……

【補足】〔(1) 都でよく知る者は司馬光と劉放しかいないと書いているのは、改革に批判的な人々が続々と都から出て行ってしまったためで、例えば、大恩人の張方平〔→作品番号 01-2-011 など〕は1月26日に陳州知事に任命されて都を去っている。

(2) この手紙が書かれたのは、科挙の二次試験が行われている最中であったので、手紙の後半はそれを話題にしている。弟の蘇轍は二次試験の採点委員として役所に缶詰になっていた。家孟侯、家安国、家勤国の3人は蘇軾の同郷の人々である。蘇軾の幼馴染に家定国、家安国、家勤国の三兄弟がいることは作品番号 01-2-008 で見ている。ある注釈書は、孟侯は家定国の字であるとしているが、家定国は蘇軾と同時に科挙に合格していて、なおかつ家安国の兄であるので、恐らく家孟侯は三兄弟の従兄弟なのであろう。なお、劉涇は後に科挙に合格し、官界で活躍するようになる]

■ 【03-3-006】 与楊濟甫

【解題】 同じころに、故郷の楊濟甫〔→作品番号 01-2-044〕に送った手紙。

【訳文】

近ごろ、お手紙を頂戴し、ますますお元気の御様子に感服し、合わせて皆様が御佳勝ありますことを詳らかにいたしました。

私は相変わらずこまごまとした用事に煩わされ、弟は貢院に召され、あと半月ほどで出て来ることでしよう。都では春色がすでに盛りですが、私はとほとほと独り歩いて、楽しみをともにする者がいませぬ。住んでいるところの前には小さな庭があり、童僕に野菜を植えさせていて、少しばかり佳い趣があり

ます。宜秋門^{きしゅうもん}[都の西南の門]に添っては高い槐^{えんじゆ}と古い柳があって、山居に似たところがあって、野山の気分を味わうことができます。

次第に暖かくなってまいります。千万御自重されますように。

【補足】[春の盛りになっても蘇軾は孤独で浮かぬ思いであることがここに記されている。政治情勢を反映しているのだろう]

■ 【03-3-007】 擬進士対御試策

【解題】科挙の二次試験が終わって蘇轍^{こういん}が貢院から解放されると、今度は蘇軾が最終試験^{でんし} [殿試] の監督を命じられた。最終試験は皇帝の面前で極めて厳粛に行われた。このときの試験で首席で合格したのは、葉祖洽^{ようそごう}という人物で、祖法^{そほう} [宋代の初めに定められた制度] は時代の変化に合わないところがあるので、それにいつまでも拘泥しているべきではないといった趣旨のことを答案に記していた。これはむろん、改革を急ぐ^{しんそう} 神宗皇帝や王安石^{おうあんせき}の考えに添うもので、多くの及第者もやはり同じような答案であった。蘇軾は、受験生が軽薄にも時勢に迎合しているとして、葉祖洽を首席とすることに異議を唱えたが、それは通らなかつた。それで、本来の試験の答案はこうあるべきだと書いてみせたのがこれで、序文に当たる部分だけを読んでおこう。

【訳文】

右の臣は宣命^{しんせんめい}によって集英殿^{しゅうえいでん}に召され、編排^{へんはい}拳人^{きょじん} 試卷^{しかん}を務めました。竊に見ますに、陛下は旧制を^{ひそか} 革められますに、士に問題を課すのに詩賦は無益であるとの声を多数聞かれて、朴直の論を為す者を民間から求めよとなさいました。陛下が広く聴かれるとのことを、朝廷の内外の者は喜びましたが、試験に関わった者は陛下の御心のもとを推し量ることができなくて、いずれもが得失だけを浅く考えて、敢えて政治の欠陥を指摘することなく、ただ時勢に阿る者ばかりが成績の上位を占めてしまいま

た。陛下が深くそして切に人を求めておられますのに、下の者がこのような応じ方をしてしまったのを、臣は竊に深く悲しむのであります。そもそも試験で書かれた文章はいまの風俗[世間の価値観]に直結し、合格者の書いたものはいずれも天下の規範とされ、一方で落第者が書いたものはよろしくないものとして天下の戒めとなります。昔、宋朝の初めのころは、辞律[語彙の華麗さとリズムの良さ]を重んじて、詩賦が得意な士が技巧を駆使しました。嘉祐年間からは、古文[欧陽脩が提唱した内容重視の簡潔な文章]を貴いとして、策論[課題論文]が盛んに行われ、詩賦は重視されなくなりました。このことは利のあるところ[科挙の合否に直結すること]へと人々はきっと移って行くことを示しています。いま策論をもって士を取り、その上位を諂諛の者が得たのを天下の人々が観たならば、誰が敢えてそれに倣うまいとするでしょうか。臣が恐れますのは、今よりこの後には、皆が率先してその流れを作って、直言科[蘇軾が合格した制科]を受ける者までもが、敢えて直言しなくなるのではないかと。こうして風俗が一変してしまっただら、もう取り返しがつきません。正しいことをいう人は消えてしまい、それに従って国は衰微してしまてまいしょう。臣は憤懣に耐えられず、退いて模範となるべき答案を書いてみました。臣の学術は浅く狭く、現在の切実な問題を尽く知っているわけではありませんので、ただ聞いていることを端的に申し上げるだけであります。陛下におかれましては、広く聞かれて、万に一つでもお考えを広めることに役立てばと思うだけです。そして、世間には、陛下の本当のお心は直言を少しも嫌うものでないことを示せばと思うのであります。そうすれば、風俗が破壊されて行くのを少しは救うこともできるであらう。……

【補足】[神宗皇帝はこの模範答案を受け取ると、王安石に見せて意見を求め、王安石は「蘇軾は才能あっても、その学問が正しくないために、このような不逞の論文を書くに至ってしまいました。もはや罷免すべきであります」と答えたという。神宗皇帝は蘇軾を咎めることはせず、王安石が再度罷免を求めても、それに応じることはなかった。推測するに、神宗皇帝の国政改革の意志は強く、王安石のプランが最上であると確信していたのだが、その一方で、蘇軾の意見にも見るべきところがあり、さら

には蘇軾の率直な物言いを好んでいたのだろう。それで、このあとなお1年余りは蘇軾は都に留まることになる]

■【03-3-008】送錢藻出守婺州得英字

【解題】3月に、^{せんそう} 錢藻が^ぶ 婺州知事として都から出て行くのを見送った詩。送別の宴で錢藻がまず五言絶句を詠み、それに使われた20個の文字を一つずつ出席者に配り、それを韻にして各々が詩を詠んだ。蘇軾には「英」の字が割り当てられた。

【訳文】

高い志を持った人は、
都の宮殿の内で安楽に過ごすのは好まないと言われ、
優れた手腕の持ち主は、
問題山積の地において仕事をするのを好むという。
貴君は地方官の辞令を得て、
朝廷で着用していた衣類を、田舎の清流で洗うことになった。
これから行かれるのは、山水がまことに佳いところ。
まだ着かないうちから、貴君の心はすでに清らかになるであろう。
赴任の途中で貴君は故郷に立ち寄り、
土地の人々は酒を携えて喜んで郊外に出て貴君を迎えるであろう。
貴君はこのたび願うところを得たわけだが、
残る者は悲しい思いに沈んでいる。
我が君は賢人を求めることに急で、
日の暮れるまでずっと邇^じ英閣^{えいかく}に出ておられる。

昔、燕国えんこくの昭王しょうおうは黄金台おうごんだいを築がくいて楽毅がくぎを招き、

楽毅は軍事力の増強と他国との連携を図り、

宿敵せいきの齊国と戦った。

燕国は勝利を重ねたけれど、

最終的な勝利を得るには至らず、

昭王が死んでしまうと楽毅は亡命し、

黄金台は虚しく朽ちてしまった。

趙国ちようこくの孝成王こうせいおうは宝玉くへいをもって虞卿ぐけいを招き、

虞卿は王のために種々の策を建てた。

その策は巧みであったけれど、

趙国の衰退は加速するばかりで、

虞卿自身も窮乏のうちに晩年を過ぎねばならなかった。

楽毅や虞卿のような者を招くのに忙しい今の朝廷にあって、

貴君は卑下することなく、義を説き続けた。

しかし、その声は高い山に虚しくこだまするだけであった。

別れに臨んで、これ以上の言葉を尽くすのははそう。

酒が醒めて後に、

言い過ぎたと我ながら驚かなければならなくなるだろうから。

【補足】〔1〕蘇軾は「英」の字を皇城にある邈英閣じえいかくの名に用いた。このところ皇帝と王安石おうあんせきは改革の実行部隊となる人材を朝廷に集めるのに忙しく、前の文章で見たように、科挙の最終試験でも改革の理念に共鳴する論文を書いた者を合格させている。

その一方で、かねてから朝廷に仕えていた人々は続々と外に出ることを余儀なくされ、

銭藻せんそうもその一人であった。この詩は、そうした現状を批判しているのだが、原詩は歴

史上の故事を多数引いているお蔭で、この訳詩よりはオブラートに包まれている。(2) この詩に引かれた楽毅がくきについて蘇軾が論じているのを作品番号 02-1-005 で見ている。そこでもここでも楽毅の評価は低い。(2) 錢藻は名家の出身で、風格があり、人々から「長者」と呼ばれていた。実力主義の宋代であっても、皇族や特別の家柄はやはり重んじられた。錢藻は江戸時代でいえば外様大名の子孫に当たる。唐王朝が亡んだ後、各地に地方政権が分立する五代十国時代となり、「十国」の一つに杭州を都とした呉越国ごえつこくがあった。錢藻は、呉越国の創始者せんりゅうの錢鏐の五世の孫。呉越国は錢氏のもとで比較的安定した数十年間を過ごし、経済的、文化的に豊かであった。宋による天下統一が見えてきたとき、呉越国は宋との決戦に出ることなく領地を差し出したことから、錢氏は宋の朝廷で優遇された。錢藻は皇帝のブレーン集団の 1 人として長らく朝廷にいたのだが、改革派と意見が合わずに都から出ることになった。詩中にある錢藻の故郷とは杭州で、蘇軾はこの後、杭州に赴任して錢氏の遺した文化遺産に親しく触れるようになる]

■ 【03-3-009】送安惇秀才失解西歸

【解題】蘇軾兄弟がともに関わった科挙が終わると、合格者と落第者とで画然と悲喜が分かれ、合格者は意気揚々と、落第者は意気消沈して故郷に帰って行った。これは落第した安惇あんじゅんという若者を見送った詩。

【訳文】

ふる
旧ふるから伝わる書物を、

いと
厭いとうことなく繰り返し繰り返し熟読し、

さらに深く思うならば、

君は自ずから全てを知るであろう。
そうなったならば、高い位に昇るのは、
もはや免れようとしてもできるものではない。
いまのこの足踏みをいつまでも続けていられはしないのだ。
かつて私は、人々との交わりを絶って家に籠り、
勉強に専念して、庭の花さえ見る暇もなかった。
その後、官位を慕って東にきて、
学問を捨て、子供の戯れ事まのような政界に飛び込み、
愚かな百の企画、誤った百の計画は、
全て成し遂げられないままに、
白髪だけが約束事のように増え続けた。
故郷の山には私が植えた松がある。
それは着実に成長し、
じきに抱えるばかりの太さにまでなるだろう。
その木のもとに帰れるのはいつだろうか。
全ては運命の定めるところなのか。
官界での私のこの十年は、
ばかりばかりとたばたでしかない。
たとすれば、君が故郷に帰ると私は都に残ると、
一体どちらが得るものが多く、どちらが失うものが多いのか。
君との別れに臨んで、長く嘆息するのである。

【補足】〔(1) この詩の冒頭で、古典を熟読せよとのアドバイスには、先に見た模範
答案の序文にあったように、今回の科挙の合否判定への不満が反映しているのだろう。〕

(2) 「故郷の山には私が植えた松がある」とは、父と妻を葬った墓地のまわりにかくさんの松を自ら植えたことをいう。(3) 先の蘇不疑そふぎへの手紙 [→作品番号 03-2-001] に、甥の蘇林そりんも受験したと記していたが、蘇林は残念ながら不合格となった]

■ 【03-3-010】 与子明兄

【解題】 従兄の蘇不疑そふぎ あざな しめい [字は子明] への手紙。弟の蘇軾そしが都を出たこと、蘇不疑が訴訟事に巻き込まれたこと、蘇軾はあくまでも都に留まって新法に反対し続ける覚悟であることなどが記されている。弟は、陳州ちん知事となった張方平ちやうほうへい [→作品番号 03-3-005] に、陳州の学校の教授として招聘されたのに応じて都を去った。蘇不疑がどのような事件に巻き込まれたのかはよくわからない。

【訳文】

馬通鋪ばていほ そうたい [宋代の郵便機構] からお手紙を受け取り、兄上そふぎ [蘇不疑のこと] も皆様もお健やかであると知り喜んでおります。私たちもそれぞれ恙なく、陳州ちんに行った弟も平穩に過ごしています。

近ごろ、蜀しよくから報告書を携えた役人がきて、十日ほどで帰りましたが、訴訟事件について詳しく聞き、死罪を免れないような者が出るかもしれない事態であるとのことで、深く憂いております [このころ蘇不疑はある事件に巻き込まれてしまったようである]。聞くところでは、孫固殿そんこが審理に当たるので、きっと罪を軽ぐされ、さほど重い罰は下されなくてあろうとのことです。どうか御安心ください。

蒲宗孟君ほ そうもう けんせい は検正になりました。これは以前の孔目房こうもくぼうです。その職務をよく果たすでしょう。…… [以下、共通の知人の消息が幾つか記される]……

いまでは青苗法せいびやうほうに反対する者は、宰相であっても都に留まることはできなくなっています。私ももし外に出て行かないのならば、自分の考えを曲げて世に随うようなことはできないので、粉々に碎け散るのでありましょう。外に出ることはまだ求めていますので、しばらくは都で遊びます。……

【補足】[ここで名の挙がっている蒲宗孟〔字は伝正〕は、蘇不疑の兄の蘇不欺の妻の弟である。作品番号 02-3-013 で見た蒲誠之も同族である。このとき、蒲宗孟は学士院の一員として検正中書戸房兼修條例に任ぜられた。「以前の孔目房」とあるのは、改革に伴って旧来の官僚機構が大幅に改められたからである。王安石の合理主義は官制にも及んだのである]

■ 【03-3-011】 書緑筠亭詩

【解題】上の手紙で、宰相であっても朝廷には留まれないとあったが、王安石とともに副宰相を務めていた趙抃が4月に杭州知事として都を去った。趙抃は蘇洵が初めて官職を授けられたときに尽力してくれた人である〔→作品番号 02-1-001〕。趙抃は初めは王安石の才能を高く評価し、朝廷に起用するよう皇帝に勧めたのだが、改革が具体化するにつれて批判する側にまわり、ついには自身が朝廷に留まれなくなってしまった。ここに訳すのは遙か25年後の文章で、趙抃が杭州に行く前に都で若干の交流があったことが記されている。

【訳文】

愛竹能延客、[竹を愛し、同好の士を客として招き入れる]

求詩剩掛牆。[客人に詩を求め、それを壁に掛ける]

風梢千纛乱、[梢を吹く風に、竹は千本の旗のように乱れる]

月影万夫長。[月の光に、竹は万人の影を伸ばす]

谷鳥驚棋響、[谷の鳥は碁を打つ音に驚き]

山蜂識酒香。[山の蜂は酒の香りを知っている]

只応陶靖節、[この主人は、陶淵明と同じ]

解聴北窓涼。[北の窓辺の涼しさの妙味を知っているのである]

かつて私は清献先生[趙抃]から緑筠亭についての詩を詠むよう求められた。

清献先生は、

「緑筠亭は我が故郷の人、梁処士の住いである」

と、いわれた。

それから二十五年後に梁処士の子の梁瑄に会い、緑筠亭の詩を書くよう求められた。

紹聖二年四月十三日。

【補足】[(1) 冒頭の詩は、趙抃の依頼で、衢州にある緑筠亭の主である梁処士[処士は官職に就かない人]の人となりを想像して詠んだもの。その詩は梁処士のもとに届けられたのだろう。それから 25 年が経って、梁処士の子の梁瑄が、衢州から数百キロ離れた惠州まで旅をして、その地に流されていた蘇軾を訪ね、一筆揮ってもらったのである。(2) 「北の窓辺の涼しさの妙味」とは、夏の北の窓の下に寝そべって涼しい風に吹かれていると太古の人になったような気がすると、陶淵明が詩に詠んだことに基づく]

■ 【03-3-012】 送呂希道知和州

【解題】呂希道が和州の知事として赴任するのを見送った詩。呂希道は、仁宗皇帝のもとで長く宰相を務めた呂夷簡の孫。名家の出で、つまりは保守派であったから、改革政治とは相容れないところがあったのだろう。

【訳文】

去り年には、貴君が解州の知事になるのを見送り、

今のこの年には、貴君が和州の知事になるのを見送る。

人が地方に赴任するのを繰り返し見送る間に、

私の胸や腸は、都の塵芥でいっぱいになってしまった。

貴君の家は三代にわたって朝廷の重臣を出し、

貴君に至っても貴さはなお続いている。

鳳の雛は生まれながらに鳳に、

名馬の子は生まれながらに名馬になるように、

貴君に伝わる非凡な風格を見れば、

必ず剣を帯びたまま皇帝のもとに伺候するようになると知れる。

しかしながら、

小さな町から馬に乗って都に帰ってきたばかりで、

今度は船に帆を上げて、

また小さな町へと慌たたくし出て行かなければならない。

私こそ、川や海をさすらうのが性に合っているはずなのに、

恥を忍んで、こらでうろろしている。

貴君を見送り、言葉なく嘆息する。

ああ、河の水はかくも美しく、

かくも遙かどこまでも流れて行く――

【補足】[「私こそ……」の原文は「我生本是便江海」[我が生は本より是れ江海を便とする]。蘇軾はしばしば「江海」の語を用いているが、これは文字通りの「江や海」の意味ではなく、狭苦しい都会に対して、自然に近い広々とした鄙びた土地を意味する]

■ 【03-1-013】 夜宿秘閣呈王敏甫

【解題】 当直として秘閣〔学士のメンバーが務める役所〕で夜を過ごしたときに詠んで、王敏甫という同僚に見せた詩。秘閣には昭文館、集賢館、直史館の三館があり、蘇軾は直史館の一員として首都の仕事を兼務していたので、時に直史館に泊まり込むこともあったのだろう。

【訳文】

遥か東の海に浮かぶといふ蓬萊山や瀛州山、
そこにある神仙の宮殿と同じ、
ここ大宋の皇城は俗世間の塵から遠く隔たり、
皇帝がお好みになる天上界の香りが、
私の宿直する建物にも漂ってくる。
冷たい光が宮殿の瓦に注がれているありさまは、
月光のもとに鴛鴦が伏すかのようであり、
淡い霧が高い樓閣になびいているありさまは、
雲の内に鳳がわたかまるかのようである。
夜の更け行くのをここで過ごす私は、
古今の治乱を論じる相手もなく、
ただ一人で少々の酒と向き合うだけである。
隠者の最たる者はあえて山に隠れるまでもなく市中にいるという。
ならば、ここ皇城の内にあっても、
夜空を飛ぶ鶴を見上げ、
暁に鳴く猿の声を聞く情趣を、

味わえないことはないのであろう。

【補足】[宮中を仙界に譬えるのは詩における一つ約束事のようなものである]

■【03-3-014】跋文与可墨竹

【解題】4月に、文同〔字は与可〕〔→作品番号 02-4-018〕が上京してきた。それは政策論争に疲れた蘇軾にとって大きな救いとなった。文同とは姻戚関係があり、官員として先輩で、詩や画を得意とし、画は墨でひたすら竹ばかりを描いていた。これは文同の竹の画に添えた小文。

【訳文】

かつての文同は、質の良^{ぶんどう}い紙を見ると、すぐに気持ちが昂^{あざな}ぶり、居ても立ってもいられなくなり、自分で自分を制止できないままに筆を揮い、竹を描いた。描き終えた墨の竹を人々が争うように持ち去っても、文同は少しも惜しみはしなかった。

その後、人々が筆と硯を用意して待ち受けるようになると、文同はもそもそした挙句に、ぶいと逃げ去るようになった。人が何とかして頼み込んでも、一年経っても、二年経ってもなかなか描いてもらえなかった。

ある人がその訳を尋ねると、文同はこゝろした。

「私は、道^{みち}を学んで理解できないところがあると、思いが停留^{やまい}してどうすることもできなくなり、それが一気に噴出すると、墨の竹となったのでした。それは私の病であったのでしょ。今はたぶん病が癒えたのだと思います」

しかし、私が見るところ、文同の病はまだ治っていない。身の内に納めていられないものがあれば、どうしたって発せずにいられはしないのだ。私はその発する頃合いを見計らって竹を描いてもらい、その画を我が物とした。こうして文同の病を利用するのは、実は私にも同様の病があるからなのだろう。

■ 【03-3-014】 朱寿昌梁武讎賛偈

【解題】文同は都にくると、朱寿昌しゅじゅしょうという極めて珍しい奇特定の人物がいることを人々に話した。朱寿昌は幼いころに母と別れ、それから40年以上経ってから、何としてでも生きている間に母と再会したいと、官職を棄てて母を探す旅に出た。文同は都に向かう途中のとある町で朱寿昌とたまたま同宿し、その身の上話を聞いたのである。朱寿昌はわずかな手がかりを頼りにこれから金州きんしゅうに向かうところであるといった。都の人々が朱寿昌のことを噂し合ううちに、6月になって、長安ちやうあんから朱寿昌が母親に会えたとの報せが届いた。朱寿昌がついに母を尋ね当てたことは特筆すべき事柄として、『宋史』にも記録されているので、その部分をまず読んでおく。

【訳文】

『宋史』列伝第二百十五

朱寿昌しゅじゅしょう、字は康叔あがなは、揚州こうしゅう天長てんちやうの人である。父の朱翼しゅよくの恩蔭おんいんで監主簿かんしゅぼとなり、……[以下、官界における経歴が記される]……

朱寿昌の母の劉氏りゅうしは朱翼の妾めかけであった。朱翼が京兆府けいちょうふ [長安ちやうあん]の知事であったときに、劉氏はちょうど妊娠していたのだが、(朱翼が転勤するのに際して)家を出されてしまった。朱寿昌は(母のもとで生まれ育ち)数歳のころに父の家に帰り、母と子はそれより五十年間は音信が途絶えたままとなった。(朱寿昌はこのままではもう母に会えずに終わってしまうとにわかに思い立って)四方に母を探し求め、酒や肉を口にしなくなり、母のことをいときこは必ず涙を流した。仏教の法を用い、背を灼いたり頭を焼いたり、肌を刺して血をもって仏教の経典を書いたりして、力を尽したのだが、母の行方は知れなかった。熙寧年間の初めに、「母に会えるまでに帰ってこない」と、家族に別れを告げ、官職こうとくぐん [広徳軍の知事であった]を棄てて秦の地しん [長安ちやうあんの周辺へいべん]に入った。そしてついに同州どうしゅうにおいて母に会ったのだった。

劉氏はこのとき七十歳を過ぎていて、党氏の妻として数人の子がいた。朱寿昌は母とその子等を迎えて帰った。

京兆府の銭明逸が母子再会のことを朝廷に報らせ、皇帝は詔をもって朱寿昌を官職に戻した。これよりその孝行の名が天下聞こえ、王安石、蘇頌、蘇軾以下の士大夫が争って詩でそのことを讃えた。朱寿昌は母を養うために河中府に赴任することを求めた。数年で母が亡くなると、朱寿昌は喪に服して、悲しみの余り失明するばかりとなった。……

【**解題**】上の訳文にあるように、蘇軾も朱寿昌を讃える詩を詠んだのだが、それはこれより1年後のことであるので後に見るとして、さらに10年後の元豊3年の作品の方をむしろ先に読んでおこう。これは朱寿昌が書いた『梁武の懺』に書き添えた偈〔仏説を賛美する韻文〕で、その序文の部分だけを訳す。『梁帝の懺』とは、南朝時代の梁朝の武帝が、先に亡くなった妻を救うために作った懺悔文。妻は生前に犯した悪事のために死後は大蛇に生まれ変わり、その苦しみを武帝に訴えたので、妻の代わりに懺悔したもので、仏の方によって妻は大蛇の身から放たれて往生したのだった。

【訳文】

私が世間を観るに、もろもろの道を得た者は、その初めに苦悩があった。苦悩が極まり、それを訴えるところがないと、人は父母を呼ぶ。父母が聞いてくれなければ、仰ぎ見て天を呼ぶ。天も救ってくれないのなら、これは運命によるもの、仏の定めたとする。仏の大悲は方便として、まずもろもろの苦しみ与えるが、そのもとには愛がある。愛を得ると喜びがあり、愛が犯されると怒りがあり、愛を失うと悲しみがあり、愛が傷つけられると懼れがある。この愛の始まりはどこから生まれるのか。つらつら観察するに、愛が尽きると苦も減んで、安楽なところが得られるのだろうか。諸仏は愛別離苦をいう。父母との離別の苦しみは無量で、離別の中でも生きての別れが最も苦しい。

ここに大いなる長者がいて朱寿昌^{しゅじゅしやう}という。生まれて七歳で、母は息子を置いて去ってしまった。年を重ねるにつれてますます母を懐かしく思うようになり、泣いて泣いて母を追い求めた。肌を刺して血を取って経を写し、仏を拜んで懺悔した。そして、母と別れて四十余年にしてついに母に再会した。

朱寿昌は仏の恩に報いるために、そして衆人の苦しみを救おうと考えて、いろいろな教門を観て、自分の思いに最も近いのは、梁の武帝が説いた懺悔であると知った。その文は重々しく、また奥深く、衆生の理解できないところもあるが、その語や音律は人々が歌詠して賛嘆し、福を獲ること無量である。ここに蜀人の蘇軾はこのことを聞いて随喜し、その偈に曰く。……

【補足】 [これは母の死を朱寿昌^{しゅじゅしやう}が失明するばかりに悲しんでから数年後の作品で、朱寿昌はなおも母のことを思い続けていて、蘇軾に執筆を依頼したのである]

■ 【03-3-016】 墨君堂記

【解題】 文同はとにかく竹ばかりを描き、その画を納める建物を作って「墨君堂^{ぼくくんどう}」と名付けた。これはその由来を書いた文章。

【訳文】

私が見るに、一般に人が人を呼ぶとき、相手が貴人であれば「公^{こう}」といい、相手が賢人であれば「君^{くん}」といい、それ以下であれば「爾^に」とか「汝^い」とかいう。公卿の身分にある人に対して、その地位に畏れはしても、心に服さないときには、世間の人々は公的な場では「君^{こう}」といいつつも、私的な場では「爾^に」とか「汝^い」とかいって軽んじるのはよくありがちのことだ。

かつて、王徽之^{おうきし}の[書聖といわれた王羲之の子]が人から空き家を借りてしほの仮住まいをしたときに、すぐに竹を植えたので、

「どうせじきに出て行くのだから、何もわざわざ『爾^に』を植えるまでもなからうに」

と、ある人がいった。

王徽之は、

「かの『君』なくして一日も過ごせるものではない」

と、答え、それ以来、天下の人々は、竹は必ず「君」の敬称で呼ぶようになった。

文同は墨で竹君の姿を象るのを得手としている。文同は墨で竹を描いた「墨君」を納めるための堂を作り、竹君の徳を頌たたえる文章を書いてほしいと私にいった。文同が竹君に寄せる思いはまことに厚いものがある。

文同の人となりとはといえば、沈着冷静でありながら華やかさがあり、聡明冷徹でありながら真心がある。潔さを身に具え、広く物事に通じようと、朝夕に己を磨く努力を重ねている。文同と交際したいと願うのは、一人だけたということは全くないのだが、文同が厚く思いを寄せるのはただ一人、竹君だけである。竹君は飾り気がなく、しなやかで強い。人の耳、目、鼻、口を楽ませる声や色や香りや味はない。文同が竹君を厚く思うのは、竹君が賢君であるからだ。

世間というものはなかなか厳しい。人を震え上からせたり、冷や汗をぐっしょりかかせたりする。だからといって、霜や雪や風や雨が直接に肌に当たる厳しさほどのことはない。それでも、世間の厳しさに挫け、己の保持するところのものを見失ってへらへらしている連中は少なくない。植物を見ても、季節の移り変わりに応じて大きく変わるのが普通だ。しかし、竹君だけは四季に左右されるところがない。

竹君は賢君であると、文同でない人もいいはする。しかし、文同こそは竹君を最も深く理解し、竹君が賢君である真の理由を最もよく知っている。文同は談笑しながら筆を執り、獅子奮迅の勢いで墨を注ぎ、竹君の徳をことごとく描き切る。

文同は、竹君の幼い姿も、成長した姿も、老いた姿も描き、折り曲げられて一度は伏してもすぐさま立ち上がる勢いを描き、風雪の厳しさの中でも保っている本性を描き、切り立った崖にあっても真っ直ぐに伸びようとする志を描く。思いのままに大きく成長して高々と茂っても驕らず、思いの通りにならなくて小さく低いままでも取じ入りはしない。群がり立っても依存し合わず、一本だけでも恐れるところはない。

文同は竹君の情を完全に理解し、その本性をことごとく描き切る。

私はまだまだ竹君を知っているとはいえない。文同に習って、文同の墨君の弟や子や孫や友人の象かたちを描いてみたいと思っている。行く行くはその画を我が部屋に納めて、墨君堂の別館ということにしたいものだ。

■ 【03-3-017】 送蔡冠卿知饒州

【解題】8月には送別の詩が続く。これは蔡冠卿さいかんけいを見送った詩。蔡冠卿はある刑法の解釈を巡って王安石おうあんせきと激しく論争し、議論では負けなかったものの政治力によって敗れ、都を出て行かざるを得なかった。

【訳文】

貴君が人と交際しているありさまを見ていると、
大きな声で笑いながら語るのでは、
貴君が一番たといってよい。
まことに大らかであり、
おやっとな怪訝おやっとなに思わせるようなおかしなところはない。
しかし、何か事があったときに、
迂闊うかつな振る舞いに及んでしまうのでは、
私以上であるようだ。
前に落とし穴が見えていれば、
誰だって気を付けるし、
道に金銀宝石がばらまかれていれば、
誰だって拾おうとするだろう。
そういう場面で、世間の人はころと変わり、
堅物かたぶつだと評判だった人が、

たちまちぐんにやりしてしまったりするものだ。

貴君ときたら、

たった一人で昔の法規を守り続けようとしたために、
船を漕いで遠くに行かねばならなくなってしまった。

まことお気の毒さまである。

天をも駈ける馬が、

そらののろまな牛の後ろにくっついて、

ひよひよに歩かなければならなくなると、

嘆いたりなさんな。

猛火の中に投げ込まれてこそ、

宝玉はその真価を発揮するといではないか。

世間の事はいっすい一炊の夢のようなものだ。

人生がどこまでもかたかた道ということでもないだろう。

貴君が法の基本を順守しようとしたことで、

救われた者も多くあったのだから、

貴君自身には返ってこなくても、

その徳の報いは、必ず貴君の子孫に及ぶであらう。

■ 【03-3-018】 送劉放倅海陵

【解題】劉放りゅうほん あざな こう ふ〔字は貢父〕が都を去るのを見送った詩。劉放りゅうしょうは劉倅の弟〔→作品番号 02-1-016〕。劉放りゅうほんとはこれから長く交流が続く。やはり王安石おうあんせきと対立して都を出て行くことになった。

【訳文】

貴君は知っているだろう、

げんせき
阮籍が人の良し悪しを決して口にしなかったのを。

吾輩には舌があり、硬い歯があると、誇ってはいけない。

舌や歯は、旨い酒を飲むためだけに使うのがよい。

書物なんぞはたくさん読まないのがよい、

詩なんぞは巧みでないのがよい。

貴君がこれから行く海辺の地は何もないところだ。

毎日毎日酒に酔っていればよい。

間違っても夢に朝廷を見たりしなさんな。

私は来るべき春の味覚を貴君と楽しみたいと思っていた。

しかし、昨夜、庭の木に秋風を感じたばかりであるのに、

貴君はもう遠くに行ってしまふのだ。

貴君は行ってしまっいて帰るのか。

貴君が植えた桃の木に花が咲くのはいつの春なのか。

すっかり白髪になってしまった貴君が、

その花を愛でることになるのだろうか。

【補足】 [訳詩の2行目にあるげんせき しん阮籍は晋の時代の「ちくりん しちけんじん竹林の七賢人」の1人で、その人について詠んだ詩を作品番号 01-2-041 で見ている]

■ 【03-3-019】 送曾子固倅越得燕字

【解題】 これは、えつ越州の副知事となって都を去るそうきょう曾鞏を見送った詩。送別の宴で韻字として蘇軾すいおには「燕」の字が割り当てられた。詩の冒頭に「すいお醉翁」とあるのはおうようしゅう欧陽脩

の号で、曾鞏は欧陽脩の弟子だった。曾鞏と蘇軾は同じ年の科挙に合格した「同年」^{どうねん}で、特殊な経緯から二次試験で曾鞏が首席に、蘇軾が第二位になった。

【訳文】

醉翁すいおうの門下生はにぎやかにどっさりいて、
 いずれ劣らぬ粒ぞろいであるから、
 優れ者であるとしてそこから現れ出るのは難しい。
 咲き乱れる多種多様な花の中で、
 貴君ばかりはひとときわ高い香りを放ち、
 南方から都に出てくるなり、
 たちまち醉翁と並び立つまでになった。
 その醉翁が今は地方の町に逼塞しているのだから、
 弟子もやはりそうなるのが当然であるとして、
 都を去ることになったのだろうか。
 それとも、昔々漢かんの皇帝に数々の建言をした賈誼かぎと同様に、
 諸大臣に煙たかられて地方に追いやられるということなのだろうか。
 戦国時代がくきの名将楽毅は活躍し過ぎて亡命を余儀なくされたけれど、
 晩年えんには故国燕との縁を回復させた。
 だから、これから行く地の新鮮な魚の味にすっかり魅了されて、
 もう都の生臭い肉などは食わない、などということには、
 たぶんならないであろう。
 とかく世間はロウるさく、
 耳の中で蝉がわんわん鳴いているようなものだ。

できることなら、

都のあたりに巨大な池を造って、

大鯨のような貴君の大きな才能を、

自由自在に泳がせたいものだ。

【補足】 [終わり近くにある「但苦世論隘、聒耳如蝸蟬」^{た よろん せま くる} [但だ世論の隘いのくに苦しむ、
^{みみ やかま せ み よう} 耳に聒しい蝸蟬の如だ] を、^{おうあんせき} 王安石に媚びて出世を図ろうとする連中が見たなら、ど
う思うだろうか。蘇軾はそのような心配はせずに思う通りを詩に詠んでいる。そのた
めに蘇軾はますます厳しい立場に追い込まれて行ったのである]

■ 【03-3-020】 次韻王誨夜坐

【解題】 同僚の王誨^{おうかい}が夜に詠んだ詩に次韻した。

【訳文】

まことに結構なことに、

貴君はよく客を招いている。

閑職にある私などはその数に入らないと思っていた。

杖をついてしばしば訪れるのを厭わなくてくれるのなら、

いずれはそちらの近くに移り住んでもよいのかも知れない。

詩では、秋が深まると葉の落ちる音に驚くと詠むことが多い。

しかし、うるさくまとわりつく蚊がいなくなるのは喜ばしいではないか。

月が明るく池に宿るのを待って、

夜遅くに水の中に天が映るのを見ようではないか。

■ 【03-3-021】 書六一居士伝後

【**解題**】^{おうようしゅう} 歐陽脩はすでに地方に出ていたが、このころに政界から完全に引退する決意を固め、自ら「六一居士」と号し、その意味するところを『六一居士伝』に記した。それは9月7日のことであつた。蘇軾は後に『六一居士伝』を読んで、思うところを書き添えた。最初に歐陽脩の文章を読んでおこう。

【**訳文**】

^{おうようしゅう ろくいち こ じ 伝}
 欧陽脩:『六一居士伝』

私は^{じょざん} 涪山に流されたときに「^{すいおう} 醉翁」と自ら号した。あれからすでに老い、すでに衰え、かつ病んだので、いよいよ^{えいすい} 潁水のほどりに引退することにし、ここにさらに「六一居士」と号することとなった。

ある客人が問うには、

「『六一』とはどういう意味なのでしょうか」

居士が答えるには、

「吾が家には蔵書が一万巻あります。三代以来の^{きんせき} 金石の遺文を収録したのが一千巻あります。琴が一張あります。囲碁の盤が一局あります。そして常に置いてある酒が一壺あります。『一』とはこれらのことです」

客人が又問うには、

「それでは『五一』なのではありませんでしょうか」

居士が又問うには、

「吾が一人の翁がいて、この五つの『一』の間で老いております。というわけで『六一』ということになりませんか」

客人が笑って問うには、

「先生はしばしばその号を変えておられますが、いわゆる『名から逃れようとする者』、つまり、世の評判か

ら逃れようとする人なのではないでしょうか。しかし、それは、かの^{そうし}荘子の譬之話にある『影を畏れて走った者』と同じになってしまうのではないのでしょうか。影を畏れた者は、影がどこまでも付いて回ってくるのを憎み、一日中逃げ回ったあげに、疲労困憊して死んでしまったといひます。私は、先生が疾走して、ひどく喘ぎ、死ぬほど喉を乾かして、しかし逃げ切れないようにお見受けいたします」

居士がいうには、

「私は、もとより、名から逃れられないことを知っています。そして逃れるべきではないとも知っています。私が新たな号を名乗るのは、自分の楽しみをい^{しる}さか志そうとするだけです」

客人がいうには、

「その楽しみとはどういうものでしょうか」

居士がいうには、

「私の楽しみは^{みち}（道）と一つになるより勝るともいえましょうか。楽しみ^{こころ}の意を五つの『一』の間において得ることができたならば、^{たいざん}泰山が身の前にあっても目に入ってきてませんでしゅう、^{らくが}落雷が柱をへし折ったところで驚かないでしゅう。^{どうてい}洞庭の野で聖人を称える壮大な音楽が演奏されても、^{たくりく}涿鹿の原で極悪の敵を打ち破る大きな合戦が行われても、その心地よさ、その快さには及ぶものではありません。しかし、五つの『一』の間での吾が楽しみを極められないているのを、これまで私は常に患っていました。私にまわりつく世事がたくさんにあったためです。その大きなものは二つです。第一が官服、官印等で、それは外側から私を疲れさせます。第二が憂患、思慮等で、内側から私を疲れさせます。私の肉体は病いではなくてもすでに^{かじか}悴み、私の心は老いるよりも先に衰えてしまって、五つの『一』の間で楽しむ暇がどこにもありませんでした。それで私はこの三年の間、身を退くことを朝廷に願い出ておりました。ある日、陛下は^{そくぜん}惻然とこのことを哀れまれ、引退することを許してくださいましたので、この五つの『一』とともに我が身は田舎^{いかり}の廬に帰れるようになり、かねてからの願いが叶うこととなったのです。これが私がい^{しる}さか志そうとするところのものです」

客人はまた笑っていうには、

「先生は官服、官印等が身体にまつわるものであるのを御存知ですけれど、五つの『一』が心にまつわるものであるとは思われないのでしょうか」

居士がいにこは、

「そうではありません。官服、官印等がまつわりついて私をすでに疲れさせ、たくさんの憂いを生み出したけれど、五つの『一』はすでに私を解き放ち、幸いにも患うところのものはないのです。私はどちらを選ぶべきでしょうかな」

ここにおいて客人は立ち、私の手を取って大いに笑っていにこは、

「まったくもって比べるまでもありません」

そして、居士が嘆息していにこは、

「そもそも士大夫たる者は、若いときには仕え、老いては休んでよく、七十歳まで待たなくてもよいとされています。私はもともとその考え方を慕っておりました。官職から去るべき第一の理由がここにあります。私はかつて大事な御用を勤めさせていただきましたが、称賛を縦（た）にしようとする気はさらさらありません。官職から去るべき第二の理由がここにあります。壮年の頃からそのようにあるべきと考え、今はすでに老いかつ病んでおります。強いて身を働かせようとしても難しく、それでいながら過分の榮禄を貪るのは、まさしく本来の志に違い、自分の日頃の言辞を根底から覆すものです。官職から去るべき第三の理由がここにあります。去るべき三つの理由があるのですから、たとえ五つの『一』がなくても私は去るべきなのです。これでも言うべきことは尽きましたでしょう」

きねい
熙寧三年九月七日、六一居士自らかく記す。

【補足】[このとき欧陽脩は64歳だった。24歳で科挙に合格して以来、政治改革ならびに文学改革の闘士として長年闘い、引退の本当の理由はこの文章に書かれているのとは別にあるとしても、政治的なこととは別の次元の価値を自分の行動に見出そうとするのがこの『六一居士伝』であるのだろう。それを読んだ蘇軾の感想が次の文章である。

【訳文】

私はいおう。

「六一居士は有道の者^{ゆうどう}の者^{みち}[道を身に具えた人]であるのでしょう」

それに対してある人はいう。

「六一居士は有道の者とはいえますまい。有道の者なら、懐^{ふところ}に抱える物などなしに、安らかにしてられるのではありませんかな。六一居士は五つの物を所蔵しています。六一居士は世間の人々が争って(は)乱がる物には見向きもせんけれど、世間の者が棄てるような物を拾っています。そのようなことをして、有道の者であるといえるのでしょうか」

私はいう。

「そうではありません。五つの物を懐に抱えて後に安らかにしてられるのなら、それは物に惑わされていることになりましょう。五つの物を棄て去って後に安らかになるのも、やはり惑わされています。六一居士は初めから物にまといつかれてなどいません。立派な服も、立派な車も、官位の印しも、つまりは地位にまといつかれてなどないのです。まして、五つの物にまといつかれているではありません。物に惑わされるのは、物を吾が物にしようとするためです。吾も物も何かしらわけがあって天地の間に形を受けたのでありましょう。吾は吾、物は物でありますから、どうして物を吾がものとする事ができるのでしょうか。ある種の人は物を吾がものにしようとして、これは得れば喜び、これを失えば悲しみます。いま六一居士が自ら『六一』といわれるのは、その身と五つの物をひとしくそれぞれ一つの物であるとしているからであります。六一居士が五つの物を己のものにするとか、五つの物が六一居士を己のものにするとか、そういうことではないのです。六一居士と五つの物とは等しい関係にあって、お互いに己のものとする事はないのです。ですから、得たり失ったりということもそもそもありません。このようなことから、私は、六一居士は有道の者であるというのです。もし一と五とが向き合っているのなら、六一居士の存在は浮き上がって(は)っきりと見てとることができましょう。五ととも一があって六になっているのなら、いずれが五でいずれ

が一という区別はなく、つまり六一居士だけが浮き上がって見えることはありません。つまりは、六一居士はすっかり隠れているということになりましょう」

【補足】[この文章で、六だ五だ一だと、何か言葉の遊びでもしているように見えるが、要は欧陽脩の引退について、政治的発言を避けつつ賛意を示したということであるのだろう]

■ 【03-3-022】 跋文与可草書

【解題】ぶんどう あざな よ か しよ 文同 [字は与可] は書も巧みで、これはその草書に記した跋文。

【訳文】

り じょう 李常は草書を学んだ当初はうまく書けなくて、すぐに真書や行書がまざってしまった。りゅうはん 劉放はそれを見て、

おしむ 「鸚鵡のおしゃべりですな」

と、いった。

その後、少しずつまくなり、私に、

「僕の草書はこのごろはどうだろうか」

と、尋ねたので、

きゅうかんちょう 「秦吉了くらいにはなったかもね」

と、答えたところ、ぶんどう 文同が大きな声で笑った。

この日は、文同が筆を下して風のように書き上げるのを、集まった者が争うようにして求めた。

劉放の言葉の意味は、鸚鵡は人の言葉を話すとしても、わずか数句だけで、あとは鳥の語がまざってしまうということである。

十月一日。

【補足】 [(1) 李常 [字は公沢] は蘇軾の親友としてこの後もしばしば登場するようになる。政争の渦中にあった蘇軾も、気の置けない仲間と束の間の楽しいひとときをこうして送ることがあったのである。劉攽は諧謔 [ややブラックなユーモア] を得意とし、その点で蘇軾と非常によく似ていて、ともにそれが原因で敵を作ってしまうことがあった。(2) これとほぼ同じ内容の文章を、都の浄因寺で李常が書いたものにも蘇軾は書き添えている]

■ 【03-3-023】 与子明兄

【解題】 10月28日付けの従兄の蘇不疑 [字は子明] への手紙。このころに書いた蘇不疑への手紙が何通も残っている。特にこの時期に頻繁に手紙を送ったのか、たまたまこのころのものが残ったのか、経緯は不明だが、蘇軾の私的な側面がそれから窺い知ることができて興味深い。

【訳文】

……五月に赤ん坊が生まれて、名は叔寄です。元気に育っています。弟は陳州で安らかりにして、八月に娘が生まれ、名は宛娘です。……

私は都に来て二年になり、事を論じるのがひどく拙いために貴権の人々を大いに損ね、近頃は御史 [官員の不祥事を裁〈部署〉] の弾劾を受け、各地に調査が及んでいます。いずれ根拠のないものと知れ、必ず無実となるはずで。春にはきつと郷里に帰ることを求め、それが叶いましたなら、またお目にかかるのも遠くはないでしょう。忠義は昔から貫くのが難しく、虚名を得れば禍を受けます。人生の得失は前々から定まったものでありますから、いくら困難があろうとも、断じて屈することはありません。……

【補足】 [(1) 5月に生まれた赤ん坊は次男の蘇迨 [幼名は叔寄] で、王閏之が初めに生んだ子である。(2) 弾劾を受けたとあるのは、8月5日のことで、御史の謝景温

が、蘇軾は父の喪に服するために郷里に帰った船旅の途中で、法の禁じる塩の私的な取引をして利益を得ていたと告発したのである。根も葉もないこの告発に蘇軾は一切反論をしなかった。各地に取り調べの役人が派遣され、蘇軾の乗った船の船頭等が厳しく尋問された。その後、何ら証拠が挙がらず、蘇軾は無罪となったのだが、汚名を着せられたことは、少なからず蘇軾の評判を落とし、また、蘇軾の身に予期せぬ危険が迫っていることを如実に示すものであった。改革の理念と関係なく政治情勢に単に便乗して出世を遂げようとする者が大勢いて、謝景温はその典型で、改革に頑健に反対する蘇軾を罪に落とせば大きな手柄になると目論んだのである。(3) この手紙の日付より前の10月22日に范鎮が政界から引退している。范鎮は蜀出身の先輩で、蘇軾が合格したときの科挙の試験委員で、何かと蘇軾は世話になっていた[→作品番号 01-2-014]。范鎮もまた改革をよしとせず、5月に蘇軾を要職に就けるよう推薦して却下され、その後で蘇軾が弾劾を受けたことから、これが潮時と見て身を引いたのである]

■ 【03-3-024】送章子平詩敘

【解題】章衡 [字は子平] が鄭州知事となって都を去ることになり、人々が集まって送別の詩を詠んだ。それを集めた詩集に、蘇軾がこの序文を書き添えた。このときの蘇軾の詩は残っていない。章衡は蘇軾と同じ年に科挙を受け、最終の三次試験で首席となった人物である。

【訳文】

『進士登科録』を観ると、天聖の初めから嘉祐の終わりまで[仁宗皇帝の治世の約四十年間]に科挙に合格したのは四千五百七十七人であった。その中で貴かつ賢にしてその名が世に聞かれるようになった者は、いちいち数えられないほどに大勢いる。成績上位の三人だけを取っても全部で三十

九人いて、いまだに公卿^{こうけい}〔朝廷の上位者〕になっていないのは五人だけである。科挙合格者の勢いはこのように盛んなのである。……仁宗皇帝が在位すること三十五年のときまでに進士は十回挙げられ、我等の章衡君^{しょうこう}を得て、皇帝は首位とした。章衡君の文章は美しく、経術に富み、政事に敏く、内に正しい義を守り、行いは謙であるから、功名、富貴に迫られないということはないのである。首席になったからといって、誰もがこのようになれるものではない。しかし、信じられないことにここに躓^{つまず}くこととなった。これは取返して道を遠く、熟達して後に大きく成るといことなのであろうか。仁宗皇帝の明察は天が助けるところのものであったのだから、人によって事が左右されたりはしないのである。

熙寧三年冬、章衡君は右司諫直集賢院から鄭州知事として出て行くことになった。きつとまた章衡君が用いられることを知る士大夫は、十月丁未〔二十日〕、観音の仏舎に集まり、詩を賦して餞別した。私と章衡君は「同年の友」であるから、皆が序文を書くよにこい、辞退することができなかった。

【補足】〔この文章は、章衡^{しょうこう}を左遷するのは、仁宗皇帝^{じんそう}の遺志に反すると批判しているのである〕

■ 【03-3-025】送呂行甫司門倅河陽

【解題】司門郎中の呂希彦^{りょきげん}〔字は行甫^{あざな}〕が河陽^{かうほ}県の副知事として赴任するのを見送った詩。呂希彦は、作品番号 03-3-012 で見た呂希道^{ろきどう}と同じくかつての宰相の呂夷簡^{ろいかん}の孫。詳しくいえば、呂夷簡には、呂公綽^{ろこうしやく}、呂公弼^{ろこうひつ}、呂公著^{りょこうちよ}といった子がいて、いずれも朝廷の高官となり、呂希道は呂公綽の子で、呂希彦は呂公弼の子である。いずれにしてもそうした名門の子弟もまた次々に都を去って行ったのである。

【訳文】

貴君と交わりを結んでからそう長くはない、
しかし、ずっと頻繁に行き来してきたかのように思える。

貴君と知り合ってまだ幾日もならず^に別れの日がきて、

我が情の内には特別なものがある。

貴君は宰相を輩出してきた家に生まれ、

崢嶸として高く聳え立つ節義を具えている。

天与の才はもとより超越したものがあ^り、

世の中での経験もまた十分にある。

譬えれば、風とともに走る駿馬……

それでもやはり身に羈や手綱を纏うのは免れない。

念^{おも}うに、私は山中の人……

長らく鹿とともにいたのに、

誤って外に出て、世間の網に掛かってしまい、

一挙一動が俗人を驚かせることとなった。

田に帰る計画はまだ果せていないが、

去就いずれも軽いものとす^てでに思っている。

河陽は遠いところではない。

行き来する間にも出処の変化があるた^らう。

さあ、これで別れようではないか、

酒はあっても徒に傾け続けるべきものではない。

【補足】[蘇軾は、自分は野生の鹿と親しくしていたと比喩的に述べている]

■【03-3-026】書呂行甫墨顛

【解題】上に見た呂希彦[字は行甫]は無類の墨好きであった。これは遥か後年の文章であるが、ここでついでに見ておこう。

【訳文】

呂希彦りよ きげん君は宰相一家の子であった。振る舞いも節義も人より優れていたのが、不幸にして短命であった。普段から墨を集めまし たい ふぐり、士大夫は戯れて墨顛ぼくてん[墨狂い]と呼んでいた。郭祥正君かくしょうせいは呂希彦君と仲がよく、呂希彦君が遺した墨を出して見せてくれたので、ここに数字を添えておく。

■ 【03-3-027】 書茶墨相反

【**解説**】りよ きげん ぼくてん 呂希彦が墨顛であったことを示す別の短文があるので、それも見ておこう。

【訳文】

茶は白くならうとして、黒くなるのをいつも嫌う。墨はそれと正反対である。[白と黒には、澄むと濁るの意味もあるのだらう]

墨は磨って一晩経つと色がぼんやりしてしまい、茶は碾ひいて日が経つと香りがぼんやりしてしまう。この点はよく似ている。

茶は新しいものを貴び、墨は古いものを佳よしとする。これはやはり正反対である。

茶は口で楽しみ、墨は目で楽しむ。

さいじょう 蔡襄は老いて病んで飲食ができなくなったときに、茶にを煮て目で玩んだ。

りよ きげん 呂希彦は墨を集めることだけを好み、書くことはなかった。時に少しだけ磨ってそれを啜すった。

これは人を笑わせる話ではなかるうか。

【**補足**】さいじょう [蔡襄はひと昔前の先輩で、後に見るように、蘇軾は宋代一の名筆家であったとしている。また、茶にも造詣が深かった]

■ 【03-3-028】 与子明兄

【解題】11月22日付けの従兄の蘇不疑〔字は子明〕への手紙。

【訳文】

……近ごろ、蘇林君の葬儀を行いました。十日の休暇を得て、昨晚、八角鎮から帰ってきたところで、諸事全てを簡素にし、見送る者は十余人、八角鎮の役人も手助けしてくれました。有難いことです。蘇林の妻も彭と寿の二人の息子も安らかです。柳君も来てくれました。……

私は宜秋門の外に住まいを移しました。あたりは閑静で、家の前はすこぶる野趣があり、小さな庭を作るのによいところです。ただ、都にはきつともう長はいないので、そのような気持ちにはなれません。……

【補足】〔(1) この年の科挙で落第した甥の蘇林〔→作品番号 03-2-001〕は、不幸にもこの秋に亡くなり、この手紙にあるように11月に葬儀が行われた。まだ30歳で、妻と幼い二人の息子が遺された。(2) 「柳君」とあるのは、柳瑾〔→作品番号 03-3-003〕の息子の柳子文のそのまた息子の柳閔であろうと推測されている。柳子文の妻、つまりは柳閔の母は蘇渙の娘で、蘇林は蘇渙の兄の蘇澹の孫であるから、蘇林と柳閔は同世代の親戚ということになる。柳子文や柳閔は後に何度か登場するようになる。(3) 宜秋門は都の西側にある門で、もとは蘇軾の住まいは門の内側にあつたのだが、新たに門外に移ったのだろう。(4) 蘇林の死を巡っては、蘇不疑に送った別の手紙にさらに詳しいことが記されている。蘇林は蘇軾に借錢があつて、それを都にある家を売ることで弁済したい言い遺したことや、蘇軾の妻が持っていた髪飾りなどを売って蘇林の葬儀の費用に充てたことなどが、具体的な数字を挙げて書かれている。また、蘇林の住まいは都の殺猪巷という場所にあつて、その名は縁起がよくないので、蘇林の妻をそこに残すのはよくないと、蘇軾の妻が心配していることも書かれている。蘇軾は、蘇林の遺された家族の今後の身の振り方を、蘇不疑と協議して決めていこうとしていた。官員となつた者は、一族の出世頭として何かと雑事に関わらなければならなかつ

たのだった]

■ 【03-3-029】 与楊濟甫

【解題】 故郷の楊濟甫 [→作品番号 03-3-006] に送った手紙。

【訳文】

お手紙をいただき、よく眠り、よく食べておられるとのこと喜んでおります。私も家の者も陳州の弟もみな安らかでありますので、ご心配にはおよびません。

都に長らくおますと、薪は桂のように、米は玉のように高価で、貯えはすっかり尽きてしまいました。今年の冬は雪が四五尺も積もり、家に籠って、無聊をかこっております。ただ望むのは都から出よとの辞令が出されることあります。

第3章 不本意な歲月——都、郷里、都、そして旅

[第3章その四]

熙寧^{きねい}4年 [1071年]、蘇軾^{そしよく}36歳。

■ 【03-4-001】 送文与可出守陵州

【解題】蘇軾は前年の暮れに首都の仕事との兼務を解かれ、新しい年の初めに太常博士^{たいじょうはくし}に遷った。これは窓際族に追いやられたということであるのかもしれない。蘇軾が何を言おうとも改革は急ピッチで進められ、いつ足元をすくわれるかわからない状況にあって、地方への転出を真剣に考えるようになった。官職を擲って帰郷するということは、ひとつの可能性として時に夢想することはあっても、現実的な選択肢にはなりえなかった。超エリートとして国や民に対して立派な仕事をしなければならぬとの強い使命感があり、その一方で、先の従兄への手紙で見たように、一族の暮らしを支えていかなければならない立場にもあったから、官員という地位は簡単に棄てられるものではなかった。精神的に苦しいなかで、友人の文同^{ぶんどう} [字は与可^{あぎなよか}] [→作品番号03-3-014 など] が郷里に近い陵州^{りょうしゅう}の知事として都を出て行くことになった。別れの前に一緒に浄因院を訪れ、この詩を文同に贈った。浄因院の壁にはその長老の道臻^{どうしん}に頼まれて文同が描いた竹の画があった。浄因院は、かつて蘇洵^{そじゆん}に国宝級の名画を贈ってくれた大覚禪師^{だいかくぜんじ} [→作品番号02-1-002] がいるところである。

【訳文】

壁に描かれた墨君^{ぼくくん} [墨で描かれた竹]は言語を理解しない。

それでも墨君を見れば百の憂いを消すことができる。

我が友は墨君に似て、しかも言語を理解する。
友の節義は秋の霜のように純白で凛々しく、
健やかかして清らかな詩を詠み、
思想性は道家の真骨頂に迫る。
地位を下げられても意に介することはない。
暁の風に髪を自在になびかせて、
舵を操って長江を遡って行くことだろう。
川を巡る山々が朝焼けに赤々と照り映え、
千山のそのまた彼方に友の行く陵陽はある。
我が友は、遠く別れて行ってしまくと、
私の心持が悪くなるのを知っている。
だからこの墨君を見て、
己の憂いを解はうにしてくれるのだ。

■ 【03-4-002】玉堂硯銘

【解題】浄因院には孫洙そんしゆ [字は巨源きよげん] も同行した。孫洙は蘇軾より5歳上で、気心が合ったのだろう、この後もしばしばその名を見るようになる。蘇軾が書いた『玉堂硯ぎよくどうけんの銘』の序文だけを見ておこう。

【訳文】

文同は陵州に赴くことになり、孫洙は玉堂の大硯を贈った。文同は私にその銘を作ってほしいといっ
た。

■ 【03-4-003】 題趙岬屏風与可竹

【解題】 文同〔字は与可〕が去ってしまった後の喪失感を、趙岬ちやうこつという人が所蔵する文同の屏風画に次のように書き添えている。

【訳文】

文同ぶんどうが行くところ、口からはいつも詩が溢れ出て、手からはいつも竹が描き出される。文同は都にきて一年にもならないのに、地方に出ることを願って、故郷に近い町へと去り、詩も画もみな西に行ってしまった。

一日でも文同を見ないと、文同のことが想われてならない。文同という人は厳めしくも冷静で、どげどげざわざわした気分を静めてくれるし、せせこせこぺらぺらな気持ちを厚くしてくれる。

いまやこを去ること数千里。その詩は求めることはできるだろうし、その竹の画は描いてもらうこともできるだろう。しかし、その静めて厚くしてくれるところのものはもうないのだ。私は竹の画を眺めて嘆かかない。

■ 【03-4-004】 朱寿昌郎中、少不知母所在、刺血写経、求之五十年、去歳得之蜀中。

以詩賀之

【解題】 朱寿昌しゆじゆしやうが、生き別れになった母と 40 年余りを経て再会を果たしたことは作品番号 03-3-014 で見ているが、朱寿昌は皇帝に呼ばれて前年の秋に母とともに上京し、皇帝に褒められて官職に復帰した。朱寿昌は母の郷里に近い町に赴任することを希望したので、河中府かちゆうの知事となって、この春に都を発った。その折に多くの人が朱寿昌に詩を贈った。これは蘇軾が贈った詩で、題は、「朱寿昌は幼いころに母の所在がわからなくなり、自分の血で写経し、母を求めること五十年に及び、去年、蜀しよくで母に会うことができた。詩をもってそのことを祝う」。

【訳文】

ああ、貴君は七歳のときから母を想ってきた。
ああ、貴君の心の苦しみは成長するにつれて強まった。
ああ、貴君は老いに臨んでついに母と会うことができた。
喜びが極まり、涙が雨のように流れるばかりで、言葉は出なかった。
貴君は、宰相の地位に昇ることも羨ましいとは思わず、
貴君は、仙人になって天に昇ることに憧れもせず、
母の前で赤ん坊の服を着て、
赤ん坊の泣き声で甘えることを宿願として、
五十年を経てようやく成し遂げたのだった。
竜を煮て、宝玉を酒に変えて、母のための祝いの膳とし、
千年万年の寿命を祈った。
皇帝は美しい駕籠を使わして母を宮中に迎え、
金文字の詔書で貴君を官職に戻された。
貴君が母と別れ、そして再会した経緯を聞いて、
私は強く感じるものがあった。
現代ではこのような事例を他に聞かないが、
昔にさかのぼればなかったわけではない。
かん ぶ てい
漢の武帝は、
母がかつて卑しい身分にあったときに生み落とした姉がいると聞き、
自ら尋ね回って姉を宮中に迎えた。
漢の大將軍のかくきょへい霍去病は、
夫なき母より生まれたのだが、

遠征の途上でついに父を見付け出した。

ずいちよう
隋朝のある皇后は、

自分には親族が一人もないのを日頃から悲しみ、
ある農夫が「おいらの叔母は皇后様だ」と自慢していたと聞くと、
すでに死んでいたその男に高い位を贈った。

とうちよう
唐朝のある皇帝は、

自分の生母を知らないままに育ち、
戦乱で行方不明になったと後に聞くと、
四方に命じて捜したのだが、
ついに会うことはできなかった。
ところが、ある男は、
大臣になるまで帰らないと行って故郷を出ると、
母が亡くなったと聞いても、本当に帰らなかった。
とかく地位を優先する者が多い世の中であるから、
貴君を見て我が身を恥じる者が、
果たしてどれほどいるのたろうか。

【補足】〔(1) この詩の最後には、実は痛烈な皮肉が籠められているという。「母が亡くなっても郷里に帰らなかった人物」が、実際によりによって官員の不祥事を告発する部署の責任者におさまっていたのである。李定は、改革こそは自分が出世する絶好のチャンスと見て、亡き母の喪に服すべき期間にあることを隠して急いで都に上り、改革を絶賛して王安石おうあんせきからにわかりていに高い地位を授かった。王安石は自分の改革案に絶対的な自信があったので、口から出まかせの誉め言葉であっても、真実をいっていると安易に信じてしまったようで、王安石は自分に近づいてくる者の人物評定は極端に

甘かった。蘇軾を根も葉もない罪状で告発した謝景温しのかいおん [→作品番号 03-3-023] と李定は同じ穴のムジナであった。李定は、蘇軾にこの詩で嘲笑されたと感じたのだろう、謝景温のように失敗することなく必ず蘇軾を死地に迫いやろうと牙を研ぎ澄まし、数年後に満を持して襲いかかったのである。(2) 朱寿昌しゅじゅしやう を讃える詩を王安石おうあんせき も司馬光しばこう も詠み、そこは保革同舟であったのだが、司馬光も2月5日に許州知事として都を去った。ちょうどそのころに、郷里の従兄そふじぎの蘇不疑そふぎに送った手紙に、司馬光の子しばこうの司馬康 [もとは兄の子で司馬光が養子にした] が最近妻を喪ったので、蘇家の娘を嫁がせたらどうだろうかとの相談を持ちかけている。士大夫したいふ同士は、密に姻戚関係を結ぶことを好んだ。この縁談はその後不発に終わっている]

■ 【03-4-005】 韓續酷刑

【解題】 4月、秦州知事しん かんしんの韓續が、残虐な振る舞いで罷免になるという事件があった。ある者が酒に酔って、夜に誤って州知事の家に入ってしまったところ、韓續は下僕に命じて鉄の棒でその者を滅多打ちにして殺した。殺された者の妻は、血の染まった夫の衣を持って、都とうぶん こんの登聞鼓院 [→作品番号 03-1-001] の門を叩いて、皇帝に直訴し、韓續は譴責処分となった。その事件を巡って蘇軾が記した短文。

【訳文】

韓續かんしん しんが秦州知事であったとき、酷い刑罰を与え、恩愛に欠けていた。罪のない者を賊として殺したために、罷免になった。

秦州では、

「韓續かんしんに出くわすよりは、子育て中の虎に遭う方がまだ」

と、言い合っていた。

都の孫臨そんりんという者は、対句を作るのを得意としていた。ある者に、

「『莫逢韓玉汝』にうまい対句を付けてみよ」

と、いわれて、孫臨は即座に、

「可怕李金吾」

と、応じた。

この対句は天下に広まった。

【補足】[これは蘇軾の諧謔好みを示すものなので訳したのだが、若干の説明が必要である。原文のまま掲げた最初の句の「莫逢韓玉汝」[韓玉汝かんぎよくじよに逢う莫あかれ]は、玉汝あなは韓縝かんしんの字で、つまり韓縝あざなに逢ってはならないという意味。次の句の「可怕李金吾」[李金吾りきんごこそ怕おそる可べき]は、実は杜甫の詩にそのままある句。杜甫はあるとき李金吾とほ [都の警備を担当する金吾將軍の職務にある李という人物]のお供をして都の花を見てまわり、即興で詩を詠んだ。その中で、「酔って歩いてもう夜になり、閉門の刻限を過ぎてしまったから、こわいこわい李金吾將軍とほに叱られてしまう」と、歌ったのである。杜甫は李金吾將軍本人と歩いていたわけだから、その句は楽しく笑えるけれど、韓縝の方は笑えないので、対句として皮肉がきいてちょっとおもしろいのである。なお、ここに名の挙がっている孫臨がいかなる人物であったかは不明]

■ 【03-4-006】 浄因院画記

【解題】5月、浄因院じょういんいんの道臻長老どうしん [→作品番号 03-4-001] に頼まれて次の文章を記した。これは蘇軾の画論として特に有名である。

【訳文】

かつて私は次のように画を論じた。

人物、動物、建物、器物などには皆それぞれに固有の形、つまり「常形」^{じょうけい}がある。山や石や竹や木、あるいは水や波や霧や雲には決まった「常形」はないけれど、それぞれに固有の本質、つまり「常理」^{じょうり}がある。

画を描いて「常形」を失ってれば、人は誰もがそれに気付く。しかし、「常理」から離れている場合には、画を理解している人でも気付かないことがある。だから、世間を欺いて画で名を成そうとする者は、必ず「常形」のないものを描くのである。

画を描いて「常形」を失った場合には、そのものの形がおかしくなるだけで、画全体が台無しになってしまうわけではない。しかし、「常理」が当たらない場合には、画全体がすっかり駄目になってしまう。「常形」がないだけに、よくよく謹んで「常理」に心を用いなければならないのである。

「形」を徹底的に正確に描き切るのは、世間の技量の優れた人なら為し得るところである。「理」までを画に描いて見せてくれるのは、世間から超越した「高人」^{こうじん}であり、卓抜した才能「逸才」の持ち主でなければならぬ。

文同が描いた竹、石、枯木は、まことにその「理」を得たというべきである。その画を見れば、竹はこのように生じ、このように死に、このように^{かが}屈まり、このように曲り、このように瘦せ、このように縮まり、このように枝が伸び、このように葉が茂るものと、人の心を十分に満たしてくれる。根、茎、節、葉、牙、角、脈筋は千変万化し、始めから終わりまで同じものはないのだけれど、それぞれが全てあるべきところにあって、天の造化の「理」に合致していると、完全に人を得心させる。それはすなわち画を見る者が、達人の精神の内に包み込まれるということであるのだろう。

文同はかつて浄因院浄因院の方丈にふた群れの竹を描いた。そして、西に出て陵陽[陵州]に赴任するに当たり、浄因院の長老の道臻師^{どうしん}に別れを告げに行き、私も同行した。文同は方丈の隣の部屋に、二本の竹と一本の枯木を描き、さらには、本堂の四方の壁を白く塗り替えたばかりであるので、そこにも竹を描いてくれぬかと道臻師に頼まれた。文同は快諾し、そうした経緯を私が記すことになった。

後にここに「理」をよく知る者がきて、深く文同の竹の画を観るならば、私にここに書いたことが妄言ではないとわかってくれるであろう。

■【03-4-007】送劉道原歸觀南康

【解題】また一人、保守派の人物が都を去った。劉恕^{りゅうじよ} [字は道原^{あざな どうげん}] は史学に詳しく、司馬光^{しほこう}に招かれて『資治通鑑^{しじつがん}』の編集に携わった。もともと王安石^{おうあんせき}と親しくしていたので、王安石は劉恕を条例司^{じょうれいし} [改革の実行部隊] に加えようとした。劉恕は面と向かって新法を激しく批判し、王安石は怒りの余り顔色を変えた。劉恕は都には留まれないと覚り、親の世話をすることを理由に帰郷した。劉恕の父は劉渙^{りゅうかん}で、歐陽脩^{おうようしゅう}と同じ年の科挙に合格して官員になったが、剛直の余り50歳で退隱し、以来、廬山^{ろざん}の南に籠った。劉恕が権威に屈しないのは親譲りであった。

【訳文】

漢^{かん}の時代に宰相であった晏嬰^{あんえい}は、

身体は小さかったがその節義は見上げるばかりに高かった。

身分が低かろうが、白髪^{はくぱつ}の老人であろうが、

己を高く保っているのなら、

富貴は天の定めるところ、

目の前にあっても何ら心に迫ってくるものではない。

劉恕君^{りゅうじよ}は科挙に合格してからも、

十年の間は戸を閉ざして独り楽しみ、

百金を出して世に散り散りになってしまった書物^{しよぶつ}を買い集めた。

たちまち宮中にやってきて筆を揮い、

歴史を叙述して悪を正した。

三国時代の孔融^{こうゆう}は、権力者の曹操^{そうそう}に対してもへりくだることなく、

漢^{かん}の時代の汲黯^{きつあん}は、苛烈^{かじつ}に法を用いる張湯^{ちやうとう}を恐れることなく軽侮した。

劉恕君もまた孔融や汲黯と同じ、

手には刀もなければ鞭もなく、

ただ口だけで烈風のように相手を撃つのである。

劉恕君がいうには、

「静中^{せいちゆう}に我が身を置いて世俗を観ると、

まるで酒に酔って狂っているかのようではないか。

衣やら冠やらを乱して舞い踊り、

傍らの者は大いに笑いころげている」

我等の友人は次々に去ってしまい、

いまや貴君と私だけが都でのたのたしていた。

世間の人は皆私を棄て、

貴君だけは厚く付き合ってくれていたのです、

私にとっては有り難いけれども、

貴君にとっては危ないことではないかと心配していた。

朝、貴君は別れを告げにきて、

たちまち去るという。

帰郷^{こきゆう}の意^いはすでに翔ける鴻^{かう}を追うばかりであるのだろう。

匡廬^{きやうろ}先生^{せんせい}[劉恕^{りゆうかん}の父^{いふ}の劉渙^{りゆうかん}]は古^{いにしへ}の君子^{くんし}のような人、

冠^{かん}をはずして廬山^{ろさん}に籠^{かご}り、

それから二十四年、また髪は黒いという。

きつと貴君を膝に載せるくらいに喜んで迎え、
 近隣の人々を呼んで猪や羊を煮て酒宴を催すだろう。
 貴君はどうか私の姓名を匡廬先生に取り次いでほしい、
 いずれ隱者となった私がその座敷に上がることができるように。

【補足】[幾人かの歴史上の人物が挙げられているのは、強引に改革を進める王安石おうあんせきに屈しない劉恕りゅうじよを讃えるために故事を引いたものであって、細かく吟味する必要はないだろう]

■ 【03-4-008】賀歐陽少師致仕啓

【解題】蔡州知事の歐陽脩おうようしゅうは政界から引退することすでに心に決めていたが [→作品番号 03-3-021]、6月11日、朝廷から正式に認められ、歐陽脩はかねてから用意してあった潁州えいの隠居所に移った。蘇軾は晴れて自由の身となった歐陽脩に祝賀状を書いた。

【訳文】

……[初めに身の去就を決めるのは難しいということを古典を引いて述べる]……伏して思い見るに、
 観文殿かんぶんでん学士太子少師[歐陽脩おうようしゅう]の徳は形容しがたいほどに完全で、その人としての大きさはかなる器にもおさまるものではありません。三代の皇帝のもとでのお仕事は高く人々から仰ぎ見られ、その文章は百世にわたる師というべきであります。人には知られていない国家を安んじた功績があり、艱難の中であってその節義は現れ出たのであります。……[以下、賛辞が続く]……外においては天下の人々は老成べてらんの去るのを惜むのでありますが、私においては明哲めいてつによって身の全きを保たれることを喜ぶものであります。これより夏はますます盛りに向かいます。くれぐれも自重されますように。

【補足】[ここでのキーワードは「明哲保身めいてつほぜん」であろう。これはお消極的な保身の術で

はなく、叡智によって禍を避ける積極的な行為である。蘇軾自身もまたその道を探っていたのである]

■ 【03-4-009】 与子明兄

【解題】蘇軾にも新たな辞令が下り、杭州副知事として都から出て行くことになった。そのことを従兄の蘇不疑 [字は子明] へ報せる手紙。

【訳文】

……[従兄が巻き込まれた訴訟事件のその後の経緯]……先ごろお手紙をいただきながら、忙しすぎまぎれてお答えできずにおりました。官職に在っては常に何かしら事があるのは意に介するまでもありませんが、近頃、外任を願い出たところ、御恩を賜って杭州副知事となりました。近日中に皆を引き連れて宛丘[陳州]に行き、弟の家族と一緒に四五十日ばかり過ごし、涼しくなるのを待って杭州に向かうつもりです。……六月十七日

【補足】[都から杭州まで、隋から唐の時代に造られた大運河によって、水路で結ばれていた。大運河は当時にあつては新幹線のようなもので、高速大量輸送を可能にして、中国の経済発展を支えた最も重要なインフラであった。大運河からは数々の運河が派生して、各地を縦横に結ぶ「新幹線網」が発達し、蘇軾は生涯の間に、幾度となくこの「新幹線網」の中を行き来する。弟がいる陳州は「新幹線網」の中にあつたので、杭州に赴任するに当たって、まずは陳州に行って弟に会おうと計画したのである]

■ 【03-4-010】 与宝月大師

【解題】同じころに成都にいる宝月大師 [惟簡] [→作品番号 03-1-009] に送った手

紙。

【訳文】

久しくお手紙を差し上げませんでした。これは急情なためで、いつも通りのことです。史厚秀才と蔡褒君が来て、お手紙を届けてくれました。貴僧が佳勝でありますこと、皆様が安らかでありますことを知りました。私は外任を願って、御恩によって杭州副知事となり、まもなく都を発ちます。まずは陳州に行き弟のもとに集まり、九月の初めに杭州に向かいます。ますます郷里から遠くなります。

士瑜、士隆の二人のお弟子さんの紫衣師号について重ねて書いておられますが、近頃、王誨殿が士瑜に海慧大師の号を与えるよう奏上し、十日ほどのうちには許しが出るはずです。……

【補足】[幾人かの名が挙げられている。史厚は、蘇軾の母の実家の程氏と姻戚関係があり、これより8年後の元豊2年に科挙に合格したが、それからわずか1カ月後に亡くなっている。蔡褒 [字は子華] は蘇軾の郷里の隣の青神県の人である。士瑜と士隆は宝月大師の弟子で、その二人に大師号を授ける朝廷の認可が下りるよう、蘇軾が助力していたのである。王誨は作品番号 03-2-011 で見たように、皇帝と姻戚関係にあることから、朝廷への働きかけをしてもらうには頼りになる人物であった。王誨は蘇軾が杭州に赴任するに当たって、茶や薬など様々な贈り物をしている]

■ 【03-4-011】 王仲儀真贊

【解題】蘇軾は都にあって王素 [字は仲儀] の子の王鞏 [字は定国] と親しく付き合うようになったのだが [→作品番号 03-2-010]、蘇軾は杭州に赴任するに当たって、王素に挨拶するためにその屋敷を訪ねた。そのことについて8年後の元豊2年に書いているので、それを見ておこう。

【訳文】

孟子は梁の恵王もうし りょう けいおうに向かってこのようにいった。

「いわゆる故国ここく〔伝統のある立派な国〕とは、高い木が繁る国土をもっていることをいうのではありませ
ん。世臣せしん〔代々仕える大臣〕がいることをいうのです」

孟子はこのようにもいった。

「政治は難しいことではない。巨室きょしつ〔代々仕える重鎮〕の信頼を失わなければよいのである。巨室に慕
われるということは、一国全体から慕われるということであって、一国全体から慕われるということは、天
下から慕われるということである」

「世臣」とは単に代々禄を食む者をいうのではないだろう。「巨室」とは単に富んだ大きな家をいうので
はないだろう。その時代において著しい功績があつて徳を具えているとして、人々から信頼を得ている
者であつて、それを、人に愛され養われて幹が大きく太つて高くなつた木に譬えたのである。「世臣」や
「巨室」は一日でそのようになったのではない。そのような人は普段は何もないかのように振る舞ひ、商
売で利を得ることや税を徴収することにおいては新進の者に及ばないのだが、ひとたび国家の一大事
となつたときには、大きな決断を下し、大衆を安堵させ、呼べばたちまち皆が集まり、事が終われば皆
がもとのところに戻つてゆくようなことができるのは、ただ「世臣」や「巨室」だけなのである。

私は嘉祐年間に初めて懿敏王公いびんおうこう おうそ〔王素は死後、懿敏の名を皇帝から贈られた〕と成都で知り合
いになり、その後、私は鳳翔府ほうしょうに赴任し、公は許州から平涼へいりょうへと移られた。そのときに、夏国の兵が大
挙して国境を犯し、転運使てんうんしが軍の指揮を執つたのだが、副総管と意見が合わなくて、軍の規律が乱
れたために、人々は大いに恐れて、西方の地域に動揺が広がつた。そのときに公が平涼に赴任してく
ることになった。人々は喜んで公がきたことを伝え合い、旗を輝かせ、戦太鼓を鳴らして大いに勇んだ
ので、敵軍はたちまち去つてしまつた。公が実際に至つたときには、その地ちにあっては老臣らうしん〔長く務める役
人〕や宿将しゅくしょう〔経験豊かな將軍〕とのんびり酒宴を催すしかすることがなかつたのである。これによつて、
老臣や宿将の用い方とはかくあるべきだと私は知つたのだつた。公の代わりにもしも新進の者が事に當

たっていたならば、古の名将いひしえのような勇氣や古の名相のような機敏な策を有していたとしても、このように黙っていてもたちまち事が成るようにはならなかったはずである。

熙寧四年秋、私は錢塘せんとう [杭州] に行くことになり、都にある公の私邸いつらうじやうの伏老堂でお会いし、日暮れに及ぶまで酒を飲みかわし、時代の状況についても論じ合った。公は、いわれた。

「わしはもう老いた。恐らくはもうまた会うことはないだろう。君は厚く自愛するがよい。わしのこの言葉を忘れず*い*てほしい」

それから二年して公は亡くなった。その六年後に、公のこの真筆に賛を書き添えて、公の子の王鞏おうきやうに与える。

……[以下、王素を讃える韻文が続く]……

【補足】 [(1) 王素と初めて成都で会ったことは作品番号 01-2-021 で見ている。 (2)

王素の業績の評価は明らかに誇張されている。熙寧4年のころは、まさに「世臣」

「巨室」がないがしろにされて、新進の者が大いに起用された時期であったので、

「世臣」「巨室」の代表者である王素を特に賛美したのである。この賛を書いた元豊2年はまだまだ改革派の時代が続いていて、その年の秋に蘇軾には恐ろしい運命が襲いかかるのであった]

■ 【03-4-012】 題晋人帖

【解題】蘇軾は王詵だけでなく、やはり皇族と親類関係のある李瑋とも交流があった。李瑋の父は仁宗皇帝の舅であり、自身も皇帝の娘を娶った。

【訳文】

唐の太宗皇帝は晋朝時代の人の書を買集め、王羲之父子のほか千軸ほどあった。王羲之の

『蘭亭序』は玉匣に納められて昭陵 [太宗の墓] に埋められ、世の人はもう二度と見られなくなった。そ

のほかのものは、宮中に秘蔵されたのだが、則天武后のときに張易之兄弟がそれを竊み取り、後に民間に流れ出て、多くは王涯や張延賞[いずれも唐代の名家]の家に納まった。王涯が失脚すると、軍人に掠め取られ、軸から金や玉が剥ぎ取られ、書は棄てられた。

私はかつて李瑋の家で晋人の書を集めた数帖を見たが、どれにも「涯」の字の小印があったので、王涯の所有物であったのだろう。謝尚、謝鯤、王衍などの帖があり、いずれも優れたものであった。なかでも、王衍の書は独り超然と抜き出ている、鶴の群れが翼を広げているにも飛び立つばかりの勢いがあった。

【補足】[南北朝時代の晋朝の時代には王羲之を初めとして名筆家が輩出し、後代の人々は少しでもそれに近づくことを目指した。ここには、重要な文化財がどのような命運をたどるかがよく示されている。王朝が隆盛のときに、文化に理解のある皇帝がいると、宮中に集められて厳重に保護されるのだが、皇帝が無関心であると、空しく宮中の奥深くで虫に食われたり水に濡れたり、あるいはいつの間にか民間に流出したりし、戦乱の中で散り散りになって、失われてしまうのである。そのような繰り返しを経て、わずかなものだけが現代に遺されているのである]

■ 【03-4-013】 与堂兄

【解題】 都を発つに当たって従兄の蘇不疑 [字は子明] に送った手紙。

【訳文】

……[司馬光の子との縁談はまとまらないだろうということが書かれている]……

私は長らく郷里の墓地のことを思い、親しい友は帰ってくることを望んでいます、敢えて帰郷することは願い出ないで、朝廷に一切をお任せしましたところ、行き先が杭州に定まりました。陛下は初めは州知事にしようとしたのですが、中書省が不可として、潁州副知事の辞令が出されました。陛下はそ

れに同意されなかったので、杭州に決まったのでした。杭州は豊かな大きな州でありますから、中書省が私を知事にしなくなかったのは、新法を執行しなくなるのを恐れたからなのでしょう。……

蘇林君の妻と二人の息子は元気しております。一緒に杭州に行くことを望んでいますので、連れて行きます。最終的にはどのようにしたらよいでしょうか。兄上はいかにお考えでしょうか。……

【補足】〔前年の秋に亡くなった蘇林の遺族の扱いに蘇軾は頭を悩まし続けていた。夫を亡くした女性とその子は、厳しい状況に置かれ、例えば、范仲淹とその母もそうであった。母は夫の死後、息子の范仲淹を連れて夫の郷里に帰ったのだが、夫の親類に冷たく迎えられ、かろうじて朱氏と再婚できたので、息子とともに朱氏のもとに身を寄せた。後にそのような経緯を聞いた范仲淹は、発奮して苦学の末に科挙に合格したのである〕

■ 【03-4-014】 出都来陳、所乘船上有題小詩八首、不知何人作有感余心者、聊為和之

【解題】杭州までは船旅で、都の中を貫通する蔡河を下って南に出た。船は官が借り上げたもので、その船室の壁に誰かが詠んだ8首の詩が記されていた。蘇軾は旅の折々に、その詩と同じ韻を用いてやはり8首の詩を作った。

其の一

船着き場の青い草の内で鳴く蛙、
川の合流点に垂れる柳の内で騒ぐ蟬、
そして偶然ここに居合わせた旅行く私——
新たに雨が通り過ぎる。

其の二

鳥が楽しむとき、獲り網があるのを忘れ、
魚が楽しむとき、釣り餌があるのを忘れる。
安らかにいられる場所はどこかと選ばなくても、
流転してやまぬ広大な天下には、ここというところがきつとある。

其の三

炊事の煙が村から上り始め、
朝日が投げかける光はまだ弱々しい。
田園はどことも懐かしさを誘うのに、
どうして郷里に帰らずにいるのだろうか。

【補足】 [後半の二句の原文は「田園^{でんえん}処^{しよ}処^{しよ}好^よ、淵明^{えんめい}胡^こ不^ふ帰^き」 [田園^{でんえん}処^{しよ}処^{しよ}に好^よく、淵明^{えんめい}胡^こぞ^そ帰^きらざる] で、「田園はどこともかしこもすばらしいところであるのだから、陶淵^{とうえん}明^{めい}が帰郷しないはずはない」と、自身を陶淵明になぞらえて詠んでいる。船は次第に
湿潤な地域へと入って行き、船から眺める風景は穏やかで美しかったのだろう]

其の四

私の旅は速くなく遅くなく、
軽やかな^{かい}櫂の動きにゆらりゆらりと進んで行く。
船が止まると村の市は^{いち}にわかに賑わい、
水門が開くと勢いついた波が川にみなぎる。

其の五

船上の人間は炎熱に一日苦しめられ、

高い木々に囲まれた入り江に船を停泊させる。
 空にはまだ月が上ってこないかわりに、
 黒い雲が今にも崩れそうな形でそそり立つ。

其の六

地上の万の穴が一斉に共鳴するかのように雷が轟き、
 天上の池の水をまき散らすかのように風が吹き過ぎる。
 雷と風が撃ち合う騒動は一瞬にして終わり、
 天空に北斗と南斗がかかえる。

其の七

ここはえいすい潁水であってかんすい漢水ではない、
 しかし、水は同じ若い葡萄の実の色をしている。
 もも漢水であるのなら、我が故郷へと通じ、
 子供等が懐かしい童謡を歌うのが聞こえてくるであろうに。

【補足】[蘇軾を乗せた船はさいが蔡河からえいすい潁水に入った。かんすい漢水は故郷のしよく蜀を源とする川で、
 作品番号 01-2-028 に漢水を詠んだ詩があった]

其の八

私のこの詩は拙いものであるけれど、
 心が平らになるにつれて、調べは良く和すようになった。
 年来の煩惱もいずれは尽き、
 波の立たない古い井戸のようになるであろうか。

【補足】 [このときの旅には、妻の王閏之、長男の邁 [13 歳]、次男の迨 [2 歳]、乳母の任採蓮、使用人兼友人の馬正卿、それに蘇林の妻と 2 人の息子が同行した]

■ 【03-4-015】 次韻子由初到陳州二首

【解題】 上の一連の詩では潁水に入るまでを歌っていたが、旅を最初に戻すと、蘇軾はまず弟がいる陳州を目指した。弟は前年の初めに、陳州の学校の教授として張方平に招かれ、陳州に着くとすぐに 2 首の詩を蘇軾に送った。蘇軾は都を出て陳州に向かう途中で、その弟の詩に次韻して返した。

其の一

孔子の時代から遠く離れ、
道徳が失われて久しいとはいえ、
僕らは円熟した人々に出会うことができた。
その人達も、そして僕らも、もはや老い衰え、
いまさら実用の学に転じることなどできもない。
役立たずの独活の大木を決め込み、
この有り難い御代に阿呆の身を委ねるとするのか。
昔から、無名の貧乏人であればこそ、
生涯親から離れずに孝行できるというではないか。
己の暮らしを大切にしていきたいものだ。

【補足】 [「円熟した人々」 [原文は老成] とは歐陽脩や張方平のような人々を指し、皆改革に反対して地方に去った]

其の二

故郷と別れて三年、
 山の松は生き生きと育っているだろうか。
 故郷を思い続け、
 その心はいつまでも変わらない。
 時には、戸を閉ざして夢に故郷を尋ねもする。
 行ってみると、僕の愁いを語る相手はそこにはいない。
 夢より醒めれば、
 やはり、僕の愁いを語る相手はいない。
 流れる涙を添えて、
 君がいる南の地へと送ろう。

■ 【03-4-016】 次韻子由柳湖感物

【**解題**】^{ちん}陳州に着くと、そこで70日余りを過ごした。それだけ長期にわたったのは、夏の暑さを避けるためと、弟とできる限り長く一緒にいたかったためであろう。弟が教授を務める州の学校は、町の北側の^{りゅうこ}柳湖のほとりにあった。柳湖のまわりにはその名にふさわしく1万株にも及ぶ柳が植えられていた。弟は柳湖についての詩を詠み、その中で、池の柳と山の松とを比較して、風に靡きやすい柳より、どっしりと構えて動かない松を堅固であると褒めた。それに対して、蘇軾は異なる見方をする。

【**訳文**】

思えば昔、^{とほ}杜甫が^{きしゅう}夔州の東の村にいたとき、
 茅葺のちっ掛けな家は青い山の下にあった。

杜甫は詩を詠み過ぎて辺境の地をさすらう身となり、
猿や鳥と愁いの声を競ったのだった。
君もまた都の人から棄てられてしまい、
いつも独りぼっちで馬に乗って歩み、
りゅうこ
柳湖の一万株の柳だけが、
朝に夕に、君のために清らかな蔭を作って待っていてくれる。
そうであるのに、
柳に対して酷な評価をしたのでは、
柳もがっかりして元気に繁ることができないだろう。
柳は口がきけないし、怒ることも知らないけれど、
君の言い方では世間の人々だっがっかりするだろう。
春の柳の光り輝きまは、
女性のあでやかな姿の譬えによく用いられる。
ねじ曲がった松の根が、
空腹に苦しむ蛇に譬えられるのとは大きな違いだ。
朝には、柳の葉の緑の蔭は、炎天下の松の蔭より濃いものがあるし、
夜には、柳の枝には、松の枝には見られない揺れる月の光がある。
春には、花が風に乗って雪のように翻り、
秋には、きつつき 啄木鳥の虫を啄む音つひばが高く鳴り響く。
四季によって、繁っては落ち、繁っては落ち、
寒さにつけ暑さにつけ、盛衰の異なる姿を見せてくれる。
山の松は、積雪に埋もれようとも凍え死ぬことなく、
常に同じ緑を保っている。

だからといって、

柳と松とどちらかがより賢いということはないのではないかい。

【補足】[弟が右といえ、兄が左というのは、いつものやりとりである]

■【03-4-017】次韻張安道讀杜甫詩

【解題】上の詩の冒頭で杜甫に言及しているのは、張方平〔字は安道〕が陳州で杜甫の詩を熱心に読んでいたことと関りがあるのかもしれない。張方平が杜甫の詩の感想を詩に詠んだので、蘇軾はそれに和した。唐代を代表する詩人といえば杜甫と李白であって、さらには杜甫こそが中国の最大の詩人であるとするのがごく標準的な見方となっているが、杜甫の詩が際立って高く評価されるようになったのは蘇軾の時代のことからで、この詩には後に定説となる杜甫の詩に対する見方が打ち出されている。

【訳文】

古代の詩の輝きが薄れると、

詩の流れは横暴な君主達によってねじ曲げられ、

宮廷詩人が媚びた賦を作る一方で、

中央から放逐された屈原が新しい詩の形式を創った。

それからさらに詩は変転し、

崩れも壊れも、

たくさん俊英が現れました。

辺鄙な土地に奇怪な物産が出現するように、

源流から離れたところで詩は狂乱の態を呈した。

厚化粧が真の美しさを凌駕するかのように惑わせ、

神に供える神聖な豚や羊よりも生臭い魚や蝦えびが大切にされました。

今では誰もが知るように、

杜甫とほが現れ出て、

その名は李白りはくと共に高く並び、

大地はきれいに掃き清められ、

ただ二人の足跡だけが並ぶのを見るようになった。

詩を作る者は追い詰められて苦しむのが常で、

天の意志がそうさせるのだろう。

唐とうの天下が暗い塵に覆われ、平和が崩れ去ったとき、

皇帝は暴れる化け物を切って捨てようと、

勇猛な武将だけを求め、

文に優れた者は顧みられなかった。

李白も杜甫も失意に沈んで遠く辺境の地をさまよい、

その悲しみの声が遠く万里の彼方に聞かれた。

李白は鯨にまたがって大海の向こうに行こうとし、

杜甫は虎にまたがって大地の向こうに行こうとした。

杜甫の大いなる筆は竜をも退治するものだったが、

官に就いたときにはしかない厩番うまやほどの役しか与えられず、

世知に疎いために、手にした物は何もなく、

あるとき久し振りに大いに酔った日に亡くなったのだった。

今では杜甫の詩を手本とすべしと見られているが、

児童は単にそれをなぞる努力をするだけである。

現代の詩文において、

先頭に立って旗を振る者は誰であろうか。

他ならぬ張方平ちやうほうへい殿である。

張方平殿は杜甫の詩巻を開いて遙かに思いを馳せ、

会って語り合えないのを残念に思っている。

人は響き合う友を得ることを願い、

共に自在に才能を飛翔させるとき、

この天下も狭いと感ずるのである。

残念ながら、私には張方平殿に見ていただけるような佳句はない。

たまたま重陽ちやうようの節句を前にしてお酒を頂戴したので、

菊の花を丁寧に世話し、

草の中に埋没させてしまわないようにしたいと思うだけだ。

【補足】[結びの部分は、張方平ちやうほうへいから教わったことを菊の花に譬えて、それを守って行こうとの決意を示したものであるのだろう]

■ 【03-4-018】送張安道赴南都留台

【解題】張方平ちやうほうへいは改革に反対して都を出て陳州ちんに知事として赴任した。知事としての任務を誠実に果たそうとすると、中央からの指令に従って改革の実践に努めなければならない。張方平は自身の信条と実際の行動の乖離かいりに悩み、実務から離れた閑職に移ることを朝廷に願い出て、「南都留台」となることを許され、知事職から解放されて陳州を去ることになった。送別に当たって蘇軾はこの詩を作った。「南都」とは南京なんけい応天府おうてんのこと、「留台」とは皇帝が前線に出た場合などに、皇帝に代わって朝廷を指揮する役のこと。ただし、実際には名誉職であって、張方平は南京応天府にある私邸に退くことになったのである。

【訳文】

我が公^{こう} [張方平^{ちやうほうへい}のこと] は古^{いにしへ}の仙伯^{せんはく} [仙界の伯爵] の生まれ変わりであり、

世俗から超然と抜き出た姿は羨門^{せんもん} [伝説の仙人] と変わらない。

ところが、たまたま世間を救おうなどという志を抱いたために、

俗世に繋ぎとめられることになってしまった。

譬えてみれば、竜が皇帝の御苑に遊びにきたようなもの、

あるいは、鳳凰^{ほうおう}が皇城の儀式に参列したようなもので、

いつまでもせせこましいところに留まっているはずもなく、

いずれは遥かなる仙界に帰るのである。

我が公は皇居に出入りすること四十年に及び、

ただの一度も自身の憂患を口にすることはなかった。

そして、ふと「帰ろう」と漏らしたならば、

朝廷を挙げて引き止めようとしても無駄だった。

我が君 [皇帝] はまことに叡智に溢れ、

草の根を払って有用の士を探し求めておられる。

昔の君主は、

佳^よき人を朝廷に引きとめておきたいのなら、

その人の傍らに誠意をもって応じる人がいなければならぬのを、

よく知っていた。

我が公は、「帰ろう」と漏らすと、

すぐに居室をきれいに掃除し、

そこには何もかもなくなって、日光が差し込むだけとなったのを喜んだ。

こうして、我が公は、
 万物が生まれ出る以前のところで遊ぶ境地に至ったのだが、
 世俗の人はそのようなことは理解できない。
 私もまた世渡り術に疎く、
 世間においてくずくずするうちに、
 鬢に白髪が出るようになってしまった。
 出处進退などはまことにちまちましたことだ。
 いずれ我が公の後を追いつきかゝるであらう。

【補足】 [張方平が南京応天府に行くことが決まったのが8月26日。その前の8月10日、蘇軾はやはり陳州の学校の教授であった催度とともに月を見て遊び、翌年の同じ日にそのことを回想している]

■ 【03-4-019】 傅堯俞濟源草堂

【解題】 このころに、傅堯俞という人が引退後は別荘 [濟源草堂] で悠々自適の暮らしをするつもりであると語るのを聞いてこの詩を詠んで送った。傅堯俞は孟州の濟源県の知事であったときにそこの風光が気に入り、家を建てた。傅堯俞はこのころは許州にいて、新法に不満で、退隱の志があったのだろう。後の話だが、保守派が政権を奪還したときに、保守派はたちまち分裂し、傅堯俞は蘇軾の政敵となる。

【訳文】

私もがない役人仲間の一人として、
 やはり田園の暮らしに興味を持っている。
 いざ老いて身を引くときになって、

どこに廬を結んだらよかろうかと初めて慌てふためいても、
植えた木が立派な蔭を作るには十年どころではないし、
そもそも買い求めるための資金もないということになってしまふに違いない。
先生は、清らかな川の流れるに臨む地がよいとの占いを得てより、
すでに高い木々が画のような景観を作っているとのこと。
隣近所の人々も竹を愛しているようなので、
春ともなれば、
さぞかしおいしい筍がわんさと出てくるであろう。

■ 【03-4-020】 陸竜図詠挽詞

【解題】 陸詵りくしんという成都せいとの知事が、新法の弊害を訴え続けている最中に亡くなったと聞き、その死を悼んでの詩。

【訳文】

陸先生りくの真直ぐな節義は衆に抜きん出て、
峨眉がびさん山よりも高く聳え立っていた。
正しい道を行うことだけを考え、
自分のためになどということはなかつたから、
亡くなったときには家にわずかな蓄えさえもなかつた。
四川しせんを行き交う人々は、
陸先生が亡くなったのを皆が悲しんでざるのを聞く。
思えば、陸先生とは都で塵降る中でお見送りしてから三年になる。
陸先生の遺像は成都しけんかくの思賢閣にきつと飾られるであろうから、

鳳翔ほうしょうで樽酒を酌んで旧交を温め直したことがあるように、

何十年後かにはそこでまたお会いして、

私は涙で手巾ハンケチを濡らすに相違ない。

【補足】〔(1) 蘇軾ほうしやくは鳳翔府ほうしょうにいたときに陸誥りくしんと会っていた。(2) 思賢閣しけんかくは成都せいとにあって、成都の偉人の肖像を飾ると、蘇軾自身の注が付記されている]

■ 【03-4-021】次韻柳子玉過陳絕糧二首

【解題】先に都で会っていた柳瑾りゅうきん [字は子玉] [→作品番号 03-3-003] が、手持ちの食糧が絶えてしまうような難儀あざななありさまで陳州しんぎょくにやってきた。柳瑾もやはり改革派ちんに睨まれて、寿春じゅしゅんの地に追いやれたのだった。柳瑾の詩に和した。

【訳文】

其の一

天帝てんていは、

多才である貴君の真価を十分に試そうと、

激しい風雨の真つ暗闇の中を旅させているのだろう。

貴君は、

一羽の鶏が鳴けば、自分も合わせて鳴くようなことはしない。

それかために、

「なんとまあ米櫃いぐいがからつぽじゃわいり」

と、飯炊き婆さんを驚かせる始末となった。

杜甫とほという人は、

つんつるてんの着物はいくら引っ張っても膝までこないとと詩に詠んだ。

顔真卿がんしんけいという人は、

家計に無頓着で、数カ月にわたり一家で薄い粥を啜っていると記した。

苦勞を嘗め尽してこそ詩人の情味は深くなるものだ。

それでお尋ねするけれど、

貴君はいまどれくらいまで嘗めたのかな。

【補足】[杜甫や顔真卿がんしんけいと比べたらまだまだではないか、「詩人情味真嘗遍」しじん「詩人の情味は真じょうみに遍しんく嘗めてこそ]と、もっともらしいことをいえば、当然の切り返しとして、「そういうあなたはどうか」といいたくなるであろう。それに対する答えが次の詩である]

其の二

私のごときは、自分で自分に愛想が尽きる。

貴君の他には、誰も涙もひっかけられない。

青い灯のもとで夜更けまで貴君と語り続けつつ、

書物の読み方が出鱈目のままで、

年齢だけを重ねてきてしまったことに悲しみを覚える。

若い頃はせうし莊子の哲学にのめり込んだのに、

世を救おうなどと、しがない官員になってしまった。

今は南に行く旅の途中で、

向こうで何をするのかと思ったら、

秋の潮が遡ってくる際の、

一万の太鼓を轟かすような音を聞いただけであるのだろう。

【補足】[終わりにある「秋の潮」[原文は秋濤]とは、しゅうとう 钱塘江のせんとうこう 海嘯のかいしゅう こと。杭州こう

の南東で東シナ海に注ぐ錢塘江は、河口付近の潮の干満の差が非常に大きく、とくに大潮のときには激しい勢いで遡る潮と川の水とが激突して大きな音を立てる。海嘯見物は現在でも錢塘江の観光資源となっている。杭州に行つてすることといえば海嘯を見ることくらいだと、蘇軾は自虐的に戯れたのである]

■ 【03-4-022】 書李簡夫詩集後

【**解説**】ちん陳州滞在中に、蘇軾り そうえき あざな かん ふは同地に隱棲している李宗易 [字は簡夫] を訪問しようとしたが、李宗易は病に伏し、果たすことができなかつた。李宗易は10年余り前に官界から身を引いていた。これは、これより20年後の元祐6年 [1091年] に、李宗易の詩集の後ろに書き添えた短文。

【訳文】

こうし び せいこう ちん し おりょう ちゅうし
孔子は微生高を褒めなかつたし、孟子は於陵の仲子を褒めなかつた。どちらも極端な行動を取り、それが人の情がはずれているのを嫌つたからである。

どうえんめい
陶淵明は仕えようとしたときには仕えたので、仕えるのを求めるのを嫌つたわけではなかつた。陶淵明は隠れようとしたときには隠れたままで、隠れることが立派であると思つていただけではなかつた。飢えれば門を叩いて食を乞い求め、鶏や黍が豊富であれば客を呼んだ。昔からいまに至るまで陶淵明を賢人であるとするのは、眞実の心のままであつたのを貴んでのことである。

り こうり そうえき てんせい かゆう き
李公 [李宗易] はその學問と政事で天聖年間以來、その名が天下に聞え、嘉祐年間の末から熙寧年間の初めにかけて、事を避けて退居された。普段から名利に惑わされることもなく、困窮にひるむこともなく、遇うところに安んじて、一生それを楽しんだ。陶淵明の眞実にほとんど近かつたのである。

熙寧三年、私は初めてちん よぎ陳州を過り、李公にお会いしようとした。しかし、李公は御病氣であつた。それから二十年が経ち、公自ら編集された七十篇の詩集を孫の李徳載り とくさい あざな こうほ [字は公輔] から頂戴した。それを

読み、深く嘆息して、私はいう。

「君子とはこのような人である。今はもうそのような人はいない」

げんゆう
元祐六年十二月初四日。

【補足】[弟の蘇轍はこれより前に李宗易を訪ねて言葉を交わしている]

■ 【03-4-023】 記鉄墓厄台

【解題】蘇軾の陳州滞在は70日余りに及び、その間にあちこち見てまわった。そのことを記した短文。

【訳文】

余はかつて陳州を過り、七十日余り留まり、町の近くの観るべきところは全て訪ねた。

柳湖のかたわらに丘があり、これを俗に「鉄墓」と呼び、陳の胡公[古の聖天子の舜の妻]の墓だといっている。町を巡る濠の水がその足元を噛んで、鉄の囲いが現れ出ている。

また、寺があって「厄台」と呼ばれている。そこが孔子が陳と蔡の間で災厄に遇った場所だというのが、その説は荒唐無稽で、信じるべきではない。あるいは漢の時代の陳愼王の劉寵の「散弩台」で、ここで黄巾の賊と戦ったともいわれている。この説が事実に近いのかもしれない。

■ 【03-4-024】 陪歐陽公燕西湖

【解題】蘇軾が陳州を発ったのは9月になってからで、弟の蘇轍も一緒に船に乗って潁州へと向かった。潁州には政界を引退した歐陽脩が隠居所を構えていた。陳州、潁州、そして杭州が水路で結ばれた線上にあったことから、兄弟揃って久し振りに大恩人に会うことができたのだ。潁州には西湖という美しい小さな湖があり、歐陽脩の大のお気に入りであった。歐陽脩には引退してから西湖の風光を詠んだ作品群があ

るので、それを先に一首だけ見ておこう。

【訳文】

おうようしゅう さいそうし
 欧陽脩『采桑子』其一

輕舟短棹西湖好、[軽やかな舟、短い竿、西湖はまことによろくて]

綠水逶迤。[青い水がのたりのたり]

芳草長堤。[長い堤に芳しい草]

隱隱笙歌处处隨。[どこからかぼんやりと歌声が聞こえます、私の気持ちに合わせるかのように]

無風水面琉璃滑、[風のないときの水面はガラスのようになめらかで]

不覺船移。[船が動いていることもわかりません]

微動漣漪。[ほんのかすかなさざ波]

驚起沙禽掠岸飛。[ぱっと飛び立った鳥が岸辺をかすめて飛んでゆきます]

【補足】 [(1) これは詩ではなく詞。詞と詩は異なる文学形式で、詞は楽曲に合わせて歌うための歌詞で、ここのタイトルの『采桑子』は楽曲の題名 [詞牌] である。

『采桑子』という曲があって、その音律に乗せて歌う歌詞なのである。曲名と内容はほとんどの場合に関連性がない。詞は上下二つの段落 [闋] に分かれることが多く、これもその例。詞は、既存の曲の音律に合うよう語句を埋め込んで作るので填詞ともいい、詩が五音とか七音とか句の長さが揃っているのに対し、詞は句の長さが不揃いであることから長短句ともいう。曲はもともとは酒席で妓女が演奏しつつ歌うようなものであったので、詞は男女の情愛を主題にすることが多かった。宋代に入って多くの文人が詞を作るようになってその内容が豊かになり、特に詞の発展に大きく貢献したのが欧陽脩だった。(2) 詞を日本語に訳すのは難しい。歌詞であるから、音楽とと

もに言葉が耳に入ってきて頭の中であるイメージが作られ、次に入ってきた言葉がそのイメージを変化させ、イメージの連鎖がうまい具合に大きな世界を広げていくようなときに、優れた詞だということになるのだろう。日本語で歌われる歌詞を、その意味だけをとって外国語に訳し、もとの曲と切り離して読んでみて果たしておもしろいだろうかと思像してみると、翻訳の難しさが理解できるであろう。ただし、幸いにもわれわれは漢字にある程度のなじみがあり、詞は詩に比べると語彙がかなり平易であることから、聴覚の代わりに視覚を活かして詞を鑑賞することがもしかしたら可能であるのかもしれない。そこで、音楽を聞く代替手段として、漢字からの視覚的刺激に依拠する詞の翻訳を試みることにする。つまり、目で漢字の並びを眺めて楽しむのである]

【**解題**】蘇軾の作品に戻ると、おうようしゅう えい欧陽脩は潁州にまできてくれた兄弟を大歓迎し、何はともあれせいこ西湖へと2人を連れた。詩の題は「欧陽公の西湖での酒宴のお伴をした」。欧陽脩はこのとき65歳だった。

【訳文】

おうようこう欧陽公はなお壮年であるのかというと、
鬚は雪のように真っ白である。
欧陽公はすでに老年であるのかというと、
頬ははかてかかと赤く光っている。
欧陽公のもとに参上すると、
早速湖の畔で美酒のお相伴に預かることとなった。
欧陽公は酔えば酔うほど縦横に談じ、

ついには激烈な言辞を吐くまでになる。

湖辺の草木に霜が降りるような季節になっただけれど、

芙蓉や菊の花が競い合うように明るく咲いている。

花を手にし、欧陽公の長寿を祝して舞うと、

欧陽公はこのようにいう。

「百年生きたところで、

びゅうと風が吹き過ぎるようなものだ。

仙人の仲間入りをして遊ぶのも悪くはなからうが、

そのためには飢えを忍んで仙薬を飲まなければならないのなら御免蒙ろう。

若死にするか長生きするか、勝手に決めてくれと、

疾とうから天帝に任せてある。

どっちを選ぶか頭を悩ませるのは天帝であるのだから、

私はこの世で楽しんでいければよいだけなのだ」

視線を上げると、

鳥が町から夕靄の中へと飛び去って行く。

視線を下げると、

灯さけがめに照らされた銀の酒みなも缸が湖の水面に映っている。

この詩を歌って、

まだまだ飲んでいただこと欧陽公に勧める。

残念であるのは、

我等兄弟には、宴席において琴を奏し、

その音で皇帝と大臣のわだかまりをときほくしたような腕前がないことだ。

【補足】[この詩の最後は、そのような故事に基づいて歌われている]

■ 【03-4-025】 欧陽少師令賦所蓄石屏

【解題】 欧陽脩おうえいしゅうは考古学の研究者としても知られ、潁州えいしゅうの家には古い物がたくさん集められていた [『六一居士伝』 [→作品番号 03-3-021] には「金石の遺文」という考古資料が「五つの一」の中に挙げられていた]。欧陽脩は収集品の一つである「石屏」を蘇軾に見せ、それを詩に詠むようにいった。それがこの作品なのだが、「石屏」とはどのようなものかということ、おそらく文人が愛好する硯屏けんびょう [硯の脇に置いて塵や風を防ぐもの] の一種なのだろう。あるいは、石の衝立ついたてで、実際にそこに画が描いてあったのかもしれないのだが、ここでは、石の模様を画に見立てているという解釈で訳すことにする。

【訳文】

誰がこの石の屏風びょうぶを欧陽公のために遺したのか。

石の上にあるのはかすかな墨の痕なのか。

描かれているのは林とか草ではない。

それとなく見えてくるのは、

雪を載せた峨眉がびさん山の西の嶺か。

そこに一万年を超える不老の松がある。

嶺に近付こうとしても、

崖が崩れ、谷は断ち切られている。

もわもわと空を覆う霧、

力強く差し込む夕日、

風の真の姿がそこにある。

これを見て初めて天の巧みを知ることができであろう。

私が恐れるのは、

ひつこう いまん
畢宏、韋偃のような昔の画工が、

死んで葬られて、骨はすでに朽ち果ててしまっても、

心はなお苦しみの中にいること——

「また画を極め尽くしていない、

それなのに、もはや我が腕を揮うことができない……

我が思いを描き表せない……」

そのような果たせぬ思いが墨の痕と化して、

この石に宿ったのか。

古来、画師は俗士ではないとされ、

物と現象を掴んで描き出そうとするのは、

詩人とはほぼ同じである。

願うのは、おうようこう 歐陽公御自身が詩を詠んで、

畢宏、韋偃の二人の不遇を慰め、

ゆうめいきゅう 幽明宮で憤りの余り泣いていないでもよいようにしてさしあげることだ。

【補足】ひつこう いまん どうだい [畢宏と韋偃は唐代の画師。「二人の不遇」とは、志を果たせずに引退を余儀なくされたおうようしゅう 歐陽脩のこともいうのであろう]

■ 【03-4026】 錢塘勤上人詩集叙

【解題】せい こ 先の西湖での詩に「すいご げきだん なお げきれつ 酔後劇談猶激烈」[酔後の劇談猶お激烈]とあったように、若い弟子を前におうようしゅう 歐陽脩は思いのたけを縦横に語ったのだろう。しかし、その具体的な内容はわからない。当時の政治情勢からして、文字として記録するのが憚られた

のだろう。そのわずかな手掛かりが以下に見る文章の中にある。これは、歐陽脩を訪れてから3年後の熙寧^{きねい}7年に書かれたもので、杭州の恵勤上人^{こう え こんしやうにん}の詩集の序文である。

【訳文】

昔^{かん}、漢の時代のこと、翟公^{てきこう}が朝廷の要職である延尉^{てい い や}を罷めると、家には一人も客人が訪れなくなった。後にまた朝廷に用いられると、客人がわんさか押し寄せようとしたので、翟公はその門に大きにこのように書いた。

「一人が死に一人がまだ生きている。そのときに二人の友情がどのようなものであったかがわかる。一人が貧しいままで一人が富む。そのときに二人の交わりの態度がどのようなものであったかがわかる。一人が高い身分に昇り一人が低い身分に落ちる。そのときに二人の友情がまさしく明らかになる」世間の人はこのことを言い伝えた。

私は翟公の人となりはやや軽薄であると考えている。それは翟公は客人を下に見ているからである。翟公が客人に接する姿勢は実は小さくせこましいのではないだろうか。

もとの太子少師の歐陽公は士を好むことでは天下第一であった。士の言辞^{みち}に一言でも道にあたることがあると、千里も遠いとはせず公は士に会うことを求め、それはその士が公に会うことを求めるのよりも強いものがあつた。天下の豪俊とされる人々の非常に多くは、公によって衆人の中から世に顕れるようになったのだつた。しかし、時には公に背く者もあつた。公は、人は知り難いものであると嘆き、士を好むことの戒めとした。思うに、公が士を好むことにはこれより少し倦み飽きるようになっていったのだつた。

公は潁水^{えいすい}のほとりに退隠し、私が会いに行くと、公は賢者とされる士についてなおも論じ、その名が世に聞こえないままになるのをたまたた恐れていた。公に背いた者については、「あれは私に罪があつたのだ。あの者に過ちがあつたのではない」といわれた。

翟公の客人が翟公に背いたのは、死生や貴賤の変化を経てのものであつた。公に士が背いたのは、ほんの一瞬のような短い間のことであつた。翟公は背いた罪は客人にあるとし、公は罪は己にある

とした。公はますます士を厚く重んじようとしたので、翟公よりもはるかに優れていたのである。

公は仏教や道教を喜ばなかったけれども、そちらの方の弟子であっても、『詩経』や『書経』のような儒学の古典を修め、仁義の説を学んだ者なら、必ず世に出られるよう推薦した。仏徒の恵勤は公に従って遊ぶこと三十余年、公はいつも恵勤が聡明で才智があって深く学問に通じ、特に詩に長じていると称えていた。

公が汝陰[潁州]で亡くなると、私は恵勤の僧舎で哭した。その後も恵勤と会って話が公に及ぶと、恵勤は必ず涙をこぼした。恵勤にはもとより世に求めるものはなく、公もまた恵勤に何か益になるようなことをしたわけではなかった。恵勤が公のことを忘れずに泣くのは、利に基づくものではない。そのことから私は恵勤が賢であることをますます知るようになった。もし恵勤が士大夫の一員であって、政事に関わったならば、公の期待に応えるような仕事をきつとしたであろう。

熙寧七年、私が錢塘[杭州]より高密[密州]に赴こうとすると、恵勤は数篇の詩を取り出して、それに文を添えて広く世に伝えてほしいと私に求めた。私が考えるに、詩は文があって世に広められるものではない。恵勤の人となりがこのようであるのだから、その詩が世に広まらないことはないはずである。

【補足】 [(1) これは少々不思議な文章である。恵勤の詩集の序文でありながら、歐陽脩が人を遇する姿勢について大半の字数を費やしている。(2) 退隠後の歐陽脩の様子を伝える文章として3年後の作品を先走って訳したものであって、歐陽脩が亡くなったことや、恵勤がどのような僧であるかなどについては、次の章で改めて見てゆくことになる]

■ 【03-4-027】 潁州初別子由二首

【解題】 9月末に、蘇軾は潁州を発って杭州に向かい、弟は陳州に帰った。蘇軾、蘇轍、歐陽脩の3人の別れに際し、弟に与えた詩。

其の一

旅行く帆を西風に掛けると、
別れの涙が、清らかなえいすい瀬水の流れへと滴り落ちる。
ぐずぐず留まろうとしても益はない——
わかってはいても、
いまこの瞬間の光景を惜まずにはいられない。
我が人生において、
君との別れはかつて三度あったけれど、
この四度目が最も痛ましい。
思うに、君は父上に似ていて、
ぼくとつ木訥ごうにして、「剛」かつ「静」である。
えききょう『易経』にいうところの、
「良い人は言葉数が少ない」とは君の「静」、
「石のように固く、機智に富み賢い」とは君の「剛」である。
今に至るまで、天下の士で、
朝廷を去るに当たって君ほど勇猛であった者はいない。
僕は長らく「狂」を病む者となり、
ぼっかりと大きな穴が開いているのにも気付かず歩いていたようだ。
酔っ払って落ちてしまって、
幸いにも、醒めたら傷を負っていなかったようなものだったのだ。
これからは、暇を得た折などには、
黙って座って日を送るようにするつもりだ。
君がもう心配しないですむよう、

そのことをこして詩に詠み込み、

一日に三度は反省するようにするよ。

【補足】[今回が4度目の別れとあるのは、蘇軾が鳳翔^{ほうしやう}に赴任したときが1回目、蘇軾が鳳翔から都に帰り、入れ替わりに弟が地方官となって出て行ったときが2回目、そして弟が陳州^{ちん}の学校の教授に招かれて都を出たときが3回目であるからだ]

其の二

別れがすぐ近くに行くだけのものなら、

ことさらに表情を変えることもないだろう。

別れがひどく遠くに行くものなら、

涙が胸を濡らすであらう。

しかし、隣にいても会わないでいるのなら、

大地の端と端にいるのと変わりはない。

人生に別離というものがなければ、

恩愛の重さを知ることはない。

僕が宛丘^{えんきゆう} [陳州] に着いたばかりのとき、

君の子どもたちは僕の衣を引っ張って踊った。

その瞬間に、僕は別れの悲しみがあると知った。

だから、秋風が吹き過ぎるまではと、

君のところに留まったのだった。

もうとっくに秋風は終わってしまい、

別れの恨みは窮まるどころがない。

君は問う。

「いつ帰ってこられますか」

僕はいう。

「木星が東の空に見えるときだろうか」

天界の星は常に巡り巡っている。

別れと会つた常に巡り巡っている。

そして、憂いと喜びが常に攻め合っているのだ。

こゝしてここまで詩を詠んできて、

僕は大きく長く嘆息する。

我が一生は結局のところ、

根がなくて風のままに飛ばされる蓬よもぎのようなものであるのだろう。

ああ、憂うのはもうよそう。

憂いが多いと髪が早く白くなってしまふ。

その最たる証拠として、

君も見るがいい、

ろくいちおう
六一翁ろくいちおうがそこにおられるのを。

【補足】〔(1) 宛丘えんきゆうとは陳州ちんにある丘の名で、背の高い弟をその丘になぞらえて宛邱先生と呼ぶようになる。(2) 「根がなくて風のままに飛ばされる蓬」とは、中国の乾燥地帯に生える蓬の一種で、秋に地上部が枯れると根が抜けて風の吹くままに飛ばされる。寄る辺ない姿の「飛蓬ひほう」は、旅ないし人生の悲哀の象徴として唐代の詩に多用された。蘇軾はその「飛蓬」を、この詩以降、むしろ肯定的に捉えて用いるようになる。(3) この詩の終わりは、歐陽脩おうようしゆうの髪が真っ白であることに基づくジョーク。歐陽脩が若い頃から白髪が目立ったのは有名な話 [→作品番号 01-1-039]]

■ 【03-4028】 十月二日、將至渦口五里所、遇風留宿

【解題】蘇軾の乗る船は潁水えいすいを南に下って淮河わい がに入った。淮河は、中国を北の華北か ぼくと南の華南か なんの二つの文化圏に分ける境界であるとして認識されてきた大河川である。北は乾燥した麦作地帯、南は湿潤な稲作地帯である。潁水と淮河の合流点か こうを渦口かこうといい、10月2日に渦口まであと5里のところかこうで風のために前に進めなくなった。都から遠く離れたからなのか、このころから蘇軾の詩は俄然生き生きとしてくる。

【訳文】

淮河わい がに向かっていた間は、
 久しく風がなく、流れのままに、
 滑るような心地良さを存分に味わっていた。
 今朝は、
 雪を投げつけるような白い波が一面に立ち、
 平野が狭まってきたと感じ始めると、
 我が前に二つの山が立ち塞がった。
 その間から吹き出してきた風のために、
 川の水は吐かれるのか、呑まれるのか、ここで滞ってしまった。
 桑の木の根元に船を繋ぎ、
 ぎぶんぎふんと波間に舞い続けながら、
 夜を明かすことになった。
 船頭達は懸命に声を掛け合い、
 草なを縛っただけのような弱々しい綱を頼みとして、
 どうにかこうにかしのごうとしている。

私は普段から偉そうに、
「憂患なんぞ何ものぞ、
奇怪なことにも驚くものではない」
と、いていたので、
鬼神どもは私をこの危難に置いて、
「ぐう」といわせてやろうと、
このような戯れを仕掛けてきたのたろうか。
どれどれ、
かめ瓶の中にはまだ酒があったはずだ。
酒があるのなら我が運も尽きはしない。
それが今夜の結論である。

■ 【03-4-029】 出潁口初見淮山、是日至寿州

【解題】 風が止んで、えいすい潁水の出口からわいが淮河に入り、淮河沿いの山々を眺めながら、船はゆるゆると川を下ってじゅ寿州に至った。

【訳文】

我が旅は、
ちやうこう長江へ、そしてその先の海へと、
日夜、向かいつつある。
河畔には、
かえて楓の葉が赤く色付き、あし蘆の花が白く突き出し、
秋の感興は深まるばかりだ。

淮河の流れは平ら過ぎて、
 天と水と、どちらが遠くどちらが近いのやら——。
 彼方の青い山々の並びは、
 船とともに高くなったり低くなったり——。
 すでに寿州の白石塔が見えている。
 それでも、船の棹はいつまでも黄茅の岡の下にある。
 波はなく風は軟らかく、
 望み見てもなお到ることができない。
 あの青いぼんやりとした夕靄の中で、
 友は久しく立っていることだろう。

【補足】〔この詩は、船の旅を情感豊かに歌った詩として非常に有名であるので、旧来の鑑賞法である訓読法による訳文も添えておこう〕

我行日夜向江海、[我が行は日夜 江海に向う]
 楓葉蘆花秋興長。[楓葉 蘆花 秋興 長し]
 長淮忽迷天遠近、[長淮 忽ち迷う天の遠近]
 青山久与船低昂。[青山 久しく船与低昂]
 寿州已見白石塔、[寿州 已に見ゆ白石の塔]
 短棹未転黄茅岡。[短棹 未だ転せず黄茅の岡]
 波平風軟望不到、[波は平らに風は軟らかく望んで到ら不]
 故人久立煙蒼茫。[故人 久しく立たん煙の蒼茫たるに]

■寿州李定少卿出餞城東竜潭上

【**解説**】^{じゅう}寿州では長官の^{りてい}李定らに歓待された。この人が上の詩に詠まれていた夕靄の中で待っていた友人なのだろうか。^{りゅうたん}竜潭という池のほとりで、送別の宴が開かれ、その折に詠んだ詩。なお、この李定は先に作品番号 03-4-004 で言及した李定とは同姓同名の別人である。

【**訳文**】

カーカーと山の鴉が騒がしい——

神霊が宿っていそなこの古い池。

^{りゅうたん}竜潭の名の通り、

竜が吐いた息のような泡がぷくぷくと水面に浮き、

竜が吐いた涎よだれのような淀みが船のくりを取り巻く。

闇に潜む妖怪を照らし出すために、

^{さい}犀の角つのを燃やすようなことはできなくても、

底に潜む竜を誘い出すために、

雀を焼くらしいことはしてみたいものだ。

長官が別れを惜しんで笛を吹いてくださると、

その音が近隣の村々に響き渡り、

猿たちが聴きに集まってくる。

いつの年かこの土地を訪れる人が、

猿にも及んだ長官の仁愛を讃えて歌うときには、

この池の魚にも聞いてほしいものだ——

長官がここで私そうしと^{りゅうたん}莊子たちと同じような問答をしたということ。

【**補足**】〔(1) ^{りゅうたん}竜潭には何か怪異な雰囲気があったのだろう。犀の角や雀を焼くとい

った奇怪な伝承を織り込みつつ、長官の徳を称え、宴席での楽しい挨拶とした。(2)
 終わりにある「そうし莊子の問答」については次の詩の其の四を参照]

■【03-4-031】濠州七絶

【じゅ解題】ごう寿州から二百二十里で濠州に至り、しばらく濠州に留まって近くの名所を見て歩き、7首の七言絶句を詠んだ。

【訳文】

其の一 とざん 塗山

太古の昔、

う禹[古代のむしき聖天子]は無支わいが祁の助けを得て淮河を鎮め、

そのお蔭でいまも川はゆったりと濁って流れる。

禹は従順でなかった者を成敗し、

その骨がこの地にまだ残っているという。

とざん塗山の下にあるこうのうびょう黄能廟は、

治水に失敗して刑死した禹の父のこん鯀を祀ったもので、

いまも土地の人は薪を供えている。

塗山の前にはうかいそん禹会村があり、

そこは禹が諸侯を集めた場所であるとされ、

いまはかきぎ鳥や鶴が毎朝そこに集合しているのである。

【ごう補足】[濠州には古代の伝説的な聖天子である禹に所縁の遺跡があり、それを詠んだこの詩は、禹に関する知識を前提としているので、この訳文は説明を織り込んで冗漫になっている]

其の二 ほうそびょう 彭祖廟

彭祖いん しゅうは殷と周の時代をまたがって生き、

時代の盛衰を見つつ、亀と長寿を競った。

それでも、山中うんちゅうの雲母を仙薬にして飲んだのも虚しく、

三千年に一度だけ結ぶ西王母せいおうぼの桃の実は見られなかったのだ。

【補足】 [これは 800 歳まで生きたとされるほうそ彭祖を祀ったほうそびょう彭祖廟を詠んだもの。西王母せいおうぼは古代神話の女性の仙人で、その庭には3000年に一度実を結ぶ桃があり、それを食べると無限の寿命が得られるとされていた]

其の三 しゅうようだい 逍遙台

晋しんの時代のこと、常に酒を飲んでりゅうれいいた劉伶は、

「わしかどこかで死んだら、たたちにその場に埋めよ」

と、いって、従者にはいつも鋤を持たせていた。

己の遺骸の始末が気になっていたのだから、

死生を超脱していたわけではなかった。

荘子先生そうしにはそのような思いはなく、

死に臨んで、弟子から埋葬の仕方を問われると、

「野にさらせば鳥や鳶が食らうたろう、

それを奪って地けらに埋めて螻や蟻に与えたところで、

同じであろう」

と、いった。

【補足】 [濠州には庄子を祀ったそうし庄子祠があり、そこにしゅうようだい逍遙台があった。それにちな

んで、荘子の死生観を詠んでいる]

其の四 かんぎょだい 観魚台

ごく些細な点にこだわって同じであるか異なるかを吟味したら、

隣り合う肝臓たんのうと胆嚢たんのうだって、

楚国そこくと越国えつこくくらいに大違いということになるだろう。

万物は一つの理ことわりに帰るといことがまことであるのなら、

今僕が魚の楽しみを知ったことを君は直ちに知るのである。

【補足】そうし [荘子とその友人のけいし 恵施が問答を交わした場所だとされた水辺にかんぎょだい 観魚台が設けられていた。その問答は、人は他者 [人でも魚でもよい] の心の内を知ることができるのかということをやテーマとし、荘子は知り得ると主張した。蘇軾はこの詩で「万殊しゆいちり一理きに帰す」 [様々に異なる幾千万もの物も一つの原理から始まり、一つの原理に帰納される] という句で荘子の考えを首肯した]

其の五 ぐき 虞姫の墓

項羽こううが最後に漢軍かんに囲まれたとき、

虞姫は涙を拭って、項羽が悲歌するのに和した。

このとき項羽の意気はなおも天を覆う雲のようであった。

最後の最後まで項羽の心に背かなかったのは、

虞姫ともうひとり鄭君ていがいただけだった。

【補足】こう [濠州にはぐき 虞姫の墓と伝えられる塚があった。虞姫は項羽こううに最後まで付き従った女性で、項羽が殺されると自ら命を絶った]

其六 し ぼうてい 四望亭

しん 晋の時代に築かれた四望亭、
くず 頽れた垣と破れた礎いしずが叢くさむらによって覆われている。
『四望亭の記』を書いた李紳りしんの背が低かったことから、
「短李亭たんりてい」の異名が残っているのは、
あまりに無料であるので、
知事殿には、この廢墟に四望亭を再建して、
もっと風雅な「落霞孤鶩らくか こぼく」[夕暮れの雲は鳥とともに飛ぶ]を新しい銘としてほしいものだ。

其の七 ふざんどう 浮山洞

浮山洞は遠く東の海の底無しの谷に通じていると人はいう。
底無しの谷の上には波と共に五つの島が浮き沈みしている。
船に乗ってその島を見るなら、上がるやら下がるやらわかりようがない。
大地は水に浮き、水は空に浮いている。
そもそも物の浮沈など誰も知りようがないのだ。

■ 【03-4-032】 泗州僧伽塔

【ごう 解題】濠州からさらに淮河わいがを下って泗州しに至った。蘇軾が泗州にきたのはこれが 2 度目。これより 5 年前に、父と妻の亡骸を船に積んで故郷こきやうに帰る途中にもここにきていた。そのときは都から汴河べんがの流れに乗り、今回とは別のルートでここに至った。泗州は水上交通の要衝に当たり、大きな町であった。唐とうの初めの頃に、西方かの何国から僧伽そうがという人がきて仏教を広め、泗州のあたりで亡くなった。その後、僧伽は淮河のほとりにあった仏塔の上に姿を現し、人々の様々な願いを叶えたので、僧伽信仰が盛

んになり、その地に僧伽塔などの大伽藍を連ねる大寺院が作られた。僧伽はとくに航行の安全を守ってくれるとして船乗りによく信仰された。なお、この後も、蘇軾は何度となく泗州のあたりを行き来するようになる。

【訳文】

私はかつて南へと旅し、汴河べんがのここに船を繋いだ。
 逆風が吹くこと三日、砂が顔に当たり続けた。
 船頭達が、
 「一緒に祈ってください」、
 と、勧めたので、
 それに従って僧伽塔そうがどうに赴いたところ、
 供えた香の火が消えないうちに、
 帆柱に掛けてあった吹き流しの向きが早佻変わった。
 船に乗り込み、わずかの間に、
 振り返ると、泗州しの長橋ちやうきやうはもう見えなくなっていた。
 そして亀山きざんの下に着いたのはまだ朝飯前だった。
 そのときは、私の願いを叶えてくれたと喜んだのが、
 思えば、道を窮めた至人しじんは無心であるのだから、
 誰かには厚く報い、誰かには薄くということはないはずだ。
 田植えの時は人は雨を望み、稲刈りの時は晴れを望む。
 行く人は追い風を喜び、来る人は向かい風を恨む。
 もしも人それぞれの祈りを全て遂げようとしたなら、
 造物者ぞうぶつしやはあれもこれもと一日に千回も変化しなければならなかったろう。

今私は世の趨勢から遠くこの身を置いて、
去るものを追うことも、来るものを恋い慕うこともない。
僧伽塔から先へと進むのはもとより願うところ、
しかし、留まるのも悪くはない。
ここに来る者があるたびに願いをかけられたのでは、

さすがの神だってうんざりであろう。

とう ちょうかん

唐の澄観がここに當んだ塔を、

かん ゆ

韓愈は高さ三百尺と詩に詠んだけれど、

当時と今とでは姿が変わっている。

神の靈験を信じようとしない俗物の私を嫌って、

塔の階段を昇らせてくれないということではなれば、

雲を載せた山が淮河の左右を取り巻く景色を上から一目見るとしよう。

■ 【03-4-033】 如夢令

【**解題**】これは詞。「如夢令」は曲名で、「淮山楼に題す」という副題がある。淮山楼は泗州にあった楼閣。蘇軾は後に詞の達人と目されるようになるが、若い頃には詞にあまり関心がなかったようで、ごくわずかな作品しかない。

【訳文】

城上層楼疊巘。[町の上に仰ぐのは高く重なり合った楼閣]

城下清淮古汴。[町の下に見下ろすのは清らかな淮河と古い汴河]

挙手揖吳雲。[手を挙げて挨拶するのは南の吳の雲]

人与暮天俱遠。[暮れ行く空とともに人は遠くを想います]

魂断、魂断。[心が断ち切られてしまいます]

後夜松江月満。[真夜中の松江に、月の光が満ちていることでしょう]

【補足】[詞は、もともとは楽曲に合わせて主として男女の情愛を歌うものであった。この作品は、男女の情愛と旅情とを混ぜ合わせて詠んだものである。淮山楼に登って南を眺め、これから旅して行く呉や蘇の地へと寄せる思いを、あたかも遠い地に去ってしまった恋人を想うかのように歌っているのである。松江は蘇州の太湖に注ぐ川で、昔から風光明媚なところとして知られていた]

■ 【03-4-034】 亀山

【解題】前の前の詩で「朝飯前に着いた」と詠んでいた亀山での詩。

【訳文】

我が生はゆらりゆらりと揺らぐばかり——

どこに行き、何を求めようというのか。

再び亀山の前にくるまでの間に、

五年の歳月が流れ、

万里を旅し、天下の半分ほども巡っただろうか。

亀山に庵を営む僧は、

ひたすらここで寝起きをして老齡に至った。

都はすでに遠く北に地を隔てるところにまできて、

私はなおも海に連なる潮に乗って、

東へ東へと游を続けなければならない。

六百年余りの昔、

南朝の皇帝は北朝の侵攻を防ごうと、
ここに砦を築いたという。
そのことを今誰が知り、
砦の崩れ去った址はどこにあるのだろうか。

■ 【03-4-035】 発洪沢、中途遇大風、復還

【**解題**】わい が ちようこう 淮河が長江に合流しようとするあたりには多数の湖沼が存在する。長さ八十
里のこうたくこ洪沢湖で一晩停泊してから出帆したところ、激しい向かい風に遭い、また湖に引
き返した。

【**訳文**】

風と波がたちまちこのようになるとは、
私の旅の行く末は一体どうなることやら。
とりあえずは、帆を掲げて西に戻るしかあるまい。
そう決めたのは悪い選択ではなかった。
こうたくこ 洪沢湖までの三十里は飛ぶか如く――
我が船が帰ってきたのを見て、
「難儀でござりましたなあ」
土地の人々が親しく労ってくれ、
酒を携えて売りにきてくれる者もいる。
この人情の温かさは変わらずにあってほしいものだ。
酒を飲んで一眠りするとすてに夜半、
川岸の風の音は静かになりつつある。

ならば、明日はきっと淮陰わいいん県にまで行けるだろう。
 その市場に、名産の肥えた白魚しらうおが出ているに違いない。
 我が行たびはもとより南も北もなく、
 たまたま意こころに適かなったところが行きたかったところなのだ。
 波ほうが澎湃と押し寄せ、船の窓を終夜揺らしたところで、
 心配することは何もない。
 妻や子等にも憂いうれの様子はない。
 さしあたり質しちに入れられる衣類がまだ箱にあるのだから。

■ 【03-4-036】 十月十六日記所見

【解題】淮陰わいいん県を過ぎたあたりで、10月16日に見たままと記したという詩。

【訳文】

風が空高くを吹き、月が暗く曇り、
 雲も水も黄色味を帯びていた。
 淮陰わいいんを夜に発ち、山陽さんように着いたのはその翌朝。
 細かい雨のような暁の霧が漂い、
 朝日が出てても光は弱く寒々しい。
 霧が巻き上がって雲の内に収まったのはすでに正午の頃、
 北からの冷たい風が、人を押し倒さんばかりに吹き出し、
 たちまち窓にばらばらと音がして電が落ちてきた。
 突然のことに人々は避ける間もなく、
 市場はひっくり返るような騒ぎで、

売り物があちらこちらに乱れ飛ぶ。

そこに雷が、壁を崩さんばかりに一発鳴り響き、

それで事が終わった。

「今夜一杯いかがでしょうか」

県知事さんからのお迎えが呼びこぎて来て、

宴席の座が定まると、

折よく夕日が射し込んで廊下を明るく照らし出す。

百種の変異、怪異もすっかり消え去って、

全てが夢ではなかったかと疑われる。

人々はいう。

「竜が古びた穴に飽きて、全部の魚を引き連れて移って行ったのであります」

それは何の兆しなのか、黒か白かと論じ合うのだが、

我等愚かな儒者は揃いも揃って無知であるから、

經典の文句を好き勝手に引用して言い募るだけである。

その中で、ただ県知事の言葉だけは用いるべき価値がある。

「寒くなり、雪が降るようなこの時候には、

まさしく何もよりも酒がよいとの徴でありますな」

■ 【03-4-037】 広陵会三同舎、各以其字為韻、仍邀同賦

【解題】船は広陵〔揚州〕に到着した。揚州は大運河の長江側の入り口近くにあり、古くからの大都市であった。特に、隋の煬帝はこの地を酷愛し、そのもとで揚州は大きく発展し、華麗な町としてのイメージが形成された。このときの州知事は銭公輔という人で、蘇軾と気の合いそうな3人を呼び集めてくれた。蘇軾は3人の字から1文

字をとって韻字として1人に1首ずつ詩を贈った。第一首は劉攽^{りゅうはん あざな こうふ} [字は貢父] について詠んだ。かつて劉攽が都から出て行ったときに蘇軾は送別の詩を詠んでいる [→作品番号 03-3-018]。この詩は「貢」を韻にして、子貢^{しこう}という孔子^{こうし}の弟子の名に使っている。

【訳文】

其の一 劉貢父^{りゅうこうふ}

去る年に都で貴君を見送った際に、
 貴君と私の酔っての言葉は、
 人々を驚かせたものだった。
 今や二人とも漂泊の身となり、
 筆硯の世界に遊ぶのもままならない。
 我が命運は天の定めによるのであろうか。
 古^{いにしへ}の弓の達人も己の技だけで必ず的を射抜いたのではなかったと聞く。
 詩を作って思いを晴らそうとしても、
 誹^{そし}りの声が物憂くてならない年齢になってしまったようだ。
 孔子^{こうし}は、若い者はとかく雄弁を誇りたがると、
 口先ばかりが達者な弟子^{しこう} [子貢] を常に叱っていた。
 矢で一度翼を傷付けられた鳥は、
 飛ぼうとしても前の痛みを念ってしまうという。
 広陵^{こうりょう}で貴君とこして三日飲み続け、
 全てが夢のように思えてくる。
 誉れ高き州知事のもとので、

良い酒を酌んで早くも春の心地がすればなおさらだ。

互いに手を振って入り江で別れる時がきて、

羨ましく思うのは、

貴君が都を去って以来ここで安閑としていること。

私が行く杭州は、どうも何かと騒がしいらしい……

【解題】第二首は孫洙^{そんしゅ} [字は巨源^{きょげん}] について詠んだ詩。孫洙は早くから歐陽脩^{おうようしゅう}に認められて官界で活躍し、王安石^{おうあんせき}の新法に反対して地方官として都の外に出ていた。劉攽^{りゅうはん}とは対照的に孫洙は無口だったようだ。この詩は「源」を韻として用いている。

【訳文】

其の二 孫巨源^{そんきょげん}

三年の間、私は都にいて、

その時の憔悴ぶりにきたら、

今思うと、言いやかないぐらいだった。

都の街路に舞う塵の中でびしょりと汗をかき、

ふらふらと馬の歩みに任せるばかりのこともあった。

人というものは付き合いの良さをとかく貴ぶので、

少しばかり同調しないだけでも恨みを生じてしまう。

昔からの友人でさえ、

私には近付かないようになってしまった。

南にきて、気持ちは実にかかりとして、

ただ一緒に語る相手がいけないのを残念に思っていた。

こうりょう
 広陵の町で、こうして劉君りゅうや孫君そんに会えるとは、
 思いかげないことであった。

仲間のように見えても、
 いささか趣おもむきが異なれば一緒にはいりにくいもので、
 例えばオランウータンとチンパンジーがそうなのだろう。
 我々のここでの集いを長く続けると、
 疑われて排斥されることになりかねないのを恐れる。
 私は偏屈であるが、貴君にはこたわるところがない。
 違いはあっても、交わりを断つということにはならない。
 私はさらに南東に向かうけれど、
 ほんのしばらく貴君と離れるだけのことである。

【補足】 [ここでオランウータンとチンパンジーと訳したのは王孫おうそんと猿えん。王孫おうそんは猴こうの別名で、猴はおとなしく、猿はさわがしく、両者は同じ山にはいられないとされた。明らかに改革派と非改革派についていつている。都を離れて気の合う人々と自由に語り、自由に詩を詠めることを蘇軾は何よりも喜んだのだ]

【解題】 第三首は劉摯りゅうし [字は莘老あざな しんろう] について詠んだ詩。劉摯りゅうしは王安石おうあんせきに才能を認められて拔擢されたのだが、すぐに新法を鋭く批判したために、地方の小官に落とされてしまった。この詩は「莘」を韻としている。

【訳文】

其三りゅうしんろう
 劉莘老

こころりょう
 ここ広陵でかつて会ったときは、

貴君は地域の重要な職務を勤めていた。

二度目に皇城で会ったときは、

貴君は堂々とした高官の衣服を身に付けていた。

そして三度目に会った今の貴君は、

都落ちの境遇にある。

朝には、雲の峰の高いところであって、

宰相と席を一つにするほどであったのに、

暮れには、水のほどりに追いやられてしまったのだ。

しかし、貴君は喜びも怒りも見せることなく、

真に「できる人」といべきである。

士^したる者は、

元来田園にいるべきであって、

世に出て用いられようとすると大いに誤るものなのだ。

まじないに使う草で編んだ犬を見るがよい。

草の犬は飾り立てられていい気になっているようだが、

まじないが終わってしまえば道ばたに捨てられ、

人々に踏みこられるのである。

さあ、もう年の暮れは近い。

故郷に帰って耕作を始めるによい時期である。

■ 【03-4-038】 遊金山寺

【解題】揚^{よう}州からは長^{ちやうこう}江北岸まではわずかな距離で、蘇軾は11月初旬に長江を渡つて南岸の潤州〔鎮江〕に到った。潤州には、鎮江三山といわれる名所があり、最初に

三山のうちの金山きんざんに登った。当時の金山は陸地から離れた島であった。

【訳文】

我が家があるのは、

長江ちやうこうの水が初めて源を發するあたり――

官界に遊ぶ身となって、

長江の水が海に入るのを見送るようこしてここにまできた。

聞ところでは、

海からの潮が遡るときには高さが一丈ほどにもなるという。

冬の今は川の水位が下がっているので、

砂の上に流れの痕跡が認められるだけだ。

金山きんざんの南側の水際に、

天下第一の名水とされる中冷泉ちゆうれいせんがあり、

それを囲む石の盤は、

波濤に従って見えたり見えなかつたりしている。

金山の絶頂に登り、

試みに郷里の方角を見る。

長江の南側も長江の北側も、

ただただ青い山並み連なっている。

旅愁に駆られ、

夜になるのを恐れて陸に歸る船を尋ねる。

山の僧は、

「せかくですから、落日を御覽なさいませ」

と、ねんごろに引き留める。

かくて、日が長江の彼方へと沈み行くと、

わずかな風によって、

皮革の皺のような細かな波模様が、

ばんけい
万頃にわたって広がる。

空に、無数の千切れ雲が、

魚の尾のように赤く染まる。

細い新月は薄暗いかげ魄が伴い、

その月もじきに落ちてしまうと、

天は漆黒の闇となる。

その時に、

長江の中央にたいまつ松明のような明るい何かが生じる。

飛ぶばかりの焰が山を照らし、鳥を驚かせる。

寺に戻って床に伏せると、

あの火が何であったのか、

心に納得できるどころがなく、

思案の余り嘆息する。

き鬼が為したのでもなく、

人が為したのでもなく、

ついに何物であるのか。

金山より見る川と山はこのようであるのに、

自分は郷里のびざん眉山に帰ろうとしていない。

だから、長江の神が異変を示して、

自分の頑かたくなな心を驚かせようとしたのだろうか。

ならば、私かわは江の神に謝ろう。

「ただ食うためにやむをえずこしているのです。

暮らすに足りるだけの田がありませんから、

もしも帰らないでいるとしたら、

誓って、長江の水を全部飲み干してみせましょう」

【補足】〔(1) 金山きんざんの頂上からの眺望は天下の絶景とされるが、その高さは実は 44 メートルである。(2) 新月はくの魄とは、地球からの反射光で月の暗い部分がうっすら見えるのをいう。昔の人はそれに神秘的なものを感じたのだろう。(3) 夜の川の中央に現われた焰の正体は不明だが、蘇軾は見たまを詠んだと添え書きをしている。(4) 余計な話だが、中国語の「鬼き」と日本語の「鬼おに」とは全く異なり、「鬼き」は死者の靈魂、あるいは幽霊である。幽霊といっても、薄気味悪くぼんやりとした存在ではなく、もっと生々しく、一見すると、生きている者と大差がない。「鬼き」は人に対して福をもたらすこともあるし、禍をもたらすこともある。木の精霊のような死者の世界のものではなくて現世のものは「神しん」であるのだが、どちらも超自然的な現象を引き起こすことがあるので、「鬼神きしん」としてまとめて言い現わすことも多い〕

■ 【03-4-039】自金山放船至焦山

【解題】金山きんざんから船で、鎮江ちんこう三山さんざんの二つ目の焦山しょうざんに渡った。

【訳文】

金山きんざんの楼観は堂々として奥深く、

鐘を撞き、太鼓を打つと、

向こう岸の淮^{わい}河南方一帯に響きわたる。

私は金山に泊まり、

ここにまで来ていながら焦^{しょう}山に行かないのでは、

我が心に恥ぢねばならぬと思うようになり、

焦山には何かあるのかと尋ねた。

「そうですね、立派な竹がありませんか。

それと、薪を採ったり、水を汲んだりする僧が二、三人ばかりいますか。

しかし、雲から土でも降りかねないようなこの空模様、

しかも川波が高く、

船で焦山に渡る者など誰もおりません。

せいぜい川べりの農民が、

春の蚕がよく育つようこと祈りに行くくらいではありませんか」

それを聞いて、

一緒に金山に遊んだ人々は、

ここだけでも十分だといったのだが、

ならば、私だけでも行こうと決意したのだ。

お上の勤めを為すときには、

その報酬があるかなかるが、

川を渡り、湖を渡る労を断じて厭うものではない。

まして自分で行きたいと思うところなのだ。

朝、私は船を雇い、金山を発った。

風はなく、自ずから波が湧いて、我が船を後押ししてくれる。

流れの中ほどで船歌が湧き、

酔ったような心持ちでその声を聞く。

山から老いた僧が一人下ってきて、

「なんとまあ、こんな日に、客人がこられましたわい」

驚きつつ出迎えてくれる。

老僧と話すうちに、笑って喜び合うのは、

いつの間にか二人とも郷里のなまりになっていることだ。

老僧はいう。

「久しくここでは弥勒菩薩みろくぼさつ様とだけ一緒に過ごし、

郷里のことなどすっかり忘れておりました」

腹がぐちくなるほどではなくとも、

もてなしてくれた山の食べ物はずいぶん、

紙を突っ掛けただけの夜具でも、

疲れていたので暖かくぐっすり眠れる。

かくして別れの朝に、私は老僧にいう。

「山林に生きて飢えに苦しむのは昔からありましよう。

田がないから身を退くことができないとの言い訳をして、

実のところは俸禄を貪るような人間ではないと思っております。

その昔、三回左遷させられ、ついに職を辞した人がいましたけれど、

その回数には、私はまだ達していません。

その昔、七つの耐えられないことを挙げて職を辞した人がいましたけれど、

それくらい数なら、私にはもうすでにあります。

行く行くは官服を自ら脱ぐ時がきつとくるでしょう。

どうか私のために、

庵を立てるによい場所をこの山の中に残しておいてください」

【補足】〔蘇軾自身の注で、このときの焦山しょうざんの寺の長老は蜀しよくの人であると添え書きがある〕

■ 【03-4-040】 甘露寺

【解題】鎮江三山ちんこうさんざんの三つめは北固山ほくこざんで、そこには甘露寺かんろじがある。

【訳文】

長江ちょうこうがあって、山もあるのなら、

結構でなからうはずがない。

好風景であるだけに、一人だけで遊ぶとなると、

気持ちが昂ぶり過ぎてしまいかねない。

ともに行く人がいるのなら、

もとよりまことによろしくないはずがないであろう。

甘露寺かんろじに行こうとして、

官職に就いている方々には暇を持って余している人がなく、

面識のない二人ではあつたけれど、

喜んで鞍を並べて北固山ほくこざんに向かうことになった。

古い歴史のあるこの山は、

そのまま一つの城のようになっいて、

階段が層を成して山を巡り、

朱色の欄干がぐるぐる巻きになっている。

その先端で大地が窮まって断崖となり、

その上に楼台が立ち、
楼台の尖端の一点の上から大空が広がり、
空の下に水が広がっている。
楼台から一覽するなら、
数州を呑むばかり、
山が長く連なり、まんまん かわ 漫漫と江が流れる。
対岸を望み見ると、
霧の彼方にぼんやりと竿のようなものがあるのは大明寺であろうか。
甘露寺の庭には、
羊が伏すような弓なりの岩がある。
遥かに想うのは臥竜公[諸葛孔明]のこと、
天下を鎮める策を携えてここに来て、
獯猛な犬に譬えられた孫權をたった一言で説き伏せ、
もう一言用いただけで老獯な曹操を敗走させた。
諸葛孔明の名は高く、
心に想わせるものは多くあるのだが、
事はすでに去り行き、
目に見える形で留まっているものはない。
巨大な二つの鉄の釜があり、
これは梁の武帝が寄進したものという。
ひやくこく 百斛の水を湛えて、皇帝の威信を示したそれも、
長年の雨にさらされて錆びて腐りかけ、
虚しく向き合っているだけである。

しゅうだい かなえ
周代の巨大な青銅の鼎も川に沈み、

かんだい さら
漢代の巨大な銅の盤も土に埋もれ、

山や川でさえもとの形態を失っているのに、

甘露寺のこの鉄の釜ばかりがないぜ今も残っているのだろうか。

しん ちやうそうよう ほきつぞう
晋の時代に張僧繇が描いた六枚の菩薩像があり、

その衣は氷のように真っ白である。

裏側にもまた画があり、

観る者はそれが壮麗すぎると感じる。

せい りくたん ひ
破れた板には斉の時代の陸探微が描いた画があつて、

ひい
青い狻[獅子のような伝説の獣]がじゃれつき合い、

か らん
その上に二人の天人が翔ける鸞のように手を振っている。

墨の痕はもはや消えようとしているけれど、

その完璧な造形は不朽である。

とう りとくゆう
唐の時代の李徳裕を描いた画像には、

りん
凜としたその英姿が(ありあり)と残っている。

その李徳裕が親しく植えた柏が、

人を寄せつけないまでにあたりから抜きん出て高く聳え、

その枝は雲を支え、根は地中深くに入り込んでいる。

この地では草を刈ったあとから石碑が出てきたこともあれば、

崩れた崖から金の棺が出てきたこともある。

天がかいたく隠し続けるのは難しくはないであろうに、

どのような理由でまたその姿を現わしたりするのだろうか。

諸葛孔明、孫権、梁の武帝、李徳裕の四人の英雄は、

皆竜であり虎であって、その残した痕は今もくっきりと残っている。

四人が活躍した時代は争奪を専らとして、

安んじられるときは少しもなかった。

興廢は造物者の手の内にあり、

世の移り変わりについて、

誰かかおざなりにいえるようなことはない。

昔も今も大きな法則は変わらないのだ。

ところが、凡庸な者に限って、

難しい事を為そうとする。

昔の英雄に遥かに及ばない後世の凡人は、

いたずら
徒に辛酸を嘗めるばかりである。

いにしえ
古の琴の名手は、

久遠の時間の推移を想わせて人を泣かせたという。

その音を聞かずとも、

かつて阮籍が無限の思いを込めて、

「もはや英雄はいない」

と、叫んだのに声を合わせて、

私は深く慨嘆せずにはいられない。

【補足】 [(1) 長いこの詩の終わりに名が挙がっている阮籍げんせきは「竹林の七賢人ちくりん しちけんじん」の一人 [→作品番号 01-2041]。阮籍は、楚の項籍せうせきと漢の劉邦りゅうほうが争った古戦場に立って「もはや英雄はいない」と叫んだ。それは阮籍自身も含めて、時代の混迷から国家を救い出せるような人物が一人もないことを嘆いたものであった。そして、蘇軾そくは甘露寺かんろじに遺された様々なものを見て、やはりいまの時代を正す人物はいないと嘆いたの

である。(2) 蘇軾はこの後、蘇州^そを經由して、11月28日に杭州^{こう}に到着した]

第3章 原文

詩のテキストは孔凡礼点校『蘇軾詩集』（1982年）に、賦のテキストは李之亮箋注『蘇軾文集編年箋注』（2011年）に、詞のテキストは薛瑞生箋證『東坡詞編年箋證』（1998年）に準拠し、その他の散文類は省略する。

■ 【03-1-001】 謝蘇自之謝蘇自之惠酒

高士例須憐麴蘖、此語嘗聞退之說。

我今有說殆不然、麴蘖未必高士憐。

醉者墜車莊生言、全酒未若全於天。

達人本自不虧欠、何暇更求全処全。

景山沈迷阮籍傲、畢卓盜竊劉伶顛。

貪狂嗜怪無足取、世俗喜異矜其賢。

杜陵詩客尤可笑、羅列八子參群仙。

流涎露頂置不說、為問底処能逃禪。

我今不飲非不飲、心月皎皎長孤圓。

有時客至亦為酌、琴雖未去聊忘弦。

吾宗先生有深意、百里雙罌遠將寄。

且言不飲固亦高、拳世皆同吾獨異。

不如同異兩俱冥、得鹿亡羊等嬉戲。

決須飲此勿復辭、何用区区較醒醉。

■ 【03-1-002】 入館

黃省文書分道山、靜伝鐘鼓建章閑。

天邊玉樹西風起、知有新秋到世間。

■ 【03-1-003】 亡妻王氏墓誌銘

■ 【03-1-004】 贈蔡茂先

京城三日雨留人、吳市門前訪子真。

赤腳長須俱好事、新詩軟語坐生春。

鄴侯久有牙簽富、太史猶探禹穴新。

不惜為君揮尺素、却憂善守備三隣。

■ 【03-1-005】 辦法帖

■ 【03-1-006】 蘇廷評行狀

■ 【03-1-007】 書摹本蘭亭後

■ 【03-1-008】 油水頌

■ 【03-1-009】 四菩薩閣記

■ 【03-1-010】 書王石草書

■ 【03-1-011】 上韓魏公乞葬董佖書

■ 【03-2-001】 与子明兄

■ 【03-2-002】 送任佖通判黃州兼寄其兄孜

吾州之豪任公子、少年盛壯日千里。
無媒自進誰識之、有才不用今老矣。
別來十年學不厭、誦破萬卷詩愈美。
黃州小郡夾溪谷、茅屋數家依竹葦。
知命無憂子何病、見賢不薦誰當恥。
平泉老令更可悲、六十青衫貧欲死。
桐鄉遺老至今泣、潁川大姓誰能篋。
因君寄聲問消息、莫對黃鷄矜爪觜。

■ 【03-2-003】 秀州僧本瑩靜照堂

鳥囚不忘飛、馬繫常念馳。
靜中不自勝、不若聽所之。
君看厭事人、無事乃更悲。
貧賤苦形勞、富貴嗟神疲。
作堂名靜照、此語子謂誰。
江湖隱淪士、豈無適時資。
老死不自惜、扁舟自娛嬉。
從之恐莫見、況肯從我為。

■ 【03-2-004】 石蒼舒醉墨堂

人生識字憂患始、姓名粗記可以休。
何用草書誇神速、開卷恂怛令人愁。
我嘗好之每自笑、君有此病何能瘳。
自言其中有至樂、適意無異逍遙遊。
近者作堂名醉墨、如飲美酒消百憂。
乃知柳子語不妄、病嗜土炭如珍羞。
君於此芸亦云至、推牆敗筆如山丘。
興來一揮百紙盡、駿馬倏忽踏九州。
我書意造本無法、点画信手煩推求。
胡為議論独見佞、隻字片紙皆蔽收。
不減鍾張君自足、下方羅趙我亦優。
不須臨池更苦学、完取絹素充衾綯。

■ 【03-2-005】 王頤赴建州錢監求詩及草書

我昔識子自武功、寒宵夜語樽酒同。
酒闌燭盡語不尽、倦僕立寐僵屏風。
丁寧勸学不死訣、自言親受方瞳翁。
嗟余聞道不早悟、醉夢顛倒随盲聾。
邇來憂患苦摧剥、意思蕭索如霜蓬。
羨君顏色愈少壯、外慕漸少由中充。
河車挽水灌腦黑、丹砂伏火入頰紅。
大梁相逢又東去、但道何日辞樊籠。

未能便乞勾漏令、官曹似是錫与銅。
留詩河上慰離別、草書未暇縁恩慙。

■ 【03-2-006】 議学校貢挙状

■ 【03-2-007】 李仲蒙哀詞

■ 【03-2-008】 諫買浙燈状

■ 【03-2-009】 上神宗皇帝書

■ 【03-2-010】 跋王鞏所收藏真書

■ 【03-2-011】 跋王晋卿所藏蓮華經

■ 【03-3-001】 跋内教博士水墨天竜八部図卷

■ 【03-3-002】 次韻楊褒早春

窮巷淒涼苦未和、君家庭院得春多。
不辭瘦馬衝殘雪、來聽佳人暗踏莎。
破恨徑須煩麴蘖、增年誰復怨羲娥。
良辰樂事古難並、白髮青衫我亦歌。
細雨郊園聊種菜、冷官門戶可張羅。

放朝三日君恩重、睡美不知身在何。

■ 【03-3-003】 次韻柳子玉見寄

薄雷輕雨曉晴初、陌上春泥未濺裾。

行樂及時雖有酒、出門無侶漫看書。

遙知寒食催歸騎、定把鷓鴣載後車。

他日見邀須強起、不忘辭病似相如。

■ 【03-3-004】 再上皇帝書

■ 【03-3-005】 答劉巨濟書

■ 【03-3-006】 与楊濟甫

■ 【03-3-007】 擬進士對御試策

■ 【03-3-008】 送錢藻出守婺州得英字

老手便劇郡、高懷厭承明。

聯紆東陽綬、一濯滄浪纓。

東陽佳山水、未到意已清。

過家父老喜、出郭壺漿迎。

子行得所願、愴恨居者情。

吾君方急賢、日旰坐邇英。

黄金招棗毅、白璧賜虞卿。
子不少自貶、陳義空崢嶸。
古稱為郡棗、漸恐煩敲撈。
臨分敢不尽、醉語醒還驚。

■ 【03-3-009】送安惇秀才失解西歸

旧書不厭百回誦、熟誦深思子自知。
他年名宦恐不免、今日棲遲那可追。
我昔家居断還往、著書不復窺園葵。
搗來東游慕人爵、棄去旧學從兒嬉。
狂謀謬算百不遂、惟有霜鬢來如期。
故山松柏皆手種、行且拱矣歸何時。
万事早知皆有命、十年浪走寧非癡。
与君未可較得失、臨別惟有長嗟咨。

■ 【03-3-010】与子明兄

■ 【03-3-011】書綠筠亭詩

愛竹能延客、求詩剩掛牆。
風梢千蠹亂、日影万夫長。
谷鳥驚棋響、山蜂識酒香。
只忘陶靖節、会聽北窓涼。

■ 【03-3-012】 送呂希道知和州

去年送君守解梁、今年送君守歷陽。
年年送人作太守、坐受塵土堆胸腸。
君家聯翩三將相、富貴未已今方將。
鳳雛驥子生有種、毛骨往往伝諸郎。
觀君嶮郁負奇表、便合劍佩趨明光。
胡為小郡屢奔走、征馬未解風帆張。
我生本是便江海、忍恥未去猶彷徨。
無言贈君有長嘆、美哉河水空洋洋。

■ 【03-3-013】 夜直秘閣呈王敏甫

蓬瀛宮闕隔埃氛、帝樂天香似許聞。
瓦弄寒蟾鴛臥月、樓生晴靄鳳盤雲。
共誰交臂論今古、只有閑心對此君。
大隱本來無境界、北山猿鶴謾移文。

■ 【03-3-014】 跋文与可墨竹

■ 【03-3-015】 朱壽昌梁武讖贊偈

■ 【03-3-016】 墨君堂記

■ 【03-3-017】 送蔡冠卿知饒州

吾觀蔡子与人遊、掀脛笑語無不可。
平生儻蕩不驚俗、臨事迂闊乃過我。
橫前坑阱衆所畏、布路金珠誰不裹。
爾來變化驚何速、昔号剛強今亦頗。
鄰君獨守廷尉法、晚歲卻理鄱陽柁。
莫嗟天驥逐羸牛、欲試良玉須猛火。
世事徐觀真夢寐、人生不信長轆轤。
知君決獄有陰功、他日老人酬魏顆。

■ 【03-3-018】 送劉放倅海陵

君不見阮嗣宗臧否不掛口、
莫誇舌在齒牙牢、是中惟可飲醇酒。
誦書不用多、作詩不須工、
海邊無事日日醉、夢魂不到蓬萊宮。
秋風昨夜入庭樹、蓴糸未老君先去。
君先去、幾時回。
劉郎忘白髮、桃花開不開。

■ 【03-3-019】 送曾子固倅越得燕字

醉翁門下土、雜選難為賢。
曾子獨超軼、孤芳陋群妍。
昔從南方來、与翁兩聯翩。
翁今自憔悴、子去亦宜然。

賈誼窮適楚、樂生老思燕。

那因江鱸美、遽厭天庖膾。

但苦世論隘、聒耳如蝸蟬。

安得万頃池、養此橫海鱣。

■ 【03-3-020】次韻王誨夜坐

愛君東閣能延客、顧我閑官不計員。

策杖頻過如未厭、卜居相近豈辭遷。

莫將詩句驚搖落、漸喜樽壘省撲緣。

待約月明池上宿、夜深同看水中天。

■ 【03-3-021】書六一居士伝後

■ 【03-3-022】跋文与可草書

■ 【03-3-023】与子明兄

■ 【03-3-024】送章子平詩敘

■ 【03-3-025】送呂行甫司門倅河陽

結交不在久、傾蓋如平生。

識子今幾日、送別亦有情。

子生公相家、高義久崢嶸。

天才既超詣、世故亦屢更。
譬如追風驥、豈免羈与纓。
念我山中人、久与麋鹿并。
誤出掛世網、拳動俗所驚。
歸田雖未果、已覺去就輕。
河陽豈雲遠、出處恐異程。
便當從此別、有酒無徒傾。

■ 【03-3-026】 書呂行甫墨顛

■ 【03-3-027】 書茶墨相反

■ 【03-3-028】 与子明兄

■ 【03-3-029】 与楊濟甫

■ 【03-4-001】 送文与可出守陵州
壁上墨君不解語、見之尚可消百憂。
而況我友似君者、素節凜凜欺霜秋。
清詩健筆何足數、逍遙齊物追莊周。
奪官遣去不自沈、曉梳脫髮誰能收。
江邊亂山赤如赭、陵陽正在千山頭。
君知遠別懷抱惡、時遣墨君消我愁。

■ 【03-4-002】 玉堂硯銘

■ 【03-4-003】 題趙屺屏風与可竹

■ 【03-4-004】 朱寿昌郎中、少不知母所在、刺血写經、求之五十年、去歲得之蜀中。以詩賀之

嗟君七歲知念母、憐君壯大心愈苦。

羨君臨老得相逢、喜極無言淚如雨。

不羨白衣作三公、不愛白日昇青天。

愛君五十著彩服、兒啼卻得償當年。

烹鼈為炙玉為酒、鶴髮初生千萬壽。

金花詔書錦作囊、白藤肩輿簾蹙繡。

感君離合我酸辛、此事今無古或聞。

長陵揭來見大姊、仲孺豈意逢將軍。

開皇苦桃空記面、建中天子終不見。

西河郡守誰復譏、潁谷封人羞自薦。

■ 【03-4-005】 韓續酷刑

■ 【03-4-006】 淨因院画記

■ 【03-4-007】 送劉道原歸觀南康

晏嬰不滿六尺長、高節万仞陵首陽。
青衫白髮不自嘆、富貴在天那得忙。
十年閉戶樂幽獨、百金購書收散亡。
搗來東觀弄丹墨、聊借旧史誅姦強。
孔融不肯下曹操、汲黯本自輕張湯。
雖無尺箠与寸刃、口吻排擊含風霜。
自言靜中閱世俗、有似不飲觀酒狂。
衣巾狼藉又屢舞、傍人大笑供千場。
交朋翩翩去略盡、惟我与子猶彷徨。
世人共棄君獨厚、豈敢自愛恐子傷。
朝來告別驚何速、歸意已逐征鴻翔。
匡廬先生古君子、掛冠兩紀鬢未蒼。
定將文度置膝上、喜動隣里烹豬羊。
君歸為我道姓字、幅巾他日容登堂。

■ 【03-4-008】 賀歐陽少師致仕啓

■ 【03-4-009】 与子明兄

■ 【03-4-0010】 与宝月大師

■ 【03-4-011】 王仲儀真贊

■ 【03-4-012】 題晉人帖

■ 【03-4-013】 与堂兄

■ 【03-4-014】 出都來陳、所乘船上有題小詩八首、不知何人作有感余心者、聊為和之

其一

蛙鳴青草泊、蟬噪垂楊浦。

吾行亦偶然、及此新過雨。

其二

鳥樂忘置學、魚樂忘鉤餌。

何必挾所安、滔滔天下是。

其三

煙火動村落、晨光尚熹微。

田園處處好、淵明胡不歸。

其四

我行無疾徐、輕楫信溶漾。

船留村市闌、聞發寒波漲。

其五

舟人苦炎熱、宿此喬木灣。

清月未及上、黒雲如頽山。

其六

万竅号地籟、衝風散天池。

喧豗瞬息間、還掛斗与箕。

其七

潁水非漢水、亦作蒲萄緑。

恨無襄陽兒、令唱銅鞮曲。

其八

我詩雖云拙、心平声韻和。

年来煩惱尽、古井無由波。

■ 【03-4-015】次韻子由初到陳州二首

其一

道喪雖云久、吾猶及老成。

如今各衰晚、那更治刑名。

懶惰便樗散、疏狂托聖明。

阿奴須碌碌、門戶要全生。

其二

旧隱三年别、杉松好在不在。

我今尚眷眷、此意恐悠悠。

閉戶時尋夢、無人可說愁。

還來送別處、雙淚寄南州。

■ 【03-4-016】次韻子由柳湖感物

憶昔子美在東屯、數間茅屋蒼山根。

嘲吟草木調蠻獠、欲與猿鳥爭啾喧。

子今憔悴衆所棄、驅馬獨出無往還。

惟有柳湖萬株柳、清陰與子供朝昏。

胡為譏評不少借、生意凌挫難為繁。

柳雖無言不解慍、世俗乍見忝憮然。

嬌姿共愛春濯濯、豈問空腹修蛇蟠。

朝看濃翠傲炎赫、夜愛疏影搖清圓。

風翻雪陣春絮亂、蠹響啄木秋聲堅。

四時盛衰各有態、搖落淒愴驚寒溫。

南山孤松積雪底、抱凍不死誰復賢。

■ 【03-4-017】次韻張安道讀杜詩

大雅初微欠、流風困暴豪。

張為詞客賦、變作楚臣騷。

展轉更崩壞、紛綸閱俊髦。

地偏蕃怪產、源失亂狂濤。

粉黛迷真色、魚蝦易豢牢。

誰知杜陵傑、名与謫仙高。
 掃地收千軌、争標看兩艘。
 詩人例窮苦、天意遣奔逃。
 塵暗人亡鹿、溟翻帝斬鰲。
 艱危思李牧、述作謝王褒。
 失意各千里、哀鳴聞九臯。
 騎鯨遁滄海、捋虎得綈袍。
 巨筆屠竜手、微官似馬曹。
 迂疏無事業、醉飽死遊遨。
 簡牘儀刑在、兒童篆刻勞。
 今誰主文字、公合把旌旄。
 開卷遙相憶、知音兩不遭。
 般斤思郢質、鯤化陋儻濠。
 恨我無佳句、時蒙致白醪。
 殷勤理黃菊、未遣没蓬蒿。

■ 【03-4-018】 送張安道赴南都留台

我公古仙伯、超然羨門姿。
 偶懷濟物志、遂為世所縻。
 黃竜遊帝郊、簫韶鳳來儀。
 終然反溟極、豈復安籠池。
 出入四十年、憂患未嘗辭。
 一言有歸意、闔府諫莫移。

吾君信英睿、搜士及茅茨。
無人長者側、何以安子思。
歸來掃一室、虛白以自怡。
遊於物之初、世俗安得知。
我亦世味薄、因循鬢生糸。
出處良細事、從公當有時。

■ 【03-4-019】 傅堯俞濟源草堂

微官共有田園興、老罷方尋隱退廬。
栽種成陰十年事、倉黃求買萬金無。
先生卜築臨清濟、喬木如今似畫圖。
隣里亦知偏愛竹、春來相與護竜雛。

■ 【03-4-020】 陸竜図詵挽詞

挺然直節庇岷岷、謀道從來不計身。
屬纊家無十金產、過車巷哭六州民。
塵埃輦寺三年別、樽俎岐陽一夢新。
他日思賢見遺像、不論宿草更沾巾。

■ 【03-4-021】 次韻柳子玉過陳絕糧二首

其一

風雨蕭蕭夜晦迷、不須鳴叫強知時。
多才久被天公怪、闕食惟應爨婦知。

杜叟挽衣那及脛、顏翁食粥敢言炊。
詩人情味真嘗遍、試問於今底事欠。

其二

如我自觀猶可厭、非君誰復肯相尋。
凶書跌宕悲年老、燈火青熒語夜深。
早歲便懷齊物意、微官敢有濟時心。
南行千里成何事、一聽秋濤萬鼓音。

■ 【03-4-022】 書李簡夫詩集後

■ 【03-4-023】 記鉄墓厄台

■ 【03-4-024】 陪歐陽公燕西湖

謂公方壯鬚似雪、謂公已老光浮頰。
搗來湖上飲美酒、醉後劇談猶激烈。
湖邊草木新著霜、芙蓉晚菊爭煌煌。
插花起舞為公壽、公言百歲如風狂。
赤松共遊也不惡、誰能忍饑啖仙藥。
已將壽夭付天公、彼徒辛苦吾差樂。
城上烏棲暮靄生、銀缸晝燭照湖明。
不辭歌詩勸公飲、坐無桓伊能撫箏。

■ 【03-4-025】 歐陽少師令賦所蓄石屏

何人遺公石屏風、上有水墨希微跡。
不畫長林与巨植、独画峨嵋山西雪嶺上万歲不老之孤松。
崖崩澗絕可望不可到、孤煙落日相溟濛。
含風偃蹇得真態、刻画始信天有工。
我恐畢宏韋偃死葬虢山下、骨可朽爛心難窮。
神機巧思無所發、化為煙霏淪石中。
古來画師非俗士、摹写物像略与詩人同。
願公作詩慰不遇、無使二子含憤泣幽宮。

■ 【03-4-026】 錢塘勤上人詩集敘

■ 【03-4-027】 穎州初別子由二首

其一

征帆掛西風、別淚滴清潁。
留連知無益、惜此須臾景。
我生三度別、此別尤酸冷。
念子似先君、木訥剛且靜。
寡辭真吉人、介石乃機警。
至今天下士、去莫如子猛。
嗟我久病狂、意行無坎井。
有如醉且墜、幸未傷輒醒。
從今得閑暇、默坐消日永。

作詩解子憂、持用日三省。

其二

近別不改容、遠別涕霑胸。
咫尺不相見、實与千里同。
人生無離別、誰知恩愛重。
始我来宛丘、牽衣舞兒童。
便知有此恨、留我過秋風。
秋風亦已過、別恨終無窮。
問我何年歸、我言歲在東。
離合既循環、憂喜迭相攻。
悟此長太息、我生如飛蓬。
多憂髮早白、不見六一翁。

■ 【03-4-028】 十月二日、將至渦口五里所、遇風留宿

長淮久無風、放意弄清快。
今朝雪浪滿、始覺平野隘。
兩山控吾前、吞吐久不嘖。
孤舟繫桑本、終夜舞澎湃。
舟人更佻呼、弱纜恃菅蒯。
平生傲憂患、久矣恬百怪。
鬼神欺吾窮、戲我聊一噫。
瓶中尚有酒、信命誰能戒。

■ 【03-4-029】 出潁口初見淮山、是日至壽州

我行日夜向江海、楓葉蘆花秋興長。
長淮忽迷天遠近、青山久与船低昂。
壽州已見白石塔、短棹未轉黃茅岡。
波平風軟望不到、故人久立煙蒼茫。

■ 【03-4-030】 壽州李定少卿出錢城東竜潭上

山鴉噪处古靈湫、乱沫浮涎繞客舟。
未暇燃犀照奇鬼、欲將燒燕出潜虬。
使君惜別催歌管、村巷驚呼聚獼猴。
此地他年頌遺愛、觀魚並記老莊周。

■ 【03-4-031】 濠州七絕

其一 塗山

川鎖支祁水尚渾、地理汪罔骨應存。
樵蘇已入黃能廟、烏鵲猶朝禹会村。

其二 彭祖廟

跨歷商周看盛衰、欲將齒髮鬪蛇龜。
空餐雲母連山尽、不見蟠桃著子時。

其三 逍遙台

常怪劉伶死便埋、豈伊忘死未忘骸。
烏鳶奪得与螻蟻、誰信先生無此懷。

其四 觀魚台

欲將同異較錙銖、肝膽猶能楚越如。
若信万殊歸一理、子今知我我知魚。

其五 虞姬墓

帳下佳人拭淚痕、門前壯士氣如雲。
倉黃不負君王意、只有虞姬与鄭君。

其六 四望亭

敢請使君重起廢、落霞孤鶩換新銘。

其七 浮山洞

人言洞府是鰲宮、升降隨波与海通。
共坐船中那得見、乾坤浮水水浮空。

■ 【03-4-032】 泗州僧伽塔

我昔南行舟繫汴、逆風三日沙吹面。
舟人共勸禱靈塔、香火未收旗脚轉。
回頭頃刻失長橋、卻到龜山未朝飯。
至人無心何厚薄、我自懷私欣所便。

耕田欲雨刈欲晴、去得順風來者怨。
若使人人禱輒遂、造物忘須日千變。
我今身世兩悠悠、去無所逐來無戀。
得行固願留不惡、每到有求神亦倦。
退之旧云三百尺、澄觀所嘗今已換。
不嫌俗士污丹梯、一看雲山繞淮甸。

■ 【03-4-033】 如夢令

城上層樓曷巘。
城下清淮古汴。
拳手揖吳雲、
人与暮天俱遠。
魂斷、魂斷。
後夜松江月滿。

■ 【03-4-034】 龜山

我生飄蕩去何求、再過龜山歲五周。
身行万里半天下、僧臥一庵初白頭。
地隔中原勞北望、潮連滄海欲東游。
元嘉旧事無人記、故壘摧頽今在不。
〈宋文帝遣將拒魏太武，築城此山。〉

■ 【03-4-035】 發洪沢、中途遇大風、復還

風浪忽如此、吾行欲安歸。
 掛帆卻西邁、此計未為非。
 洪沢三十里、安流去如飛。
 居民見我還、勞問亦依依。
 携酒就船壳、此意厚莫違。
 醒来夜已半、岸木声向微。
 明日淮陰市、白魚能許肥。
 我行無南北、適意乃所祈。
 何勞弄澎湃、終夜搖窓扉。
 妻孥莫憂色、更有篋中衣。

■ 【03-4-036】十月十六日記所見

風高月暗水雲黃、淮陰夜發朝山陽。
 山陽曉霧如細雨、炯炯初日寒無光。
 雲收霧卷已亭午、有風北來寒欲僵。
 忽驚飛雹穿戶牖、迅駛不復容遮防。
 市人顛沛百買亂、疾雷一声如頽牆。
 使君來呼晚置酒、坐定已復日照廊。
 忼疑所見皆夢寐、百種變怪旋消亡。
 共言蛟龍厭旧穴、魚鱉隨徙空陂塘。
 愚儒無知守章句、論說黑白推何祥。
 惟有主人言可用、天寒欲雪飲此觴。

■ 【03-4-037】 広陵会三同舍、各以其字為韻、仍邀同賦

其一 劉貢父

去年送劉郎、醉語已驚衆。
如今各漂泊、筆硯誰能弄。
我命不在天、羿彀未必中。
作詩聊遣意、老大慵譏諷。
夫子少年時、雄弁輕子貢。
爾來再傷弓、戢翼念前痛。
広陵三日飲、相對怳如夢。
況逢賢主人、白酒潑春甕。
竹西已揮手、湾口猶屢送。
羨子去安閑、吾邦正喧闐。

其二 孫巨源

三年客京輦、憔悴難具論。
揮汗紅塵中、但隨馬蹄翻。
人情貴往返、不報生禍根。
坐令平生友、終歲不及門。
南來實清曠、但恨無与言。
不謂広陵城、得逢劉与孫。
異趣不兩立、譬如王孫猿。
吾儕久相聚、恐見疑排根。
我編類中散、子通真巨源。

絕交固未敢、且復東南奔。

其三 劉莘老

江陵昔相遇、幕府稱上賓。

再見明光宮、峨冠挹搢紳。

如今三見子、坎坷為逐臣。

朝遊雲霄間、欲分丞相茵。

暮落江湖上、遂與屈子隣。

了不見喜慍、子豈真可人。

邂逅成一飲、醉語出天真。

士方在田里、自比渭與莘。

出試乃大謬、芻狗難重陳。

歲晚多霜露、歸耕當及辰。

■ 【03-4-038】 遊金山寺

我家江水初發源、宦游直送江入海。

聞道潮頭一丈高、天寒尚有沙痕在。

中泠南畔石盤陀、古來出沒隨濤波。

試登絕頂望鄉國、江南江北青山多。

羈愁畏晚尋歸楫、山僧苦留看落日。

微風萬頃靴文細、斷霞半空魚尾赤。

是時江月初生魄、二更月落天深黑。

江心似有炬火明、飛焰照山棲鳥驚。

悵然歸臥心莫識、非鬼非人竟何物。
江山如此不歸山、江神見怪驚我頑。
我謝江神豈得已、有田不歸如江水。

■ 【03-4-039】 自金山放船至焦山

金山樓觀何耽耽、撞鐘擊鼓聞淮南。
焦山何有有修竹、采薪汲水僧兩三。
雲霾浪打人跡絕、時有沙戶祈春蠶。
我來金山更留宿、而此不到心懷慚。
同遊興盡決獨往、賦命窮薄輕江潭。
清晨無風浪自湧、中流歌嘯倚半酣。
老僧下山驚客至、迎笑喜作巴人談。
自言久客忘鄉井、只有彌勒為同龕。
困眠得就紙帳暖、飽食未厭山蔬甘。
山林飢餓古亦有、無田不退寧非貪。
展禽雖未三見黜、叔夜自知七不堪。
行當投劾謝簪組、為我佳處留茅庵。

■ 【03-4-040】 甘露寺

江山豈不好、獨遊情易闌。
但有相携人、何必素所歡。
我欲訪甘露、當途無閑官。
二子旧不識、欣然肯聯鞍。

古郡山為城、層梯轉朱欄。
樓台斷崖上、地窄天水寬。
一覽吞數州、山長江漫漫。
却望大明寺、惟見煙中竿。
很石臥庭下、穹窿如伏獮。
緬懷臥竜公、挾策事瑠鑽。
一談收獮子、再說走老瞞。
名高有余想、事往無留觀。
蕭翁古鉄鑊、相對空團團。
陂陀受百斛、積雨生微瀾。
泗水逸周鼎、渭城辭漢盤。
山川失故態、怪此能獨完。
僧繇六化人、霓衣掛冰紈。
隱見十二疊、觀者疑夸謾。
破板陸生画、青猊戲盤跚。
上有二天人、揮手如翔鸞。
筆墨雖欲尽、典刑垂不刊。
赫赫贊皇公、英姿凜以寒。
古柏親手種、挺然誰敢干。
枝撐雲峰裂、根入石窟蟠。
薤草得斷碑、斬崖出金棺。
瘞感豈不牢、見伏理可歎。
四雄皆竜虎、遺迹儼未刊。

方其盛壯時、爭奪肯少安。
廢興屬造物、遷逝誰控搏。
況彼妄庸子、而欲事所難。
古今共一軌、後世徒辛酸。
聊興宏武嘆、不待雍門彈。